

普通ですがなんですか？

だっちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この話は……

ごく普通のどこにでもいる普という男の子の話です。彼は今まで普通の生活だったが……

生徒会に入ってから普の人生は普通ではなくなっています!!!

目次

普通の始まり	1
現実でこんなことが……	6
まさかのラブコメ的な展開が？	12
生徒会の仕事は……	19
いつも通り普通!!	25
休みの日の過ごし方	30
結局普通に戻る……	36
やっと……生徒会らしいことを……	41
生徒会は忙しい……	47
52 まだまだやることがたくさん……	

夏期文化祭までやることがたくさんある	58
夏期文化祭が近づいている	64
準備どころじゃなくなってる	70
77 夏期文化祭まで残りわずか……	
夏期文化祭は終わりを告げる	84
夏期文化祭が終わればいつも通り	91
新しい仲間	98
新人の最初の仕事	106
暇だと思っていたが……	112
新たな仕事	118

次のイベントは？

126

さあ頑張りましょう。

133

初めての会議

139

フリーマーケットバトルの準備

146

フリーマーケットバトル
!!!!!!

153

逆転なるか？

160

生徒会にやってほしいBOX…

169

テスト勉強嫌い

177

テスト終了…次は体育祭

185

体育祭忙しい…

193

体育祭

199

生徒会にやってほしいBOXその2

304

208

優の初デート

216

めっちゃいい感じじゃない？

227

ダブルデート

237

デートも終わりを迎える

246

一方その頃…

253

一方その頃2

260

遠足の準備が始まる…

268

遠足の前に…？

275

勉強会でも勉強はめんどくさい

281

ぼっちの休日…

290

ぼっちのままテストを迎える。

297

桜さんとデート

304

デート in 大阪 | 311

デート in 大阪 その 2 | 319

デート in 大阪 その 3 | 326

デート in 京都 | 334

デート in 京都 その 2 | 346

デート in 京都 その 3 | 353

デートは終わってしまった…… | 学

校…… | 359

普通ですがなんですか？最後の遠足!!!

364

普通ですがなんですか？最後の遠足!!!

の 2 | 371

普通ですがなんですか？最後の遠足!!!

の 3 |

普通ですがなんですか？最終回 |

普通の始まり

この世には沢山の色々な性格をした人間がいる。運動ができる人や、勉強ができる人もいる。勉強ができると言つてもどのぐらいでできるかは人それぞれである。このように色々な人がこの世の中にいる。その中の一部の話である。

「はあーよく寝たー」

僕は高校一年生の野丸普（のまるふつ）である成績も普通で運動も普通色々なものが普通である、名前まで普通である、周りから見たらつまらない人間だ！だが、僕の友達にはすごい人がいる。成績優秀、スポーツ万能しかもイケメンの神島優（じんしまゆう）つて子がいる。※後に出てきます！

「僕は心の中で誰に話しかけてるんだ？そんなことより……」

近くに置いてあつた目覚まし時計を見た……

「ええええええええー遅刻だあああああ」

急いで支度をした。階段を駆け下りて玄関で靴を履き変えようとした時お母さんが来た。僕は無視して外へ走った。

「ちよつと、普く今日日曜日なのに……」

それに気づかず走っていた！それが運命の出会いをすることになるなんて僕はまだ知らなかった……

少し休憩しようとスマートフォンを開くそこでようやく日曜日だということに気がついた。

「えっ、日曜日やん」

その一言を呟きスマートフォンをしまつて来た道に戻っていった。

「このまま帰るのもあれだし本屋に行くか」

商店街の本屋に静かに向かっていった。この辺に行くところがあると云ったら商店街しかない。この街は都会でもない田舎でもないごく普通の街だ。本屋に着いて色々見回っていた。そこでひとつの本が見つかった。

「普通な人間へ」

なんだそれと心の中で思った。僕にぴったりかとも思い手に取ろうとした時……横から手は出てこなかった。やっぱラブコメ的な物はこの世にはないんだなと思った。そんなことを思いながらも本を買った。そのまま家に帰り先ほど買った本を読んでいた。

普通な人間へ

(これを手にしたあなたは普通な人間です)

「なんだこの本ちよつとむかつく」

と思いつつ読んでみる

（あなたはどう頑張つても普通なんです。問題はその普通をいかにどう生きるかです。その答えを見つけるのはあなた自身です。今あなたには？が浮かんでいるでしょうこの時点で普通です。）

バタン!!強めに本を閉じた。

ゴミ箱に投げたくなつたが本棚にしまつといた。

「とことん馬鹿にしやがるな、言つてることが意味わかんない、そのうちわかるようになるかな?」

と思つていた。まだ時間は12時を回つたところである。なので、出かけることにした。家を出て散歩をしていた。近くに何も無いので商店街に向かつていた。角から美少女でも出てこないかなーと少し期待していたが、やはりラブコメ的な展開はない。

「二回でもいいからラブコメ的な展開ないかなー」

と呟いたら遠くから声が聞こえてきた。

「普〜」

誰だと思ひ振り返るとそこには、成績優秀でスポーツ万能の神島優がいた。

「こんな所で何してんだー」

とバカにしてんじゃないかって態度で聞いてくる

「いやー暇だったからいつの間にか商店街来てたー」

と適当に答えた。

「そうなんだ〜笑」

うわーすごいムカつくと心の中で思っていた。

「じゃあ、僕は行くね」

と言つて去ろうとしたが止められてしまった。

「ちよつと待てよ〜さつきさあ〜本屋で普通がどうかという本買ってなかった?」

めつちや恥ずかしかった。驚きを隠しきれずすんなりバレてしまった。

「あはははー」

笑つて誤魔化した。優は軽く笑みをこぼした。僕は早く帰りたい帰りたい帰りたいと思つていた。

「じゃあ僕はこの辺で」

と言つと驚くほどにあつさり帰してくれた。そのまま帰ろうと家に向かっていると、すごい勢いで走つてくる女の子が来た。心の中でこれはラブコメ的な展開か?と思つていると僕の顔を一瞬で駆け抜けていく……

「はあ…… やっぱりな、まあこれが現実つて言うものだ」

と苦笑いしながら思った。家に帰宅すると、隣の家トラックが止まっていた引越しかと思いきのまま家へ入っていった。僕は普通の人間だった。

現実でこんなことが.....

僕は普通すぎる中学生で名前は普（ふつ）名前も普通すぎて普通です。昨日は色々なことがありましたが今日は普通に生きるつもりです。

「はあくよく寝た今日は時間平気そうだなー」

いつもの支度を終わらせ学校に向かった。

「僕ってほんと普通だなー そういえば、登校をする時はラブコメ的な展開あるかもしれないー」

自分でもバカバカしいと思っていた。そんなことを思っていると後ろから走ってくるような足音が聞こえてくる。これは？後ろからぶつかって来てそのあと恋に落ちるというラブコメ的な展開か？と、期待を膨らまして待っていたが..... さつと通り過ぎていった。見えたのはショートカットで黒髪の女の子だった。

「まあ..... そうだよな」

そうこうしているうちにいつの間にか学校に着いていた。普通に正門を通り、なんだあの正共はと思いつながら普通に下駄箱で上履きに履き替え普通に教室に向かった。教室には数人しかいなかった、僕は自分の席に座った。後ろの席で女子が何かを話してい

た、僕は耳を傾けた

「ねえ聞いた？ 転校生が来るんだって〜まじ卍だよ〜」

卍ってなんだよ、寺がどうしたんだよ最近よく使われるよな〜と思った。てか、転校生ってことはラブコメ的な展開があるのか？ あるのか？ 笑がこぼれた。

「普なんでニヤニヤしてんだよ〜気持ち悪いんだけど〜」

「気のせい気のせい」

って誤魔化した。女子達はさっきの話題に戻っていた。

「転校生って言っても他クラスでしょ〜」

終わった。僕のラブコメ的な展開は終わりを告げた。

教室にどんだん人が集まってきた。昨日会った気がする人も来ていた。あつ思い出した優だった。

「普〜オツはよ〜」

「おはよう」

優からパリピ的な挨拶が来たが無視して普通に挨拶を返した。

といういつもの朝が始まり、ほとんど寝てて聞いてなかった授業の終わり、帰宅時間になった。

「はあく〜疲れた。ほんと普通だな〜」

優がなんかこちらに向かってきている。めんどくさい。

「優今日暇かー?」

「今日は暇じゃないく帰って寝るといいう仕事がある」

「そういうのを暇って言うんだよー」

と会話が続き結局優に付き合うことにした。

「どこ行くの〜?」

「生徒会室」

「なんで?なんで?僕何もやってないいつも妄想したりしてないって。」

「ごめん引いたわ」

すごい目で優に見られた。

「でーなんで生徒会室?」

「生徒会になるからだよー」

こわいこわいこわい急にどうしたんだこいつ?

「えっ・まさかだだけど僕は違うよね?」

「えっ普もだけど..」

当たり前のように言うなああああ今まで生徒会なんて

ないと同様に感じてたのに。

「いやーそれはちよつとなー僕じゃできないよ〜」

「もう申し込んでしまったテヘペロ」

てへペロじゃねえわー

「はあとりあえず今日はついて行くよ」

「ざつすが〜!!」

うぜええええ、こんなような話をしてたら生徒会室前に着いた。

「なんか緊張する」

「大丈夫大丈夫大したことないって」

お前と僕では性格が違うんだよー!!

「じゃあ入るか．」

「うん」

なぜだかわからないけどすごい緊張してる。やばいやばいやばいと思いつつもドアを開けた。そこには1人の女の子が座っていた。綺麗な黒髪のショートカットの美少女がいた。僕にもついにラブコメ的な展開がきたああああと心の中で叫んでいた。

「いらつしやい 君たち2人が申し込んでくれた、優君と普君？」

「はいそうです!!」同時に返事をした、優も緊張してるんだなと人目でわかった。

「でも普はやらな．．．」

「いや、やります!!やります!!」

「あれさつきと言ってる事と違う気が... まあいつか...」

優は笑顔になっていた。僕が入るのがそんなに嬉しいのかー照れちやうなー

「生徒会と言うのは何をするのですか?」

僕は聞いた、美少女は笑みを浮かべた、僕には意味はわからなかった。

「そうだ、自己紹介がまだだったね。私の名前は黒上咲（くろかみさき）と言います。よろしくね!!」

可愛い、一番最初に思ったことはそれだった。

「僕は野丸普です。よろしくお願いします」

「俺は神島優 よろしく〜」

「ありがとう〜よろしくねー」

と咲さんが言った。やっぱ可愛い、見る度に一言目にそれが出てくるほど可愛いー

「今日はもう遅いので帰っていいですよー」

「わかりました。今日は帰らせてもらいます。」

と言つて下校した、優はいつも自転車できている。僕は歩きだ、だからすぐにお別れだ

「じゃっー!」

つて優が言つたから僕も返した

「バイバイ」

お別れを済ませ、家に向かった。家の前につき隣を見るとまだ引越しの車が止まっていた。あまり気にせずに入つていった。僕は今日あつたことを振り返り思つた。僕は一目惚れをした。

まさかのラブコメ的な展開が？

僕は一目惚れをした。僕は初めてこんな経験をした、彼女と近づけるように努力しようって心で思っていた。あんなことが起こる前までは……

また1日が始まった。

「はぁーよく寝たー」

今日は早めに学校に行くか、いつも通りに普通に準備して家を出た。家の前には引越しの車は止まってなかった。なんで僕はこんなに気にしてるんだ、名札を見ようと思っただがまだ名札はついてなかった。少し気になったが学校に向かった。いつもと変わらない授業を受け放課後になった。

「普く生徒会室行くぞー」

優が来たほんと暇なやつだーなー、あつ暇人は僕か

「はーい」

雑に返事をして生徒会室に向かう、生徒会室に入ったが生徒会長の姿はなかった。

「普く生徒会長探してきてくれない？」

「えーめんどくさいーまあーわかったよー」

めんどくさかったが探しに行くことにした。体育館、図書館、教室、職員室など、いそうな場所を隅々探した。生徒会室に戻ろうとしたら、校舎裏からもの音が聞こえたので見に行ってみた。

「あの… 僕と付き合ってください!!」

生徒会長がいた。すごいところを見てしまった、返事がきになつたのでそのまま見ていた。

「はっ? きもいんですけど… 止すぎる… ネット拡散だわー」

僕はその場を一瞬で離れた。鳴き声が聞こえたが急いで生徒会室に戻った、勢いよく中に入った、優がびっくりしていた。

「普お前どうしたんだよ?」

「いや、なんでもない」

優が不思議そうに見ていた、僕はまだ驚いていた、会長があんな方なんて… この世の女子は恐ろしいんだなそう確信した。

「僕にラブコメ的な展開はなかったんだ…」

「普、お前どうしたんだよ」

「……」

僕は答えなかった。

その後帰宅した。家の前には引越しのトラックは止まってなかったが電気がついてた。名札にはられていた、暗くてよく見えなかった、近くに行つてまで見ようとは思わなかった…… 今日1日は幕を閉じた

次の日昨日のこともあつて僕は学校を遅刻してしまった。遅刻したがいつも通り授業を受け放課後になった。

生徒会室に向かった、生徒会室の中に入るとそこには生徒会長がいた。

「普君……んにはは」

普通だった昨日の出来事が嘘みたいだと思つた。

「……んにはは」

とりあえず返事をした。表だけ見れば本物の美少女だでも僕は彼女の裏の顔を知つていた、うまく顔を合わせる事が出来なかった。生徒会長は不思議そうに見ていた。

「今日は仕事ありますか？」

「今日は仕事あるよ」

「何やればいいんですか？」

「転校生が入ってきたんだけど…… その子とお友達になつてくれない？」

生徒会長の意図が読めなかった。

「それは…… どうすれば？」

生徒会長が笑った。表面は可愛いな―裏は怖いけど…

「まあ頑張ります。」

「よろしくね?」

「名前はなんて言うのでしようか?」

「河合桜(かわいさくら)さんだよー」

河合桜? 聞いたことないな―まあ明日声かけてみるか、でもなあ〜コミ障なんだよな―

「頑張ってみるよ」

「ありがとね」

この笑顔が怖い: とりあえず今日は帰ろう、そういえば今日優来なかったな何して
るんだろう? まあいつか、そんなことを考えながら家に帰宅した。

「今日も色々なことあったな〜よし寝るか…:」

電気を消して就寝した。

次の日普通に起きて普通に学校に行った。

「おーい普〜」

後ろからチャリで来る優の姿があった。

「おはよう出」

「普、なんだその挨拶は卍ってなんだよ」

「えっ卍は寺だよ」

「じゃあなんで今使ったんだよ」

「なんとなく」

くだらない会話をしながら学校に向かった、前に生徒会長の姿があった。生徒会長を見ると前の出来事を思い出してしまう

「生徒会長さんおはよう!!」

優が挨拶をしていた、僕は挨拶をしなかった。

いつも通りに授業を受け放課後になった。昨日言っていた子を探さなければならなかった、確か名前は河合桜って言ってた気がする、先生に頼んで名簿を見してもらった、探したら隣のクラスの子だった、早速そのクラスに向かった、教室に来たがどの子が桜さんがわからなかった。コミ障なので尚更辛い、それっぽい子に話しかけてみた。

「あの…桜さんですか?」

「ごめんなさい違います…桜さんならあっちにいるよ」

「ありがとうございます」

心臓が破裂しそうだ、声かけるだけでもしんどいなくこれからどうしようかなく取りせず声をかけてみるか…

「あのくすいません桜さんですかー？」

「そうですけど、どうしました？」

「僕と仲良くしてください」

みんなの視線がいつせいにこちらに来た。あつ終わった終つた終つた終つたも
う終わったやばい、きもいこの人つて絶対思われてるやんあーしんどい

「大丈夫ですけど、急にどうしたんですか？」

やばいこの人いい人だくしかも可愛い

「ありがとうございます、ちよつと生徒会室に来てもらえませんか？」

「わかりました。」

なんの会話もせず生徒会室に向かった、生徒会室に入ると優と生徒会長がいた。

「生徒会長さん仲良くなりました。」

桜さんはキョロキョロしていた

「ご苦労さま」

生徒会長が笑顔を見せた。やっぱ可愛いな裏がなきや…

「桜さん生徒会に入ってくれませんか？」

生徒会長からとんでもない言葉が出てきてびっくりしたこれこそ卍だろ俺何言つて

んだ？

自分でボケて自分でツツコム最高かよそれ、ってどうしたんだ生徒会長はー

「えー急ですね、ちよつと考えさせてもらえませんか？」

桜さんがそう言った

「いいよーゆっくり考えてー」

生徒会長はすごい優しく言ってたが裏では、とつと入れよこのくそぐらい思ってたんだよ、今日の生徒会はこんな感じに終わった。いつも通り帰宅した。やっぱり僕はラブコメ的な展開はない。やっぱり僕は普通だった。

生徒会の仕事は……

よくテレビで角から美少女が出てきたり、ぶつかって顔を合わせたら一目惚れをした
り、手が触れちゃったり、って言うことがあるらしいがこの世ではそんなことは無い。
この前だってそうかもって思ったが全然違かった、僕はこの前の出来事から女性性は怖い
と思ってる。僕にもテレビでやってるみたいなのにラブコメ的な展開がほしいー!!
朝、今日もいつも通り登校した、でいつも通り授業を受けた、いつも通り生徒会室に
向かった。生徒会室には優、生徒会長、桜さんがいた、1番最後は僕だったらしい。

「こんにちはー」

僕が普通に挨拶をした。

「こんにちはー」

みんないつせいに挨拶を返してくれた。

「桜さんが生徒会に入ってくれてるって言うてくれたー」

生徒会長はとても喜んでいて、僕も嬉しかった、優も喜んでいて。

「今日は何するんですか?」

優が聞いていた、どうせ仕事はないだろうと僕は思っていた。ほんと卍まじ卍、卍卍

うるせえなー自分でツツコんだ心の中で言っても恥ずかしかつた。

「今日は最近のjkの言葉を解説して頂戴」

「は？」

みんな同じことを思ったのかみんな同じリアクションをしていた。自分がjkなのにどうしてだ？聞きたくてもなんか聞けないな、まあ調べますか

「いいですけど...なんでですか？」

桜さんが聞いていた、生徒会長が笑った

「なんとなくだよー」

なんだよそれーじゃあ早速調べようと思った。

「そうだ、みんなー私のことは生徒会長じゃなくて咲つて呼んでー」

「わかりました」

なんで急に言ったのか意図は読めなかったがまあ呼ぶことにした。じゃあ最近よく使う卍から調べるか。

「卍から調べてみようか」

「普、卍好きだもんなく」

「やめてくれ」

恥ずかしくてキレ気味で言ってしまった優は驚いた顔をしてたがすぐに元の顔に

戻った、このイケメンめ、そんなことより調べるか。生徒会室にあったパソコンを調べた。結果卍には色々な意味があるらしい。最近若者がよくつかっているということもわかった、大人は意味を知らない人が多いらしい、まあ普通の人は地図記号の寺だと思うよな〜この前まで思ってたやつ誰だよー

「卍はこんな感じだな」

優が紙にメモをとっていた、流石イケメン、スポーツ万能の成績優秀者だまじ卍だわてか卍最強じゃね？今日僕卍何回言ってるんだ？はい、続き続き

「り、つてなに？」

優が考え込んでいた、どうせ僕達じゃ理解できないだろ

「り、にも色々な意味があるんじゃない？」

そうかも!!僕もそう思った、ていうことで調べて見た

りつて了解に意味なんだー… は? いやいや略しすぎだろ知らない人は通じないわ、間違えて打ったのかと勘違いするやん最近の若者はよくわからんの〜なんでおじさん口調になったんだ? どうでもいいわ

「り、つて了解の意味なんだ……」

沈黙が訪れるみんな同じことを思っているのだろうホント最近のjkはよくわからんは、よし次調べるか

「えーつと次は g g r k s !」

「.....」

「なにこれ？」

みんな頭にはてなマークが、ある僕はこれにピンと来たこれは勝ったな

「これはあれだよ、じじー楽しんで死ねっていう意味だな... うん確信」

「普ーお前の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかった... あとお前のその自身どこから来てんだよ」

優が不思議そうに見ている、桜さんも不思議そうに見ている、えつ僕なんか変な事言った？

「じゃあ調べてみよ」

「お、おう」

調べて見た、全然違った最近の若者はほんとわからんみんな同じ感じの顔をしていた
「g g r k s ! はググレカスらしい」

もう意味がわからん、

「もう疲れたから終わりでいいよね？」

優が言った、まあそうだなって僕も思った。

「会長に報告するか」

「会長く終わりました〜」

「ご苦労さま〜あと会長じゃなくて咲ね」

威圧があつたやつば怖い〜

「もう帰つていいよ〜」

えーもつとなんか無いのーって思ったが素直に帰ることにした。

「おつかれさまでーす」

3人で生徒会室を出た、優はチャリで先に帰った、桜さんは同じ方向らしいので一緒に帰った。

「今日疲れたね〜」

桜さんが気を使ったのか話しかけてくれた〜

「疲れたーほんと卍、g g r k s、りー」

「使えばいいってものじゃないと思うけど、普君って面白い子だね」

ドキッ初めてそんなことを言われた、顔が暑くなっている感覚があつた

「えっなんか変なこと言っちゃった?」

「大丈夫だよ、ありがとう」

全然大丈夫じゃないですーなんか心臓破裂しそー

「家どのへんなのー?」

「もうすぐだよー」

「僕ももうすぐなんだー」

「あそこだよー」

桜さんが指さした方向を見た。それは僕の家隣の家だった。

「僕の家隣の隣じゃん」

「えっうそ...」

桜さんもとてもびっくりしていた。

「また明日」

それだけ言ってお互い帰って行った。桜さんの言葉が忘れられない、僕は2回目の恋をしたかもしれない。

いつも通り普通!!

僕は2度目の恋をした、新しく生徒会に入った子が隣の家に住んでるなんてラブコメ的な展開すぎんだろー、その子の名前は河合桜、ピンク色の髪をしていてとても可愛い、やばい僕、きもいわー、このようなことがあった今日も1日が始まる

朝いつものように起きて、いつものように準備して、いつものように家を出た、隣の家がものすごく気になってしまう。僕が家を出た時は桜さんの姿はなかった、仕方なく1人で登校した、いつもの道を進んで、学校に着いた。教室に入るともういた。

「普くおはよう」

「うんおはようー」

それで会話は終わった、まあ優はと野立も多いから僕だけじゃなくほかの子とも話すんだろー、僕は自席に行き授業が始まるのを待った、いつものように授業を受けて昼休みになった。

「普く昼食べようぜー」

珍しい優お昼に誘ってきた、なにか企んでるんじゃないかって疑った、優の意図はわからなかった

「いよいよー」

優の後ろについて行った教室を出たので驚いた、優はどこに向かってるのかわからない、とりあえず着いて行った、優は生徒会室に入っていた、そこには咲さんと桜さんがいた、

「優くん普くんこんにちはー」

「こんにちはー」

僕と優が同時に言った。

「でなんでここに集まってるんですか?」

「お昼ご飯これからここで食べることにしたのー」

初耳だった、この僕が誰かと一緒にご飯を食べるなんて…嬉しすぎる、嬉しすぎるけど顔に出さないようにしないと、よし

「普くん嬉しそうね」

一瞬でバレた、僕ってそんなに顔に出やすいのか?やばいやばい、これから大変そうだな

「まあ嬉しいです」

「これから毎日ここに集合ねー」

「わかりました!!」

みんなですら返事をした、早速ご飯を食べよう

「頂きマース」

待つて、これつてラブコメ的な展開じゃない？ やつと僕にもか？ でも待てよ前回やばい目にあつてるから安心しちやダメだ、とりあえずご飯を食べよう

「普くんやつぱ面白いわ」

桜さんの一言に死にそうになった、やつぱ顔に出てるのか、これから出ないようにならないと何が起こるかかわかないな

「いやいやそうでもないですよー」

「うわー普きもー」

うるせえーま自分でもきもいと思つてたけどね、うん。やつぱ僕つてきもいんだな。

午後の授業も終わり放課後になった、いつものように生徒会室に向かった、今日はなんの仕事なんだか？

「咲さーん今日の仕事なんですかー？」

「今日は…… 決めてないー自分たちで決めてー」

なんだそれは、生徒会長でそれはないだろ

「自分でつて何すればいいんだ？」

「適当に友達作つてくれれば？」

「優いたんだ…」

「いたわ」

友達かーなれそうなひといるかなーとりあえず教室見に行くか、教室に向かった

教室で1人でゲームをやってる人がいた、名前は確か…久保勝（くぼまさる）だった
彼はいつも1人でゲームをしていた、まわりからあまりいい目で見られなかった、話し
かけようと思った。

「なんのゲームをやってるの？」

イヤホンをつけていて画面をリズムカルにタッチしているそのせいでこちらには全
く気づかなかった… やつとイヤホンを外してくれた

「ごめん集中してた。」

「こっちも急に話しかけてごめんね」

この展開は… BLというやつか？おっ？そうなのか？…

ってなるかああああああああああ!!

「生徒会に入らない？」

いきなり何言つてんだ僕は、自分でも思うきもい…

「急にどうして？」

「なんとなく」

「別にいいけど…」

「ありがとう」

「おう」

とりあえず生徒会室に向かった、生徒会室にはいった、3人はトランプをして遊んでいた、くそー何やってんだよ

「生徒会の新しい人呼んできた」

「えーつと久保勝です」

「普お前よく呼べたな？コミ障じゃなかったのか？」

「男は大丈夫」

「なんだそれ」

「勝くんよろしくね」

咲さんの笑顔の裏は僕は知っている、裏でどう思ってるか考えたくもない

「よろしくお願います…」

勝がそう言った、お前もそのうち咲さんの裏がわかるよと心の中で笑っていた。今日の生徒会は終わった、今日も桜さんと帰った、一緒に帰ってとても楽しい、やっぱり僕はこの子に恋をしたんだな、これ以上ラブコメ的な展開は求めないこの状況がいつまでも続けばいいなと僕は思った。これ以上僕にはラブコメ的な展開はいらぬ。

休みの日の過ごし方

これ以上ラブコメ的な展開を求めないそう決めていた、だがやっぱり僕はラブコメ的な展開を求めていた、いつも通り登校してても周りがきになつてしまつたり横を通り過ぎる人がいるとなんかなくなつて思つてしまう。結果僕はラブコメ的な展開を求めているんだ、この世にそんなものが存在しないとわかつていても…

今日は土曜日だ学校もないし平和だ、今は12時をまわつたところだった、めっちゃ寝たんだなくてか今日どうするか、学校ないのは嬉しいけどやることがない、とりあえずリビングに行きテレビをつけた、よくわかんない番組しかやつてなくつまんなくて自室に戻ろうとした、その時母親がきた

「まさか、1日家にいるわけじゃないわよね?」

「そんなこと…」

「こつそり自室に戻ろうとしたら、掴まれた

「ないわよね?」

「ないです」

言うとおりに外に出た、することがない隣に桜さんがいるといつても恥ずかしくて行

けないし、はあどうするかーとりあえず商店街に行くか、いつもの道を歩いて商店街に着いた、まっ先に向かったのは本屋だった、新しくいい本が出てないか確認したが特にこれといって気になる本はなかった暇な日つとことん暇なんだな〜とりあえず商店街をフラフラしていた、服屋の前を通り過ぎたら見覚えのある人がいた、生徒会長の咲さんだった無視するわけも行かないので声をかけた

「咲さんこんにちはー」

「あつ普くんこんにちはー、こんなときでなにしてるの？」

なんでこんな所にいるんだよー死ねよこんな略し方でいいのかな？はあ怖い

「今日暇だったんでフラフラと」

「そうなんだ、私は服買つてるところ」

えっ？服買つてるところだから邪魔なんだけど死んでくれないだつて？はあーこえ

えええええ

「そうなんですか、じゃあ僕はこの辺で」

「ちよちよ待つて暇なんでしょーついてきてよー」

まじかまじかまじか自殺するようなもんじゃんまあしょうがない

「僕なんかがお邪魔していいんですかー？」

「もちろん」

あたりめえだろ？僕にはそう聞こえる、とりあえず咲さんの後ろについて行った、咲さんは本屋に入っていた

僕さつききたつてことは黙っとくか、

「なんかオススメの本ない？」

「んーなんですかねー」

悩んだがいい本が思いつかなかった、そうだあの本をおすすめしよう、「普通な人間へ」この本は僕を馬鹿にした本だ、よしこれをオススメしよう

「咲さんこの本なんてどうかな？」

「なにこれ？普通な人間へ？面白いの？」

「面白いよ」

僕は嘘ついた、まあいつか

「そうか、じゃあ買ってみるね」

咲さんはレジに向かっていた、なんか申し訳ないと思ってしまった。：咲さんの裏の顔が嘘じゃないかと思った

「読んだら感想言うね」

「はい！」

殺される気がする、次はどこに向かうんだ？咲さんについて行くとファミレスに入っ

ていた、ケイゼリヤに入ったイタリアンのお店だった、

「何食べるー?」

「僕はミラノ風グラタンかな?」

「じゃあ私はシーフードドリアで、じゃあ頼もうか? ドリンクバーは飲む?」

「飲むー」

「おっけー」

ボタンを押して店員さんが来るのを待っていた、忙しいのかすぐには来なくてももう一回ボタンを押した、心の中で何度も何度もいませんって思っていた、店員さんが来た、頼むものを頼んでドリンクバーを取りに行くことにした、適当にジュースを注ぎ自席に戻った、

「はあく今日疲れたね、普君って何時まで大丈夫?」

「特には決まってないよー」

「じゃあカラオケ行こー」

えーまじか歌ったことないんだけど、でも断ったら殺されるしどうしよう、行くしかないのか行って歌わなきゃいいのか

「まあいいよー」

「やったーじゃあすぐ近くのとこ行こっか」

店員さんがきた

「お待たせしました〜ミラノ風グラタンのお客様、シーフードドリアのお客様お熱いのでご気をつけ下さい、失礼します！」

黙々と食べてケイゼリアを出た、すぐ近くのカラオケに入った。咲さんがフリータイムをとっていた、えっそんなに長居するの？まじか絶対歌わされるやん、俺の歌声がバレルやばい、部屋に入って早速咲さんが歌っていた、歌ってる曲は誰でもわかるような歌を歌っていた、僕はどうしようかな、曲を入れる機会の使い方がわからなかった、咲さんは笑っていた、咲さんに教えてもらって曲をいれた、咲さんがなんの歌かわかんなくてはてなマークを浮かばしていた、点数は66点だった高いのか低いのかわかんない、その後、咲さんが歌って90点だった僕は低かったんだなって思った、まあ初めてだしねしょうがない自分に言い聞かせていた、とことん歌いカラオケを出た、

「今日は楽しかった、ありがとね」

「僕も楽しかった」

「じゃあねー」

「じゃあね」

そう言っただけで解散した、帰り道ずっと考えていた、あんなに優しい人がなんであんな断り方をしたんだろう謎だな？表上はともいい人だ、裏を知っていても僕はこれから

も仲良くやろうと思った、また遊びたいなって思っていた、待てよ今日のもつてデートではないよな？うん違うはずだ!!そんなことを思いながら帰宅した、決してラブコメ的な展開ではなかったが、それなりに楽しかったのでよかった。僕は少しずつ普通じゃなくなってるのかもしれない。

結局普通に戻る...

僕は普通じゃなくなっていた。昨日あった出来事は普通ではなかった。僕の初めての体験だった。デートなんてこの先できるのか？保証できない、普通じゃなくなってるのはいいことなのだろうか？いいことではあつてほしいが、自分が自分じゃなくなるかもしれない、深く考えすぎかもしれないが、そんなことを考えてるうちに次の週になった、また学校だ。いつも通りの学校生活が始まる、生徒会はどうなるのか、今週も頑張っていきましょう!!

朝、今日は珍しくぎりぎりの登校だった、いつも歩つて通る場所を今日は走っている、走つてただけでいつもと景色が違う感じがする、きのせいかな？ぎりぎり学校についた、学校につくのはぎりぎりだった、ほかは何ら変わら、昼休みになった、昼休みは生徒会室に集まつてご飯を食べる、今日から勝くんが加わる楽しみだ、優と勝くんと一緒に生徒会室に向かった。

「うーす」

「こんにちわー」

「こんにちわー」

3人とも挨拶を済ませ、適当に座った、すでに桜さんと咲さんがいた
「こんにちはー!!」

2人とも挨拶を返してくれた。特に話すことも無く黙々とご飯を食べていた、咲さんがいきなり立ち上がったどうしたんだ？咲さんがバックから一冊の本を出した「普通な人間へ」あの本かやばいぞ無理やり押し付けてしまった、殺されてしまう……

「普君ー!!この本めっちゃ面白かったありがとね」

あれ？面白かったの？予想と全然違う反応だった、ひと安心していた
「咲さんそれなんですか？」

優が聞いた

「普君に教えてもらった本なの」

「普ってそういう本読むんだくへく」

なんだその反応？なにを思ってるか知らんが普通の本だよ普通だけに……はい！
つまらないですね

「読むよー」

「へくそういう本読むんだく面白い？」

桜さん聞いてきた、可愛いのでなんでも答えてあげるよ…… やっぱ僕きもいな

「面白いよくぜひ読んでみて」

「今度買ってみるー」

うんうん!! 感想待ってますよーなんか今日は気分がいいなあーそれにしても勝くんずーっと黙ってるな。何してるんだ?

「勝くん?」

反応はなかった、あつ察した音ゲーなうだったですか、申し訳ないです、すみません。それにしてもすごいなー俺には何が何だか見えないわ

「勝くすーいなお前」

優が興味津々に聞いていた、勝くんは音ゲーなうなので返事はなかった、僕も音ゲーやってみようかな? いや無理だな。

昼休みが終わって午後の授業を受けて放課後になった、いつも通り生徒会に向かった、今日の仕事は何だか? てか真面目な仕事今まで1個もなかったな大丈夫なのかこの学校の生徒会わー、まあ僕もか。生徒会室に入った、咲さんしかいなかった。

「今日は何をやるんですか?」

「みんなが来てからのお楽しみだ」

「はあ……」

それから数分がたってみんな揃った、なんか今日はすごい真面目だな、何かあるんだ?

「今日はいつもとは全然違います、やっとちゃんとした、生徒会の仕事くなんです、生徒会ですすねイベントをやることになりました。」

えっほんとにしつかりしてるイベントじゃん、うちにこのメンバーで大丈夫なのか？「まじか、イベントって何をするんだ？」

優の頭には？がいつぱいあつた、ほかのふたりにも？があつた。まあそうなるよな、僕もそうなってるもん

「まだ何も決めてませーん」

それをどうとよく言えるな、つてことは生徒会でーから考えるのかうーん？大変だな、仕事って感じだな、

「なんか案あるー？」

みんな黙っていた、まあそうだろういきなりそんなことを言われてもたしかにわからん

「いつやるんですか？」

珍しく勝が発言した

「夏休み終わりの方かな」

えー全然時間ないじゃん、今からだど大したのができない。んーどうしようかな

「あの一いい案見つけたんだけど」

桜さんも珍しく発言しようとした、桜さんはどんな案を出すのだろうか？

今日はいつも通りだった。結局僕は普通に戻った。

やつと・・・生徒会らしいことを・・・

普段特に活動しない生徒会がやつとそれらしい仕事をする事になった、イベントをやるらしい、だが内容は何も決まってる。桜さんがいい案を出してくれた、夏期文化祭という意見を出した、最初はなんだ？と思ったがそのままだった、学校で行われる文化祭とは別に、夏休み中に行われる文化祭だ、すごいいい案だと思ったが、却下されてしまった、僕はいいと思ったんだが、理由は、まず協力してくれる人がいるかどうかだが、生徒会のイベントにしてはスケールがデカすぎる、みたいなことで却下された、そのぐらい僕はどうにかなるんじゃないかと思った、だがダメだった、その後ほかの人が意見を出しても結局、却下。これほんとに決まるのか？

「最初に桜さんが言ってくれた、文化祭でいいと思うのだが。」

「却下ですねー、協力してくれる人がいないじゃない」

そこ断言しちゃうのねー悲しい。

「人なら僕が集める」

僕が珍しくやる気になった、うん!!桜さんのためだもんいくらでも頑張るよ、でも待て、僕ってコミ障じゃないでしょう、でも桜さんパワーがあれば余裕!!うん僕きもい

「普く随分やる気だな」

「うん!!やるしかない」

「咲さんどうですか?」

「集めてくれるって言うならいいんじゃない?」

やつた!!やつたぞ、桜さんも喜んでくれてる、僕の好感度アップ!!頑張るぞー

「ありがとうございます」

「で?どうやって人集めるの?」

「あっ.....」

やばい何も決めてなかった、どうしようどうしよう、うん... どうかする

「明日までに決めてきます」

「了解、楽しみにしてる」

楽しみにしないでー夏期文化祭をやるってことと僕が人を集めるっていうのが決

まって解散した..

人を集めるのかくどうしようかな?まずは定番のポスターかな?でもなーそれで人が来るかな

夜ずーつと考えていた、全然眠れなかった、全然眠れないまま学校に行き授業を受け、放課後になった、生徒会室に行き、昨日考えたことを全部話した。

「えーつと僕が考えたのは、この学校は軽音部が盛んなので、軽音部に人を集めてもらうのがいいかなと思いました」

僕の中ではいい案だと思った、

「いい案だけそ…軽音部には許可とつたの？」

とつてなかったらどうしようどうにか誤魔化すかいや無理だな、諦めよう正直に言うおう

「すいません、とつてないです」

「普くまじかよー」

「やっぱりね」

「まあ普だもんね」

お前はだまれく勝!!ずーつとイヤホンしててスマホの画面タップしてるやつに言われたくないわ。音ゲーなんかしてないでなんか考えろ

「すいません、僕軽音部のところに行つてきます」

「いつてらしやーい」

えっ僕一人? コミ障なんですけどまあ行くしかないな、軽音部の部室は生徒会室から、わりと近かった。中に入ると練習をしていた、音が大きくてやばかった、鼓膜が破けるうう、一番偉そうな人に話しかけた。

「あのーすいませんちよつといいですか?」

「どちら様ですか?」

「生徒会のものです」

「わかりました。話を聞きましょう」

「ありがとうございます」

よし話は聞いてもらえるぞ

「えーつとですね、生徒会でイベントをやるんですけど、夏期文化祭みたいのを企画していて、そこで軽音部のみなさんに出て欲しいって言うのと、別に次のライブで宣伝をしてもらいたいんですけど?できないでしょうか?」

「全然いいよー」

まじか、一瞬だな、迷いすらなかった、ありがたいけどなんか引つかかるまあいっか
「まじですか?ありがとうございます!詳しい話が出たらまた連絡します、練習中失礼しました!」

はあくよかつた〜これで完璧だ、よし戻るか。

「みんな〜許可とれましたよー」

みんながこちらを振り向き、さつとトランプをしまった。俺が仕事してるあいだに何してるんだよこいつらは、まあ桜さんは許す、俺くそだな

「えつまじ?」

「うん、あつさりいった」

「まじかお前やるな」

「内容決まったら後日連絡するってだけ伝えといた」

「ありがとう、ポスターなど作ったほうがいいわよね?」

「ですね」

「じゃあ勝くんお願いね」

「えっ」

「ざまあ見やがれ、ずーっとゲームなんかしてるからそうなるんだ、バチが当たったな!!」

「まじですか?ありがとうございます!・ぜひやらせてください」

「なんでだよおおおお普通やりたくないとかじゃないの」

「じゃあ決まりね、一週間後までにお願いできる?」

「大丈夫です!!」

「じゃあよろしくね」

「色々引つかかるが上手くいってるからいいか、僕は何をすればいいんだろう?」

「係はどうなってるんですか?」

「普くんは、そのまま人を集める係でお願いします、優くんは、軽音部の公演のやる場所などを決めて、桜さんは予算をお願い、勝くんはポスターね、こんな感じかな?」

咲さんは? 何やるのかな? まあ生徒会長だしすごいことやるんだろ? やつぱり生徒会長はすごいんだな

「了解です!!」

こんな感じで今日の生徒会は終わった

帰り道、桜さんと帰ることになった、超嬉しいでも緊張する何話せばいいんだろう?

「あの..... 文化祭の件、咲さんを納得いかせてくれてありがとう」

「全然いいよ」

「頑張ろうね」

「うん!」

結構大事な仕事をやることになってしまった、言った以上やるしかない、夏期文化祭絶対成功させてやる。

僕は決意した。

生徒会は忙しい……

僕は決意してしまった、夏期文化祭を成功させると!!

僕の仕事は協力してくれる人を集めるという仕事だ、なんとか軽音部は協力してくれるらしい、僕はコミ障なのにこれ以上協力者を集めると……無理やろぅん!!無理。でもここでやめたら、桜さんが悲しんじゃう、やっぱやるしかないのか、頑張ろ

最近僕は眠れない日が続いていた。桜さんのために張り切っていてほとんど寝てない。どうにかしてでも夏期文化祭を成功させたい!で、思いついた案はこの学校には調理部というものがある、その調理部に夏期文化祭でなにか食べ物を出してもらおうと考えたこ、まだ許可はとつてない、中々取りに行けない、調理部は女子しかない、僕みたいなコミ障は無理だ、一応今日の放課後に行こうとは思ってる、まあ多分失敗するだろう。案はもう一個ある、近頃全体育館に集まるというものがあるその時に、「なにか連絡はありますか?」という時に手をあげてこの、夏期文化祭について説明し協力者を集める、てかこれに関しては確実に無理だ、何回も言うけど僕はコミ障だ、女子に話しかけることも出来ないやつが、体育館で前に出て全校生徒に話すなんて無理に決まってる。考えただけでもしんどい、あああああどうしよう?とりあえず調理部に放

課後行こう。

午後の授業も終わって放課後になった、調理部に向かった、人多いなくまじで女子しかいないやん、恐る恐る入ってみる。ガラツ!!、いつせいにこつちを見た、顔が暑い、1回でた。いや無理でしょー絶対無理だつて。廊下でどうしようか考えてると部長らしき人が出てきてくれた。ありがたいな

「うちの部活に何か用ですか？」

「あつ... えーつと」

「ん？」

やばいやばいやっぱ女子と話すのはしんどい

「えーつとですね、生徒会です」

「はあー生徒会が何の用ですか？」

「えーつとですね、今度夏休みに夏期文化祭というものを企画しております、そこで調理部に出てもらえないかなくと思ひまして... どうでしょうか？」

「調理部で何か作って売ってほしい、みたいな感じでしょうか？」

「まあそうですねー」

「すいません、まだなんとも言えないですね、もし決まったら生徒会にお話に行きます。」

「そうですか... ありがとうございます」

「ではこれで…」

ゲホツゲホツ!! やばい、死ぬかと思ったくなんとか会話にはなつてたなよかつたよかつた、とりあえず調理部は保留だね、なんかほかの案考えないとなくとりあえず今日は生徒会室に行かないで帰ろう。もう疲れたし、

そのまま帰宅した。

うーんどうしよう、ベッドの上で考えていた、やっぱり全校生徒の前で… いやそれは最終手段、まじでどうしよう、生徒会のほかのメンバーには頼りたくないしなく公演してくれそうな部活をあたるしかないかな、うんそうしよう!! 久しぶりに今日は寝れそうだ……

なんで寝不足なんだくめっちゃ眠いしんどいなんでちやんと寝たやん、あつ待てよまさか夢にまで生徒会のことか? あーどんだけ考えれば気が済むんだよー

今日は授業を受けずにずっと寝ていた。いつの間にか放課後になっていた。よしとりあえずいろんな部活回ってみるか、じゃあ最初はダンス部だな

ダンス部は体育館で練習をしていると聞いた、とりあえず、体育館に向かった、昨日女子と話したから今日は気が楽だ、ダンス部の人に話しかけた。

「あのー部長さんいますか?」

「あついるよーあそこの人ー」

「ありがとう」

「この短い話でもしんどい。

「あのー部長さんですか？」

「そうですけど、君みたいな地味な子..... じゃなくて君みたいな子がうちの部活になんかようですか？」

「今地味な子って言ったねコノヤロウ、お前なんか、お前なんか、馬鹿だ!!幼稚だね僕って

「あのですね!、今度生徒会で夏期文化祭というのをやる予定なんですよ、あのーダンス部で公演してくれないかなと思いませんか?どうでしょうか?」

「いいよー」

「見かけによらずあっさりだな、もっと手こずると思ってたのに、早く済んだんならそれでもいいや」

「ほんとですか?ありがとうございませす、なにか決まったらまた連絡します。」

「ちよつと待ってその代わりジュース奢ってよ」

「えっ..... まあいいですけど」

「やったね、部活終わるの待ってて!!」

「はい.....」

短い返事をした。僕と彼女が何かあるということは無いだろう、夏期文化祭に出てく
れるということが決まってよかった、これからも人探さないと、僕はダンス部の部長が
来るのを待っていた。

まだまだやることがたくさん.....

ダンス部が終わり部長が来た。約束通りジューズを奢った、それで終わらず、そのまま一緒に帰った、こんなこともあるんだなと僕は思った、軽音部も許可が出た、ダンス部も許可が出た、あとは調理部がどうなるかだ、それにしてもまだ人数は少ない、他どうやって人数を揃えるか、やっぱり全校生徒の前で言うしかないのか、とりあえず明日生徒会に顔を出そう、よく考えたら、結構久しぶりだな、ほかの人たちはどこまで進んだのか？まあ結構進んでるだろう。きつとそうだろう.....

いつも通り登校をした、最近朝、優に会わないな、教室に入れば会うけど、そこまで話さない。勝なんてもつと喋らない。今日の授業終わって生徒会室に向かった、ここに来るのも久しぶりだな、生徒会室に入った。もうそこには全員集まっていた。どうせゲームとかしてるんだらうなって思ってたが、みんな真面目にやっけてびっくりした。

「みんなく久しぶり」

「普くん久しぶりだね、なんで最近来なかったの？」

「仕事の方が忙しくて」

「で？どのぐらい集まった？」

「軽音部とダンス部、調理部はまだわかんない」

「結構頑張ってるね」

「まあ……」

「あの普がそこまでやるとは、驚きだわ」

「めつたに僕こういうのやらないからね」

「そうそう」

「みんなはどんな感じなの？」

「予算はだいたいわかった」

「使う場所もだいたい許可とった」

「みんなすごいな」

「ポスターも完成したから、明日から貼り出す」

「おおーみんなすごい、僕ももっと人集めてくる!!」

「おう!!頑張れ」

早速、生徒会室を出て人を集めに行った、でもどうしようもなくあとは何部だ？吹奏楽部とか？とりあえず吹奏楽部の許可取りに行こう!!あつさり許可取れた。いい感じだ。舞台の方はもういいだろう、あとは準備を手伝ってくれるボランティアを探さないと、

「あつこの前の子〜」

ん？後ろを振り向くと調理部の部長だった。

「あつ調理部の？」

「今生徒会室に行こうと思っただよ〜丁度いい、文化祭の件受けるよー!!」

「えっ：： ありがとうございます」

「準備のこととか連絡してね」

「はい!!」

やったいい感じに集まってきたぞ、これで食べ物もおつけいだな！そうだ!!ボラン
ティアしてくれる人探さないと、ボランティアカーあつボランティア部だ!!よし、ボラ
ンティア部に向かった！ボランティア部の部室に入った。そこには1人だけしかいな
かった、とりあえず話しかけた。

「あの一」

「はいなんでしよう?」

「生徒会のものなんですけど、今度夏期文化祭を企画してまして、それでボランティア
部にボランティアをお願いしたいなと思ってるんですけど?どうでしょうか?」

「いいんだけど：：うち部員2人だよ?」

まじか、そんなに少ないのね、じゃあほかも考えないと!

楽しみたいす!!なので協力してくれる方などいたら生徒会まで来てください。お願いします。話は以上です」

終わった。てか今喋ってたのって僕?今までで一番喋るのうまかった気がする、まだ心臓がやばい。これでそのくらい来てくれるかな?こんなに頑張ったんだ来てくれ!!

集会が終わった後生徒会室に行った、そこにはみんながいた。

「お前すごいな」

「普くんすごい」

「お前はできないやつだと思ってた」

「よくやったね」

「みんなありがとう」

とりあえず僕は嬉しかった、ここまで褒められたのは生まれて初めてかもしれない。あスツキリしたくもう早く帰って寝たい、ここ最近寝不足続きだったから、

「もう疲れたから今日は帰るね」

「うん!!お疲れ様」

僕はそのまま帰宅した。ゆっくり寝た。後日話を聞いたが、生徒会室に押しかける人がすごくて大変だったらしい、それを聞いて僕はさらに喜んだ。人を集めることには成

功したが仕事はまだまだいっぱいある!!今までやってきたのを無駄にしないようにこれから頑張ろうと僕は思った。

夏期文化祭までやるのがたくさんある

夏期文化祭というのは秋にやる文化祭とは別に、夏休み中にやる小さい文化祭だ。それで僕は人を集める仕事を成功させた!!人を集めることには成功したがまだやることが沢山ある。まずは文化祭説明会を開かなければ、あーまだまだ終わりそうにないな、とりあえず次にやることは文化祭の説明会だ!今日は生徒会に顔出しに行こう、説明会のこと決めないとね!今思ったけど僕がこんなに必死になったの生まれて初めてかも、僕はもう普通じゃないのか?

生徒会で色々あり疲れも溜まっている。学校には行くけど授業は全く受けなかった。ずーっと寝てた。授業が終わり生徒会室に向かった。もう全員揃っていた。最近みんな来るのが早い、何故か僕が1番最後だった。

「こんにちはー」

「普やん、よー」

「こんにちはー」

みんな返事を返してくれた。

「今日は何をするのー?」

「今日は説明会の準備をしようかと」

「僕は何をすればいいですか？」

「じゃあ説明会の説明することを考えて頂戴」

「了解です」

「ほかの人たちは文化祭に参加してくれる生徒や部活に日時と場所を伝えてきて〜！」

「了解です!!」

僕だけ仕事が違うのね、なんかぼっちになっちゃった

よし、考えるか！まずは文化祭の日時を伝えないとなたしか8月23日だったな、あとは注意事項とか、かなーまず学校のルール上ダメなものはダメだ!!あとは盗難に気をつけてもらおう、小さい文化祭のため先生などはほとんどいない、盗難などが多くなると思うできるな、まああとは当たり前だけ書いておくか、あとは何を説明しよう。どの部活が何をやってくれるか、とかも言わないとなくどこで販売したりするのも考えないといけない、多すぎる、あーしんどい。そういえば、どれくらいの人参加するんだっけなく確かく全校生徒の半分ぐらいだけ？てかそんなに参加するのか、じゃあ説明会は体育館でやらないと、あつ、そうだ!!生徒会でもなんか出し物やるか、うん!そうしよう!このことを伝えるために生徒会室に向かった、勢いよく扉を開けて中に入った。

「どうしたの?」

「ねえみんなで出し物やろう」

「おっいいこと言うね〜」

「やろうやろう」

「普くん最近絶好調だね！」

「で、僕決めたんだけど、バンドやらない？生徒会で」

「いいじゃんそれ」

「いいよやろうよ」

「ほんとに？やった、で楽器の振り分けなんだけど、もう決めてあるんだ」

「やること早いな」

「私やったことないけど大丈夫かな？」

「大丈夫だよーここにいる人みんな初心者だよ」

「えっ？俺は中学の時やってたぞ」

「私も中学の時」

「僕は趣味で」

「勝まで、まじか」

「初心者は桜さんと僕だけか」

「まあ頑張らましよう」

「で、楽器の振り分けが、咲さんはギター1、優はギター2、勝はドラム、で僕がベースで、桜さんはボーカルでどうでしょうか？」

「うん大丈夫」

「じゃあそれで決まり」

「でもやること多いね、説明会もあるし、本番の準備もあるし、でバンドの練習もでしょ、大変だな」

「じゃあ生徒会で力を合わせて頑張りましょう!!」

「おう!!」

みんな大きな声を出していた、すごいなまさかバンドまで組むことになるなんて思わなかった。バンドの練習もしないといけないが、説明会もあるちゃっちゃと準備終わらせないと!!

説明会当日、体育館にすごい人数の人が集まった、2時間かけて、本番の動きや、各部活の活動場所など全て発表し、説明会は終わった。はあくやつと終わったよ。これからバンドの練習だ!! 頑張るぞー軽音部に部室を貸してもらった。

「練習場所は決まったが、バンド名とやる曲決まってるないね」

「それね、どうしようか」

「どうしようか」

「まあ最初だし簡単な曲にするか」

「そうだね」

最近の曲で簡単な曲を探した。すぐにできそうな曲が決まった、僕、全くやったことないのでできるかな？基礎からやらないといけないし、楽器は軽音部の借りられたからよかった。家かえって基礎練だな！楽器も買わないとな。もう忙しすぎる。

家に帰ってひたすら練習した。なんとか1曲はできるようになった、ほかの人は経験者だからすぐにできたらしい、羨ましいな。頑張ろう。

夏休みが始まった。これで毎日のように練習することが出来る。今日は初めて合わせるらしい、うまくできたらいいな。軽音部の部室に向かうとセッティングしていた。僕もそれを手伝った。さあ準備おっけい合わせよう

「じゃあいくよ」

「おう」

ドラムが入った、その後ギターが入りベースが入った、出だしはよかった、でも初めてということもあり途中からくたくたになっちゃった。

「もう1回やろうか」

「そうだね」

「行くよーテツテツテツテ」

2回目やったらサビまでは綺麗に音が揃った。さすが経験者だ、みんなすごい、僕ももつと頑張らないと！

1日目の練習は終了した。

僕はリア充なのかもしれない。こんな経験は今までなかった。友達もたくさんできて、バンドまで組んだ!!生徒会にも入っている。ちよつとうまく行き過ぎて怖いくらいだ。僕はもう普通じゃない。

夏期文化祭が近づいている

夏期文化祭の準備が進んでいる。夏期文化祭まで一週間もない、結構焦りが出てきてるところもある。僕達はライブをやることになった。今のところ僕達は大丈夫だ。毎日練習をし、ほかの部活の手伝いもしている。今のところ、うまく行きすぎている、これから何もなければいいけど……

今日も練習がある、いつも通りセッティングをして練習を始めた。練習をして少し休憩をしていた時に誰かが部屋に入ってきた。驚いた、校長先生だ、校長先生が何の用だ？何かあったのか？嫌な予感しかしないな。

「あのー生徒会の皆さんですか？少しお話があつて伺いに来ました。」

「はい…… お話とは？」

咲さんも嫌な予感をしてるのかな？そんな感じがする。

「えーつとですね。率直言います。夏期文化祭を無しにしてください！」

「はっ？」

思わず声が出てしまった。

「いや、いきなり過ぎます。もう準備もしています。無理です。」

「もう決定事項なんです」

「生徒に相談なしに決めちゃうんですか？それでも校長先生なんですか？おかしすぎます。みんな頑張つて準備して、楽しみにしてるのに……最低です。」

咲さんは泣いていた。そのまま外に走つていった。たしかにこれはひどすぎる、校長先生だからといってやり過ぎじゃないですか？僕はそう思っていた。

「今日のところは引き上げるよ、また後日伺います。」

校長先生は部屋を出てつた。しーん、とした空気が流れていた。練習どころではなかった。

「どうする?」

「とりあえず咲さん探そう。」

「そうだね」

「手分けして探すか」

「じゃあ、見つかったら連絡して」

「りようかい」

「じゃあまた後で」

僕は部屋を出た。まずどこに向かおうかなと咲さんがいそうなところか、とりあえず生徒会室に行こう。

誰もいないなく生徒会室は違ったか。咲さんはどこ行っただか、もしかして帰ったのかな？咲さんにとって夏期文化祭というのはとても大きかったんだな。全然気づかなかった。それにしても、校長先生はひどすぎる。でも、後日来てくれるって言ってたけどなんでだ？決定事項なら来る必要ないし。もしかして誰かに頼まれてるのか？校長先生だしな、誰に頼まれたんだ？校長先生より上の人か？ありえるな。あつ、咲さん探さないと、どこ行っただか？あの人は。

その後、体育館、図書室、各部室、保健室、職員室など隈無く探した。でもいなかった。そこで、とりあえず戻ろうとした。階段を降りていると、冷たい風があたった、まさか？屋上じゃないのか？階段を駆け上がると扉は開いていた、ここか!!

「咲さんー!!」

「普君……」

「どうしたんですか？戻りましょう」

「戻ってどうするっていうの？もう、決定事項じゃん、私はこの夏期文化祭を楽しみにしていた。初めての生徒会の仕事で頑張ろうと思ってた。それにみんなも協力してくれた。絶対成功させると思っていた。なのに……どうして？なんでなしになっちゃうの？……ここまでやったのに、悔しくないの？」

「それは……それは悔しいよ！僕も楽しみだったんだ。初めてこういう経験もした。」

バンドも組めて嬉しかった、みんなで準備するのも楽しかった、それがなくなるなんて理不尽すぎるよ。僕も泣きたいよ。でも、まだ終わりじゃない。説得しようよ。僕、変だと思つたんだ。なんで最後に後日来るって言うんだ？ 決定事項なら来なくていいじゃん、校長先生誰かに頼まれてるんじゃないかな？ その謎一緒に解こうよ」

「普君…… ありがとうね、なんかやる気出てきた！ よしその謎を解こう!!」

「それでこそ生徒会長」

咲さんを見つけたと、みんなに知らせ、合流した。校長先生のことをみんなに伝えると協力してくるらしい。なんて優しい人達なんだ、泣きそう、うえーん

どうやって謎を解くか。直接校長先生のとこ行かないとダメなのかな？ でも言っても教えてくれる気がしない

「どうしよつか」

「なんかある？」

「やつぱり直接聞きに行くしかないんじゃないかな？」

「だよね……」

「よし！ 校長先生のいる部屋に行くか」

「そうだな」

みんなで校長先生のいる部屋に向かった。校長先生の部屋に行くのは緊張する

な、小学校の時とかもやばかったな。校長先生に呼ばれるとみんなにからかわれるし、めっちゃ怖い。そんなことはさておき、どうするかくみんなが入ってのしようがないしな。

「行くのは2人ぐらいで」

「じゃあ、咲さんと普だろー」

優なんで？なんでおれなの？バカすぎるだろーしんどすぎるだろー一生恨むぞー、もう恨んでやる！

「じゃあ行こうか」

「うん」

「失礼します。」

校長先生はいた。

「生徒会の方々ではないか、どう言ったご要件で？」

「えーっと校長先生って誰かに脅かれています？」

俺は何言ってるんだくそんなこと言ったら死ぬだろ。校長先生は笑っていた、よかつた。助かった。まじで助かったよ。これからどうする？死ぬの？咲さん!!助けてくれ

夏期文化祭に近づいているかもしれないし、遠ざかっているかもしれない。文化祭まで

は時間がかかりそうだ。

準備どころじゃなくなってる

やっぱりこの世界はうまくいかないことが多い。夏期文化祭の準備が進められていた。順調に進んでいた。だが、ズーッと上手くいくわけではなかった。校長先生に夏期文化祭を中止してくれと頼まれてしまった。急すぎて咲さんがどっかに行ってしまった。なんとか見つけることが出来た。でも、夏期文化祭中止は止められない。そこで、校長先生に会うことにした。僕はとんでもないことを聞いてしまった。

「校長先生って誰かに脅されてます?」

「普君何言ってるの?」

「いいよいよ、普君と言ったな、なんでそう思うんだ?」

「えーっとですね、先生は部屋を出る時に後日また来ると言いました。決定事項なのに後日来るのどうかと。．．． 思いまして、それで校長先生は誰かに頼まれてるんじゃないかと。」

「いい推理じゃないか。でも少し違うな。」

「はあ．．． どこが違うのですか?」

「私は決して脅されてるのではない、自分の意思でやってるんだ、まあ話そうじゃない

か、実は私の娘がここに通っている。だが、娘は体が弱く、今、入院中だ。夏期文化祭までには間に合わないらしい。娘に夏期文化祭の話をしてしまった。娘は口では言わなかったが、顔には出ていた。とても悲しそうだった。大したことない理由なのはわかっているが、どうしても中止したかった。娘は病氣と戦っているのに、その間にみんなが楽しく文化祭なんかしてたら辛いじゃないか。だからだ。」

「そんなことで中止しようとしてたんですか？」

「普君そんなこと言っちゃダメだよ」

「娘さんに文化祭を出さしてあげればいいんですよね？」

「まあ私の希望はそうだが、無理な話だ。病院からは出られないぞ。」

「わかってます、僕に任してください。娘さんも楽しませます!!」

「ほんとにできるのか？」

「はい!!」

「そうか、じゃあよろしく頼むぞ」

「じゃあこれで」

「ああ」

校長室を出てすぐにみんなの元に向かった。

「みんなー聞いて!!」

みんなこっちを振り返った。

「夏期文化祭の中止はなしだ!!」

「まじかよーお前すごいな」

「普君すごいじゃん」

優も咲さんも桜さんもみんな喜んでくれた。僕も嬉しくなった。これでまたみんな準備や練習ができる。あとは校長先生の希望を答えなければ、だがどうする？ 考えないとな、みんなに相談するしかない。

「あの一みんなー」

「どうした？」

「手伝って欲しいことがある。」

「普!! なんでも言えー」

「そうだよー」

みんなありがとう優しすぎる。

「話す前気になったんだけど、勝は？」

「なんか用事があるらしくて帰った」

「そうなんだ。」

「で手伝いつてなんだ？」

「文化祭をやるのは決まったがその代わりに病院で入院している校長先生の娘さんも楽しませなきゃいけないことになった!!それでみんなに手伝って欲しいんだ」

「おう、任せろくなあ咲さん桜さん！」

「うん!!!」

「うん!!!」

みんな優しいもう泣いちやう。

「みんなありがとう。」

「いいってことよ」

「で、どうやって楽しませるのー?」

「それを考えて欲しい。」

「そうかくどうしよつか。今日はも

疲れたし、色々あったしまた明日話し合わない?」

「そうだね」

「咲さん一緒に帰ろう」

珍しく桜さんが誘ってるー!!僕も誘われなかな!

「普帰ろうぜー!!!」

お前じゃない。

「おっけい……」

咲さん達と別れた。優と一緒に商店街に行くことになった。久しぶりだな優と出かけるのは、優も優しくなったな。この前までいじめっ子だったのに、最近はそういうことしなくなったのかな？ まあありがたいけど

「普くお前変わったな」

「えっ？」

「前と全然違うじゃん。前まで俺にいじられてばっかだったし、教室でも1人だったじゃん、でも今は友達もたくさんできてるし、文化祭のことめっちゃ頑張ってるし、お前はすごい変わったと思う。」

「ありがとう」

「うわ……なんかきもい」

「なんでだよ」

余計な一言いらねく結構良い奴って思っちゃったじゃん、全部取り消しだわ。そのあと優とファミレスに行き、適当に話して解散になった。

「じゃあなー」

「うんまたね！」

よし帰って考えなければ、どうやったら楽しませることが出来るんだ？ 病院で文化祭

をやるわけには行かないしな。わかんない。明日みんなで話し合った方がいいや。今日は帰って寝よ。

起きたのは少し遅かったが夏休みだしいいだろう。そんな焦ることもなく学校に向かった。夏期文化祭の準備してくれる人もたくさん来ていてあんまり普通と変わらな感じがした。とりあえず、今日は練習前に生徒会室で話し合わないと。生徒会室に行くと、みんないた。なんで、僕は最後なんだ？まあいいや

「みんなこんにちはー」

「ういーす、遅いよー」

「ごめんごめん」

「普君、普君 桜さんが案出してくれたらね！桜さん」

「大したことないからいいよー」

「話してー!!」

「本当に大したことないよー？」

「いいよ！とりあえず話してー」

「わかった。あのね、文化祭を生中継したらどうかなー？って思ったんだけどどうかなー？」

「おおおおおー」

みんな同じタイミングだった、すごいなよく思いつくなく!! 尊敬する!!

「いいじゃん!!」

「桜さんだから言ったでしょ!!」

「うん!!」

「それにしようよ、決定!!!」

「早く決まったね。じゃあ練習しようか!!」

「勝々練習部屋の鍵とってきてー」

「しようがないな」

僕は普通じゃないんだな。幸せ者だ。これからも頑張らないと。

夏季文化祭まで残りわずか……

僕は思った。僕の学校くそじゃね？こんなこと言っていないのか、わかんないが僕はそう思った。だって……まず、生徒会にこんな簡単に入れるか？普通選挙とかあるよね！まあこの学校は特別なんだな!!

夏期文化祭まで残りわずかになった。生中継の案がだいたいまとまり始めた、まず病室にプロジェクトなどを設置して、舞台の前にカメラを置き、それを生中継する。費用は結構かかるが、校長先生にどうにかしてもらおう。まあこんな感じに、まとまったバンドの方も順調だ。バンドは2曲やる予定だ。両方カバーだけど、作曲なんかは僕たちにはレベルが高すぎる。だから今回は、カバーにしました。はい。

ほかの部活の順調に進んでるらしい。あとは待つだけだな。僕達が演奏するのは午後だ。午前中はほかの部活の手伝いだ。遊んでる暇なんてないんだ。まあしようがないな。僕はこの夏季文化祭を楽しみにしている。大成功におわれたらいいなと思ってる。そのためとにかく頑張ります。

今日も練習だ。夏休みのため普段よりは家に出るのが遅い。学校につくのも、もちろん普段より遅い。練習部屋に行くと、絶対僕以外揃ってる。みんな何時に来てるんだ

よ。僕より遅い人を見たことない。桜さん僕の家の隣なのに絶対会わない。僕避けられてるのかな？そうだったら、死にます。嘘です。

いつものように練習をし、とうとう夏期文化祭がやってきた。この日は朝が早い。9時開会式スタートだ。だから生徒会は7時にはいないといけない。すごい眠い。7時少し前ぐらいに前に着いたが、やっぱり僕が1番最後だった。なんでだよ。まあどうでもいいか！

「みんな、おはよ」

「あつ、普だおはよう!!お前いつの1番最後だな」

「それな」

勝、お前はだまれ、急にjk用語使うな！まじわかんなくなるから卍。あつ、俺も無意識に使ってたわ。

「普君おはよー」

はい可愛い、桜さん天使

「おはようー」

咲さん... あなたは裏があるから怖い、でもあの事件から裏の顔を見てないな。今はどうでもいいか。

「じゃあ準備しようか」

「了解です」

「じゃあ、普君は、みんなを体育館に誘導して!!」

「はい」

頑張りマース。

「で、勝君と優君は体育館のセッティングをお願いします」

「はい」

「桜さんと私は司会だからその準備をする。じゃあみんな取り掛かって」

「はい」

僕はまず、正門に向かってそこに来た来賓客を体育館誘導する。簡単な仕事だ。待て

よ、僕…… コミ障やん、大声なんて出せねえええ

「体育館はあちらになりまああああす」

普通に出せたわ。僕ってコミ障じゃなくなったのか？

「あのトイレはどこですか？」

「えーっつとえーっつとあの一」

「？」

「あつちです!!」

「あつ、ありがとうございます！」

「はい。」

僕：… コミ障、結果コミ障。誘導の続き続き。

8時を回ったとこだった。だいたい誘導できたみたいだ。じゃあ僕も体育館行くか。

「普く終わったのー?」

「だいたいね」

「じゃあ、こつちのセッティング手伝ってくれね?」

「ハイハイ」

「サンキューな普く」

勝、お前は黙れ。

「そつち持つて〜」

「せーの」

重いなあ。重いよーなんでこんなに重いんだ?

「はあく快適、快適」

「勝、お前何してんじゃ、とつとと下りろ」

「はーい」

はあくこいつ、めんどくさ、勝はスマートフォンをリズムよくタップするのが、お似合いだな!

「だいたい準備終わったね！」

「そうだね」

「じゃあ、お疲れ様〜」

「ちよ、ちよつとまで、勝、お前どこいくんだよ?」

「文化祭まわるんだよ? 一緒にまわる?」

「仕事ですよ〜生徒会はまわれません」

「えええええ嘘おとおお」

「ほんと」

「知ってる」

うぜえこいつうぜえ、最初からこんなやつだっけ? まあお前は働け!!

「でも、今は暇だな。なにするか?」

「そうだね、どうしようか」

「少し練習するか」

「だな」

軽く練習をして、開会式が始まろうとしていた。僕は隅で眺めていた。あつ、真ん中に咲さんと桜さんが立った。やっと始まるんだな。

「みんな、今日はとうとう、夏期文化祭です〜!!」

「この日のためにたくさん準備してきました。」

「何があろうと楽しみましょう！では夏期文化祭スタート!!!」

「いえええええええええええい」

すごい歓声だ。僕はこんなものを見たことない。よし、まわれないが、ライブとか全力でやろう、今日はとことん楽しむぞー!!

「桜さん、最初つてどこの部活の出し物だっけ？」

「たぶん演劇部!!」

「そうか、よし、カメラのスイッチオン」

生中継だ。校長先生の娘さんが病気で出れないため、生中継という形になった。娘さんは楽しんでくれてるのだろうか？名前はたしか：春さんだった気がするな。春さんは喜んでくれたらしいな。今すごいことが出てきた。咲さん、桜さん、春さん（春に桜が咲く）え、めっちゃいいやん。偶然でもすごいな。じゃあまずは演劇部だっけ？まだ仕事ないから少し見てみるか！何やるんだ？

ロミオとジュリエットか。定番だが、面白そうだな！

「ロミオとあなたは どうしてロミオなんだ」

知らんよ。ロミオなんだよ。こんなこと思っちゃダメだ。演劇部思った以上に、レベルが高くてびっくり!!

夏期文化祭はいいスタートを切った。
夏期文化祭は最高だ。

夏期文化祭は終わりを告げる

調理部のラーメンを休憩中に食べていた。超絶絶品だ。

うますぎて死にそう。時計を見ると12時を回っていた。たしか、ライブの開演は12時15分だった気がする。うん。やばいな。終わったな。んなこと言ってる場合に時間が走れ!!僕は走った。僕に衝撃が走った。

「痛った〜!」

「すいません、大丈夫ですか?」

紫色の髪をした少女だった。

「あこ〜大丈夫?」

「晴人さんく!!!大丈夫だよ」

「危ないですよ。走らないでください」

怒られてしまった。

「すいません、あつ、僕急いでるんで、さよならー」

やばいやばいやばい怒られる。

「普何やってんだよく遅いな」

「全然来ないね」

「あと、1分しかない」

「ごめーん」

「普く遅いぞ、早く準備しろ」

「はい」

なんとか間に合った。ベースのチューニングをさつとやった。よしやろう。幕が開いた。やばい、緊張する。死にそう。優がMCを始めた

「皆さんこんにちばー」

歓声がすごかった

「うえええええええええーい」

「盛り上がってるかあああああああ」

「うえええええええええーい」

「夏期文化祭は僕達が企画させてもらいました。途中、中止になるかと思いましたが、普君、が助けてくれました。普君に大きな拍手を!!!」

「パチパチパチパチパチパチ」

やばいやばいやばいこんなの生まれて初めてだ。めっちゃ楽しいしめっちゃ嬉しい。もつと頑張らないとな。そんなこと思っているとドラムの合図で曲が始まった。もう指が

緊張で動かなくなりそうだった。でもなんとか最後まで指がもった。僕達生徒会のライブは終わった。

「みんなありがとう!!!」

「うええええええええええーい」

幕が閉まり片付けになった。自分のベースをケースにしまった。ドラムは文化祭が終了してから片付ける。みんなの顔を見るとみんな、ほっとしていた。

「やっと終わったね!」

「みんなお疲れ様!!」

「打ち上げどうする?」

「勝…… 打ち上げはまだ早いよ」

「それな」

みんな笑っていた。僕も笑いすぎて死にそうだった。楽しい。今までこんなこと無かった。この人たちが僕は大切にしたいな。

ライブが終わり、僕達は休憩の時間になった。休憩かあくどうしようかな、以外にやることがないもんだね! 面白いえば、春さんは喜んでくれるのかな? 校長先生に電話してみよう。一緒にいるはずだ。スマートフォンを取り出して、電話をかけた。

「もしもし〜」

「あつ、生徒会の野丸普です。」

「あー普くんか、どうしたんだ？」

「娘さんは楽しんでますか？」

「あー楽しんでるとも、ずーつと舞台の演出を見てるぞ！本当にありがとう。わたしも楽しかったよ。ライブすごかったな。これからお願いします」

「よかった、はい!!こちらこそよろしくお願いします！では、失礼します。」

はあ緊張した。校長先生と電話なんて生まれて初めてだよー。普通そうか。とりあえず喜んでくれてよかった。

あつ、さつきぶつかった人がいる。どうしよう、気まずいな。でも謝らないと。

「晴人さん、次どこ行く？」

「だいたい見終わってたしな。」

「あの一すいません」

「あつ、さつきぶつかった人だ。」

「さつきはどうもすいませんでした。」

「大丈夫だよ、あつライブすごかったね」

「ありがとうございます！ではこれで失礼します。」

「はい」

とりあえず謝ることが出来たな。よかったよかった。で、どうするかーやることないしフラフラそのへんまわってるか。てか僕、ぼっちやん。まあ元ぼっちだったからいいや。思った以上に人が多いなく生徒は半分しか出てないのに、それ以外は地域の人なのか？すごい来てくれたな。やってよかった。とりあえず適当にまわってたら、いつの間にか、文化祭が終わっていた。あとは片付けしなとね。とりあえず、体育館行こう。

既に片付けが始まっていた。

「普く手伝ってくれ〜」

優の頼まれた。

「はい」

片付けが終わって体育館に生徒は集まった。みんな集まったところで急にマイクを渡された。

「最後はよろしくね」

「ちよつと待つて、僕何の考えてないって。」

「大丈夫!!」

大丈夫じゃねーよー、まじで何も考えてないって、どうしよう何言おう。適当に言えばなんとかなる。僕はそれを信じた。

「えーつと、みなさん、文化祭お疲れ様です。みなさんのおかげで、大成功に終わること

ができました。今日は本当に楽しかったです。僕の中ではこんなに楽しかったのは生まれて初めてです。みんなの出し物も最高でした。ラーメンも最高でした。今日は全部最高でしたー！ー！ー！！人生は一度きりなので、楽しんだ方がいいと、思いました。またイベントなど計画するかもしれないです。その時はまたよろしくお願いします。以上です。」

拍手がすごかった。何度も思うけど、本当に楽しかった。またやりたいな。生徒会でまた企画しよう!!

「みんなお疲れ様!!」

「普くよかったぞー」

「それなー」

勝、それなやめなさい、今日はいいいけど……

「まじで緊張した。」

「だよね。普くんお疲れ様〜」

桜さん、ありがとう！僕は泣きそうだよ。

「みんなありがとね〜」

「で、打ち上げどうする?」

「勝は打ち上げ好きだな。」

「だーいすき」

「おもしろーどうするか？」

「何食う？」

「なんでもいいよー」

「とりあえず、帰りの準備するか!!」

「そうだね」

「こうして文化祭は終わった。またこういうことできたらいいな！文化祭は最高だった。」

夏期文化祭が終わればいつも通り

この世界はアニメやゲームと違ってくそだと思っていた。でも文化祭を通して、この世にもいいことは沢山あるんだなと思った。文化祭は大成功だった。最高だった。でもそれが終わったらまたいつも通りの普通の生活に戻る。だって僕は普通の普だ。まあまた、イベント事があれば、ガチで手伝うでしょう。なんか楽しみだ。

文化祭の打ち上げは、寿司屋に行った。それなりに楽しかった、けど疲れて、寝そうになった。早めに解散をした。家に帰り、風呂に入り寝た。まだ夏休みは終わってない。あと一週間はあろう。それまでに宿題を終わらせればならない。大変だ。もうーずーと寝てたい。とりあえず今日は疲れたから。おやすみく!!

起きたのは昼をすぎたぐらいだった。結構寝たはずなのに、全然寝れてない感じがする。なんでだろう？まだ寝足りないのか？じゃあ普通の日だったら終わってたわ。特にやることがないため、家でテレビ見たり、本を読んだりしていた。まあ僕には友達なんていないから、面倒ごとはないだろう。うん…ないはず。てか、今のってフラグか？フラグなのか？やばい、嫌な予感しかないな。

「ピンポーン」

はあ、フラグが当たってしまった。僕って不運だな。なら普通がいいよー。恐る恐る玄関に向かう。外を見ると、優と勝がいた。まじかよ、なんのようだよー！めんどくさー、勝、あいつ音ゲーしかやらないやん。あんなのつまんない。携帯タップして何が楽しんだし、携帯壊れるだけだし。よし居留守を使おう。しばらく放置

「ピンポーン」

「普くいるのはわかってる。居留守使っても無駄だぞー」

「……」

なんでや、凶星や、死ぬや。えーどうしよう。このままじゃ捕まる。なんかいい案はないか？

「考えても無駄だぞー」

「そうだぞー出ー!!」

とりあえず勝は黙れ！この音ゲーマー。

「早く出てこいよー」

えーまじめんどくさい。どうしよう、暇だから行ってもいいんだけど、めんどくさいんだよなー。

「はいよー今行く」

「やっと反応しやがったよ」

「やつとだな。」

「で、なんのようですかー?」

「生徒会会議をするらしい」

「初耳なんですけどー」

「それな」

相変わらず、勝のそれなはウザイ

「場所はケイゼリアだつて」

「まじか、商店街の?」

「そうだよー」

「じゃあ先行つてくれ」

「了解、ちゃんと来いよ?」

「わかつてるつて。」

よし寝よ。流石にやめておくか、殺されてしまう。来るのはあの二人だけではないから。よし準備しよう。はあーめんどくさい。打ち上げはやったやん。まあ行くか。

商店街に向かっている。おつ、後ろから、走ってきてるな!誰だ?これは... 久しぶりのラブコメ的な展開か?来い、ぶつかつてこいよー

うわああっ、まじかよ。まじでぶつかってきたやん。痛つてー」。

「すいません、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。」

「ほんとにごめんなさい。あのーすいません、普君でしょうか？」

「そうですけど……」

「そうなんです!! あっ、急がないと、すいません失礼します。」

「はあ……」

なんだったんだ?なんで俺のこと知ってるんだ?あつ……早く行かないと怒られる。

ケイゼリアに駆け込んだ。

「ごめん、遅くなった。」

「遅いよ」

「もうご飯食べちゃった。テヘペロ」

勝……キモすぎ

「あーまあいいよ、なんで今日は集まったの?」

「生徒会の新しいメンバーの紹介、今日は来てないけど。」

「そうなんだ。名前はなんていうの?」

「あの子だよ、校長先生の娘さんの春さん」

「あー顔は見たことないんだよね」

「次の生徒会には来るって。」

「そうか・・・」

「これだけ？」

「まあそれだけだけど、交流を深めるのが今日の目的」

「ほーう、とりあえず僕なんか食べるよー」

僕は店員を呼んでペペロンチーノを頼んだ。

「交流を深めるって何をすればいいのー？」

「話したりすればいいのかなー？」

「それな」

はい。勝、黙ろう！それな好きだね〜

「普くドリンクバー持ってきて〜」

「私もおねがーい」

「私は自分で取りに行くからいいよー」

優しい。天使だ。ありがとう

「俺も・・・」

「お前はやだ、」

「まだ最後まで言っていないですよー」

「じゃあとつてきマース」

「ありがとねー」

くそ、パシられた。

「普つてほんと、普通だね。」

「それね」

「でも、たくさん働いてくれるよね」

「イベントに対しては真面目だな。」

僕が戻ってきた時に話が盛り上がっていた。何の話かな？

「とつてきたぞーなんの話をしてたの？」

「なんでもないぞ。」

うわーココソコソしてんじやないしー言えしー。

そのあと適当にくつちやべつて解散となった。なんと今日は、桜さんと帰れる。やつた。死にます。可愛すぎて輝いてる。もうダメだ俺の正気がもたない。

「今日はお疲れ様です。」

「何もしてないですよ。」

可愛い。

「帰り道はこつちでいいですか？」

「いいですよ、合わせます」

可愛い。

「じゃあ帰りましょうか」

「はい」

会話が弾まねえ、可愛い過ぎる。もう無理。

あれ？もう家の前やん。あれれれれ？早いなー何も話して、ないぞ。

「じゃあ、ありがとうございます」

「はい。お疲れ様です」

「はい。」

これで終わってしまった。もっと話せばよかった。

あーあラブコメ的な展開あると思っただけにな。

僕はラブコメ的な展開に出会えないままなんだな。

僕は普通だった。

新しい仲間

いつものように生徒会室に集まったが、やることがない。あー最近暇だイベントみたいのなかなく夏期文化祭みたいに、なんかないと死んじやうく

「あーーひまだー」

「暇だね」

「暇過ぎる」

みんな机にうずくまっている。

「それな」

お前ほんとそれ好きだなくそれな神って呼ぶぞ。自分で考えて笑ってしまった。

「普くお前笑ってんだよ」

「きもー」

「勝、だまれ。ちよつと思ひ出し笑いしただけ」

「普、お前俺にだけあたり強くね？」

「気のせいだろ」

「そうか」

みんな黙り込んでしまった。ほんとに暇すぎる。

「あの一」

「どうしたの桜さん？」

「生徒会にやってほしいBOXとか作ったらどうかかな？」

「桜さんってほんとにすごいね！」

「そんなことないよ」

「それいいね、やろうよ。」

「箱の名前考えようぜ。」

咲さんが立ち上がった。

「私、名前考えた。」

「おおおおお」

みんな同時におおおお、だった。

「生徒会にやってほしいBOX」

「そのままだし、名前ダサ……」

「勝君、今なんて言った？」

「なんでもないです。」

あー言っちゃった。勝……ざまあ。女の人怒らせたら怖いよ

「じゃあ早速その箱作るか。」

「材料はここにあるものでなんとかなるか?」

「ダンボールとガムテープならある。」

それだけしかないのか?でも形にはなるな。見た目ダサいけど。てか、なんか来るのかな?来なそうだな。こういうのは来ないで終わるっていう2がオチだから。まあいいや。

「とりあえず、形だけ作って置いとくか。」

「そうだな。」

激しくドアが開いた。めっちゃびびっくりした。

「ああああああーこの前ぶつかってきた人だ。」

「えっ、普、知り合いなの?」

「まあ一応」

「その子が新しく生徒会に入る子だよ」

はあーまじかよ、待って………これってラブコメ的な展開じゃないか?

「春です。よろしく!!」

「この子テンションやば、」

えっ、珍しく優が引いてる。勝なんて、音ゲー始めやがった。こいつらコミ障かよ。

俺本読も。

「よろしくお願ひします」

「よろしく」

女子同士はすぐに仲良くなるんだからいいよな。男子は長い間いないと仲良くなれないんだよな。コミ障も改善されないし、まあそのうちね……

「ところで何してたんですかー?」

「生徒会にやってほしいBOX作ってた」

「何その名前受ける」

あーあ言っちゃったよ、この子さようならー。

「そうだよね」

女子同士だと、許せちゃうんだ。あれ? 勝のこと蹴ってね?

「痛ええええええええええええ」

「どうしたの勝君?」

「なんでもないです。」

勝も可哀想だな。まあどんまい、それが女子だ。

「とりあえず今日設置して、明日の放課後まで入ってるかだよね。」

「そうだね、じゃあ今日は解散!!」

「うー」

「はーい」

「ばいばいー」

「さいならー」

「じゃあね」

これで今日の生徒会は終了した。

次の日の放課後

「さあ、開けてみますか。」

「入ってるかな？」

「どうだろうな」

「普、開けてみるよ！」

「えー優が開けるよー」

「いいから早く」

「はーい」

僕は箱を開けた……

紙が2枚入ってた。

「入ってるやん」

「2枚も……」

「よし1枚目開けるぞ……」

（俺は、勝だ!!名前はまだない。つてあるやないかい）

「おい、勝」

みんなの視線が勝にいった。

「えーつとこれはですね。ジョークというやつですよ…… 普ならわかつてくれるよね？なんだよその目、すいませー……ん」

勝は外に走ってった。

「あーあ行っちゃったよ」

「あいつめ」

「まあいい…… 次開けようよ。」

「どうせ勝だろ」

「かもね」

「あけよーあけよー」

開けてみた。そこには……

（生徒会の皆さんこんにちはー、私は生徒会に依頼があつて、この手紙を書きました。夏期文化祭での活躍を見ました。このような箱を作ってくれてありがとうございます。）

内容というの…… 昼休み中庭のところでご飯を食べようと思ったんですけど、ここに2人組の金髪の男達がいて怖くてその日は、やめたんですけど…… その男達は毎日毎日そこで食べていて、貸切状態みたいになってるんですよ。それで、その人達に、ここはみんなで使う場所だよーって言ってほしいんですけど。お願いできますか?」

「ガチのヤツだったね」

「金髪の男か……」

「しんどい話だ。おいお前ら、ここはみんなで使うんだぞなんか言ったら、殺されるよなー」

「それな」

「勝、いつの間にいたのか」

「いた。」

「そうか」

うーん、簡単そうな気がして、難しいな。喧嘩とかしたくないしな。誰かどうにかできないかね? 先生に頼めばいいのになんで生徒会なんだろう。とりあえず策を考えないと……

「私になんとかするよ」

「えっ、春さん?」

「私の初めての仕事だ。任せなさい!!」

えーすごい心配く大丈夫なのかこいつはく?でも女子だから流石に暴力は振らないだろう。以外に行けるのではないか?

「春さん任せていいですか?」

「普!!正気かよ」

「うん」

「わかった、私頑張る!!」

こうして、生徒会にやってほしいBOXの初めての仕事をやることになった。メンバーも1人増えたことだし、この先どうなるのかな?

生徒会はまだまだ続く。

新人の最初の仕事

生徒会は新しいことを始めた。生徒会にやってほしいBOXネーミングセンスはくそだった。それで早速依頼が来た。それを入ったばかりの春さんがやってくれるらしい。新人なのにすごいな。てか大丈夫なのか？心配でしようがないな。僕も手伝おう。今日春さんにとこ行ってみるか。

放課後

生徒会室に行った。生徒会室には春さんはいなかった。どこに行ったんだ？もしかして？中庭に行ったのか？流石に準備無しで言ったらやばいんじゃないか？変なことな。とりあえず中庭に行こう。予想通り中庭には春さんがいた。何してんだ。何か探してんのか？

「おーい、何してるのー？」

「犯人の証拠を探してるのー!!」

こいつは馬鹿だった。犯人って犯人はわかってるじゃん。昼休みに見に来ればいる

だろう。やっぱこいつひとりじゃ不安だな。

「いやいや、昼や来ればいるだろ」

「あーその手があつたー!!」

やっぱ馬鹿だ。勝より重症かもな。

「明日に昼休み見に来よう!!」

「最初からそうしろよ」

「今日は帰ろう!!」

「はい。」

でもなあー明日直接いってどうするかだよな。あいつなら余計なこと言いそうだよな。よなくだつて……馬鹿だもん。あいつに余計な事言わないように口止めしないと。とりあえず、おおごとにはしたくないな。これからの進路に関わってきたらやだしな。結局、めっちゃ手伝っちゃつてるわ。頼むから静かに終われ!!

次の日昼休み

待てよ!!春さんどこいった?まさか、先に行つたとかじゃないだろうな。やめてくれよ。問題起こすなよ。よし、急ごう。

「おーい、春さんー!!」

そこには金髪の男が倒れていた。

「あー言う事聞かなかったから、やっちゃった！テヘペロ」

「えええええ……嘘だろお前」

「てへへー」

てへへ、じゃねえよお前やばいな、怖い怖い怖い怖い

「解決策がこれしかなかったんだよー」

「こいつらどうするんだよ。」

「お父さんに頼む!!」

「その手があったか。」

「二度とそんなことすんなよ」

「はーい」

女子ってやばいなく怖いなくそれに比べて桜さんは天使だ。可愛い過ぎる。優しいし。

よし、解決したし。生徒会長知らせるか。

「つてことがあります。」

「は〜?」

春さんニコニコしている。普段からこのテンションかよ。

「女子って怖いね」

あなたもだよー。

「まあ解決したしよかったね」

「はい。」

「春さんもうそういうことはしないでね。」

「はーい」

とりあえず終わったし、また暇になるんだな。BOXの中何も入ってないし。もう今

日は帰るか。

「じゃあ僕はもう帰る〜」

「いやいや帰らないですよ」

「なんで？」

「なんとなく〜」

。咲さんは顔を赤く染めていた。僕には意味がわからん。僕は早く帰りたんだよな

「何すればいいかな？」

「特にすることない」

「じゃあ帰らしてよ。」

「ダメ」

「えええ………」

うーんどうしよう。帰らせてくれないしやることないし。とにかく暇。

「そういうえばみんなは？」

「帰ったよ。」

「咲さんお疲れ様です〜!!」

「春さんお疲れ様〜」

「なんで僕だけダメなんですか？」

「それはですね。話があるからですよ」

話ってなんだ？えつ、僕なんかしたか？えー怖いな。

「話というのは？」

「あのー覚えてない？」

ん？なんのことだ？なんかあつたつけ？

「えーつとなんのことかわからないです。」

「だよねーごめんね、もう帰っていいよ」

「あつ………はい」

「じゃあね」

一体なんのことだったんだろう。全然思い出せない。咲さん悲しそうな感じだった。やつ僕は何かを忘れているのか？ 思い出せない。咲さんに嫌な気持ちさせたくないのに。思い出せ。ダメだ、やつぱりわかんない。僕はそのことを帰り道、寝る時など、ずーつと考えていた。咲さんは何が言いたかったんだろうか？ 何か悪いことしたなら謝らないといけないし、単純に謝るだけじゃだめだし、あーなんかもうごちやごちやしってきた。寝たくても寝れない。

咲さんが言いたかったことはわからないまま。

暇だと思っていたが.....

最近こそ暇だ。やることなく、生徒会室に行くにもなんかしんどい。行っただけの上でごろーんってするだけだ。そろそろ何かやることを見つけないといけない。生徒会にやってほしいBOX

は毎日確認してるが、空っぽだ。置く場所が悪いと思う。生徒会にやってほしいBOXは生徒会室の前に置いてある。生徒会室は四階の奥にある。よっぽどの事がないと来ないだろう。置く場所を変えたらいいのに、でもあれか、くだらない内容とか入れてくるやついるか。それでも移動させた方がいいな。咲さんに相談してみるか。

「咲さん〜!」

「何?」

えっ怒ってない?気のせいかな?いや怒ってるよな。なんかしたかな?僕.....

「あのー生徒会にやってほしいBOXの置くとこ変えた方がいいと思うんだけど。」

「そうね、やつといて...じゃあね」

「待ってください。なんか怒ってます?」

「怒ってないよ」

「そうですか……」

絶対怒ってるよあの人、女子って怒っても、自分が何やったか教えてくれないんだよな。もう怖い。どうしよう。ただ謝るだけだと、ダメでしょ？だからといって聞けないしな。うーん、どうしよう。今考えたいけど、先に生徒会にやってほしいBOX移動させるか？どこに置こうかな？下駄箱でもいいけど、先に生徒会にやってほしいBOX移動うん。そうしよう、早速移動させよう。これで明日になれば、入ってればいいな。頼みます。

次の日の放課後

よし、生徒会にやってほしいBOX見に行こう。入ってればいいけどなく、つてめっちゃ人集まってるじゃん。まじかよ。多いのは嬉しいけど、そんな一気に解決出来ないよ。えー一回、回収するか。

「すいませーん回収しマース」

「えー」

「ちよつと待って」

「まだ俺書いてない」

「待てえええええ」

「すいません、時間なんで」

「時間なんてないだろ」

あーしんどい。はやく逃げたい。

「さようならー」

とにかく逃げられた。生徒会室で開けてみるか。

「おおー普ーなんだそれー？」

「生徒会にやってほしいBOX」

「なんでそんなに入ってるんだ？」

「置く場所変えたら、人がすごかった。からとりあえず回収してきた。」

「お前やるな。」

「普君すごいね」

「普くやるね」

勝は黙ってる。てか咲さんが何も言ってくれない。そっぽ向いてる。何したって言うんだよ。なんかしんどい。

よし、開封するぞ。

「学校に自販機をいっばいつけてくれ」

「売店のメニューをもっと豪華のにして」

「1日授業を2時間にしてくれ」

「授業中にスマホおっけいにしてくれ」

「学校の先生を美人にしてくれ」

「遠足を1年で1回だけじゃなく、1年に5回にしてくれ」

「校則を軽くして」

「僕と付き合ってくれ」

「こいつら馬鹿なのか？ やってほしいにも限度があるのわかんないのかよ。校則変えることなんてできるわけないやん。ましなやないのか？ 1枚だけ真面目なのがあった。」

「私いじめられてる。助けてください。」

ガチのヤツだった。まじか、誰が書いたんだ？ 肝心の名前がないぞ。

「みんなーこれ解決しようよ。」

「いいんだけど…… だれかわかんないんだろ？」

「放送とかで呼ぶわけにはいかないしな」

「そうだね」

「内密に探すしかないよな」

とりあえず、こっそり探すか。なんで名前を書かないんだろう？ 見つければいいけど。

それにしても咲さん全く話してくれないな。今日この後呼び出そう。今回の件も手伝ってもらいたいな。

「咲さん!!この後いいですか?」

「うん」

生徒会室に2人だけになった。すごいしんどい。気まずい。よし!!話そう。

「あのー咲さんなんで怒ってるんですか?」

「怒ってないよ。」

「いや、怒ってるじゃないですか?無視したりしてるじゃないですか?なんで怒ってるのか教えてくださいよ。」

「.....」

咲さんは黙っている。なんで何も言ってくれないんだ?謝りたくても謝れないじゃん。

「頼みますから言ってくださいよ。」

「じゃあ.....いつになったら気づいてくれるの?」

「????」

「まだわからないの?、幼稚園の時一緒だった咲だよ」

「えっ.....」

嘘でしょ。あの仲良かった咲ちゃん？それは怒るのも無理ない。僕はなんてことをしてしまったんだ。泣きたい。

「ごめんなさい、全然気づかなかったです。」

「気づいて欲しかったただそれだけ、それだけで、怒ってた、私も馬鹿だった。ごめんね」
「僕も全く気づかないで、すいませんでした。」

「うん!!」

仲良くなることが出来た。嬉しいけど。気づかなかったつてことが、もうしんどい。はあーこれからはそういうことないようにしないと。

僕はひどい人間だった。

新たな仕事

咲さんとはなんとか、仲良くなることが出来た。でも、まさか、幼稚園の時の咲ちゃんとは、思いもしなかった。幼稚園の時、ずーつと一人ぼっちだった。でも咲ちゃんがいてくれたおかげで楽しかった。幸せだった。でも先に幼稚園を出て行ってしまった。その時は家でどのぐらい泣いたことか、今となつては思い出だ。まさか、また会えるとは、嬉しい。

新しい仕事が出来た。誰かわかんない人から、助けてくれって言われた。解決したいんだけど、誰だかわかんないし、だから内密に少しずつ探そうと思う。どう探すかはこれから話し合う。それにしてもなぜ名前を書かない？紙に名前を書く欄はあったはずだ。謎だらけだ。

とりあえず、相談しよう。

「で、内密って言ったってどうします？」

「うーん、どうしようねー」

「もしかしたら、もう1回生徒会にやってほしいBOXに入れてくれるかもしれないなー」

「たしかに」

「そうだね」

「そうだな、とりあえず生徒会にやってほしいBOXを元の位置に戻そう。もしかしたら、次は名前を書いてくれるかもしれない。よしそれで行こう。」

「よし、それで行こ」

「勝、戻ってきてー」

「えーなんで俺が、今、音ゲーなうだから。」

「わかったよ僕が行く」

「ありがとね」

よし、置きに行くか。また1日待つか。

次の日

よし確認しよう。入ってるかな？あってくれ。

「あつた……でも……名前が無い。なんでだ？なぜ名前を書かない？」

「あつた？」

「あつ咲さん」

「入ってたんですが。名前がないんです。」

「えっ……ってことわ、意図的にやってるってこと？」

「可能性あります。」

書かないってことは生徒会に名前をバレたくないのか？名前なしでどうやって探せばいいんだ？

「ん？」

「咲さんどうかしました？」

「裏になんか書いてありますね。」

「なんて書いてあるんだ？」

「っ？かな」

「っ、ですネ」

「ってことわ、一枚目にも……」

「書いてあるかもね。」

「生徒会室に戻りましょ！」

「うん」

「みんなあああー衝撃的事実が見つかったぞ。」

「みんな何してんだよ。勝は音ゲー、春さんは漫画、優は勉強、はあ？、桜さんはちゃんとこつちを向いてくれている。なんて優しい子なんだ。」

「衝撃的事実って……？」

反応してくれたの桜さんだけだよ。

「あのーですね。この子紙の裏に文字を書いてるんですよ、で……一枚目が、み 2枚目は、つだった。だからこれからも入れに来るかもしれない。」

「でもーその二文字でもうわかりますよ。」

「桜さんまじすか？」

「えっほんとですか？」

勝急に釘付けになるなよー春さんに関しては、早く漫画閉じろ。優お前は勉強やめろ、あれ咲さんどこいった？

「あれ咲さんはー？」

「わかんないーさつきまでここにいたのに。」

「もしかしてもう暗号解読したのか？」

咲さん

暗号は解読できたけど。どこにいるのかな？多分、あの暗号の意味は、見つけてっていう意味だと思う。大事にしたくないんだと思う、自然に見つかるっていうのは楽だも

んね。とりあえず、探さないと、何されてるかわかんない。

普

「僕達も探しに行こうよ、咲さんだけじゃ何があるかわかんないよ。」

「そうだな、俺達も行くか、行くぞ勝」

「わかったよー」

「じゃあ行きましようか。」

僕達は生徒会室を出て咲さんを探しに行った。咲さんに何も無ければいいけど。

咲さん

全然いないな。どこにいるんだ。いじめるって言ったらやつぱり人が少ないところだよ。あと行ってない所と行ったら、体育館だー、体育館の倉庫!!そこしかない。急ごう。

体育館に入った瞬間物音が聞こえてきた。やつぱここにいるんだな。ここにいないのね。よし開けよう。

やつぱりいた。3人の女子に囲まれていた。いじめられていた子は、顔にあざがあつ

た。相当ひどいことされてたんだ。可哀想に。

「お前なんだよ？」

「生徒会のもんですけど」

「だからなんだよ？」

「いじめは良くないですよ。」

「うるせえよ、お前に何がわかるんだよ。」

「わかる。私もこの子みたいにいじめられてたんだ。だからいじめられてる子がいると、可哀想で仕方が無い。どうせ少しのことはいじめてるんでしょ？」

「あーそうかもね。私はな、こいつに自分の彼氏を取られたんだ。」

「あーあくだらないわね。あなたくそね。」

「あ？やんのか」

「かかってきな。」

3対1は多少手こずってしまっただが……勝った。

「口だけだな。」

「くそ……」

「大丈夫？」

「大丈夫……ありがとう……」

「咲さんー！！」

「あれ？普君」

「あの一この3人って咲さんが？」

「そうだけどー」

「そうですかー」

「勝、女子って怖いな。」

「それな」

「でたー勝のそれなー！！」

「生徒会の皆さんありがとうございます。助かりました。私が依頼してました。」

「だよね、よかった。」

桜さんは優しい

「これだけでいじめが終わるとは思わんな。」

「そうだよね」

「絶対仕返しに来るよ」

「だよね」

「まあ、とりあえずは一件落着だな。」

「また、なんかあつたら言つてね？」

「はい!!ありがとうございます！」

なんとか解決することが出来た。それにしても咲さん1人で3人も倒したのか。すごいな。女子って怖いね。女子には従つた方がいいな。なんで女子ってこんなに強いのか?最近怖い女子しか見てない。いや、桜さんがいたー!!あの人は優しい、天使だ。それにしても、勝や優は働いてくれないしな。とりあえずもつと頑張つてほしいわ。

生徒会の仕事は解決した。

次のイベントは？

生徒会室にやってほしいBOXは1回収して、とりあえず休みにした。生徒会にやってほしいBOXがなくなればまた暇になる。結局暇ならばやればいいのに、もうやめようって言ったのは咲さんだった。理由はわかんないけど。そういえば、今日咲さんに生徒会集まつてと言われた。なんかあるのかな？まああるから呼び出すんだと思うけど……暇じゃなければいいや。

放課後

僕はとりあえず、生徒会に向かった。

予想通りみんな先にいた。新しく入った春さんもいた。みんな集合が早い。絶対僕が1番最後、謎ですな？

「咲さん、今日なんで呼び出したんですか？」

「実はね……」

「かつこいい〜」

桜さんが顔を赤くしてる、まじかよ〜

「それな〜」

はい黙ろう、勝君

「普くなんで呼び出されたと思う？」

「うーんなんでだろうな。」

「みんな聞いてくれ、生徒会は新しいイベントをやることになった。」

「おおおおお？」（全）

みんな綺麗に揃ったな。

「やっとなら抜けて出せるー！！」

何泣いてんだよ勝、お前暇そうじゃなかったぞ、ずーっとなら音ゲーやってたよなー？

「で…… そのイベントって…… なんですか？」

「それはですな〜」

（ゴクリ）なんか緊張する。おー優も横で緊張してる。勝はいつにどおりだな。咲さんは早く言いたそうな顔だ。桜さんは早く言っただけいいんだな。目が星だ。春さんは寝てるな。もう知らん。

「早くしてくださいよー」

僕がそう言うと、先さんの口が開いた。

「えーつとですね… 他校とイベントすることになった。」

「……………」

「ほう」

えっなんか反応に困る。よし、無理やり…

「まじすかああああ？ やった。やっと暇から抜け出せるー」

「普きもいよ」

「俺のそう思う。」

「私もちよつと引いたわ。」

「私も……………」

「はあく私もzzzzzz」

寝てますよね？ てかさりげなく桜さんに言われてるのがしんどい。あー死にたい。

「で… 他校とつて具体的に？」

「だから、他校とやるんだよ？」

知ってるって、それは知ってる。

「もつと具体的に、」

「何も決まってないよ。」

「え。」

まじで言ってるのかこの生徒会長は、文化祭の時もそんな感じじゃなかったっけ？てか体育祭前で忙しいんじゃないの？体育祭って来月頃か。やばいな。やってる時間あるか？

「やってる時間あるんですか？体育祭の前ですけど」

「それな」

「やる。」

「これはガチだ。断ったら殺されるヤツ

「わかりました。」

「他校ってどこですか？」

「えーつとね。うち神野黒高校（じんのぐろ）と隣の北神野黒高校だった気がする。」

「そうなんですか」

「はい」

神野黒高校と北神野黒高校は近い。すぐ近くの商店街を抜ければ、到着。近い。だから知り合いも多い。

「何やるかは…… 決まってるじゃないんですよねー？」

「うん!!なので明日までにみんな決めてきて、ひとり一個」

「まじかよ」

勝黙って聞いとけ。

「了解です。」

「じゃあまた明日ね。今日は解散」

「お疲れ様でしたああああああ」(全)

今日の生徒会はこれにて終了。決めといて言ってもどうするか。わかんないよな。適当に言おう、で誰かの意見で決まりになるだろう。もうそれでいいよ、僕はやること決まったら、全力でやる。春さんずっと寝てたけど大丈夫か?でも決めるのは得意そうだな。あのテンションがあればな。

次の日の放課後

いつものように生徒会に集まった。やっぱり僕が1番最後、だった。もうどうでもいいや。

「みんな揃ったね?」

「はい!!!」(全)

「じゃあ1人ずつお願いします。まずは、勝君から」

「はい!!!えーつとですね。俺が考えたのは、ラーメンです。みんなでラーメンを作って、交流を深めようと思ったからです。」

勝いいこと言うな。びっくりしたわ。

「ありがとう。次は、優君」

「はい。俺が考えたのは、秋文化祭です。夏季文化祭みたいに、人をたくさん呼んで、楽しめたらなと思いました。」

みんないい意見言うねー

「じゃあ春さん」

「はい、私はお好み焼きが食べたい」

「はい次」

ちよつと待てい、今ので終わり？しかもいいの？理由言つてないよ？つて次僕か。

「次は普君。」

「はい。僕が考えたのはスポーツ大会とかどうですか？チームで組むスポーツだったら、ほかの高校と交流が深められると思います。」

ふうー結構緊張するな。

「じゃあ最後は桜さんね」

「はい。私は近くの公園などでフリーマーケットなんてどうかなと思いました。」

よく思いついたな。流石、桜さん

「それで各高校の生徒さんからいらぬものを回収して、それを、安く地域の人に売るつ

て言うのはどうですか？地域交流も深められるし、リサイクルにもなる。」

「おおおおお」

「もう、それで決まり、それしかない。」

「桜さんすごいね。」

「いやいや、大したことないって。」

すごいなー今回も桜さんの意見で決まりだね。

「じゃあ、フリーマーケットで決まり!!!頑張るぞおー!!!」

「おおおおお!!!」(全)

こうして次やるイベントは決まった。やっと暇から開放される。これから忙しい日々だ。桜さんの意見だし、ガチでやるぞ。桜さんをがっかりさせたくない。

今少し考えるだけで、やるが多そうだ。生徒からいらぬもの回収しないといけないし。日程や時間、公園を使つていいか交渉しないといけないし、あーたくさんある。頑張らましよう。

また新しいことが始まった。

さあ頑張りましょう。

生徒会でのやるイベントが決まった。桜さんが提案してくれた。フリーマーケットをやることになった。フリーマーケットはいいと思った。生徒からいらぬものを回収する。リサイクルにもなる。公園でフリーマーケットをやる地域の人との交流ができる。一緒に物事をやると他校との交流に繋がる。とてもいいものだと思ってる。これをやるのはとても大変だ。やるが多すぎる。まず、生徒から使わないものを回収しなければならぬ。あとは公園でフリーマーケットをやっているか、交渉しなければならぬ。やることはこれ以上ある。大変だが……桜さんのためにも僕は頑張る。

「今日は、生徒にいらぬものを持ってきてーっていう呼び掛けをしよう!!」

今日は呼び掛けをするのか？呼びかけただけで集まるか？ちよつと不安だ。

「はい」「了解です」「わかったー!!」「わかりました。」「ういー」

「じゃあ、とりあえず校内を回って、期限は4日後ね」

さあどうやって呼びかけるかな。4日しかないからな。普通に言っても来ない

だろうから、なにかお礼をすれば集まってくるかもしれないな。でも今の高校生って何が欲しいんだ？多分俺の給料じゃ買えないよな。うーん、わかんない。注目を浴びれば、いいのか楽器でも弾くか？ベースだけじゃなくしんどいな。お笑いとか？そんなの僕にできるわけないし……。今回は結構難題だなー。みんなどうやってやってんだ。ちよつと見に行くか。

「いらないものありませんかー生徒会が回収しマース」

勝、見つけ。てかそのまま呼びかけてるね。あれは人來ないだろ。

春さんも同じようなことをやっていた。馬鹿だなくくるわけないじゃん……。つてあれ？何人か来てるぞ。驚きだわ。

桜さんと優は帰ったみたいだ。たぶんなにか作戦を考えているんだろう。流石、頭良い2人だ。僕も今日は帰るか。うん帰ろう。まだ時間はある。

家について僕はずっと考えていたー全然思いつかなかった。うーんどうしようか？別にいらないもの集めるのは、生徒だけじゃなくてよくね？そうだ!!生徒だけじゃなくていいんだ!!よしこれしかない。

次の日

今日は土曜日だ。僕がやることは、ひたすらいらないもの集めだ。近所の家を回って

回収する。それが僕の作戦だ。みんなはどうしてるんだろう。

よしー軒目

「すいませーん」

「はーいどちら様で？」

「えーつとです。神野黒高校の生徒会のもんです。今度イベントでフリーマーケットをやることになったんですが……そこでないものつてありますか？なんでもいいんで……」

「いらぬものねーあった。あった。」

でつかいくまのぬいぐるみを渡された。

「これ処分に困ってたのよー」

「ありがとうございます。では失礼します。」

おー早速ゲツトだ。やったね。で、このくま学校には持ってけないから、もらったものは全部家で管理するか。

とりあえず今日はいっぱい集めるぞ。

2時間後

すごい量だ。もう持てない、1回帰ろう。すごいことにまわった家、全部くれた。こ

の方法は完璧だ。

もらったものと言うと「昔のゲーム機」「ぬいぐるみ」「おもちゃ」「服」などたくさんあった。もう商品に困ることは無いな。でももつと集めよう。

その次の日の日曜日も、ずーっと集め続けていた。

北神野黒高校

「神野黒高校との交流だが、フリーマーケットをやることに決まったらしい。そこで我々は彼に勝負を挑むことにする。」

「イエッサー」

「覚えておけ!! 神野黒高校」

日曜日が終わわり、月曜になった。明日にはどのぐらい集まったか、報告しなければならぬ。僕はたくさん集めた。他のみんなはどうなんだろう。他の人のやり方を見てみたい。あとは北神野黒高校の生徒を全く知らない。まあ興味ないんだけど。

勝とかちゃんと集められてるのか? ちよつと不安だ。

結果楽しく終わればいいと僕は思っている。

次の日の放課後

「さあみんなに発表してもらおう。みんなどのぐらい集まったのー？勝君から」

「えーつと俺は5人から集めることに成功しました。」

「次は春さん」

「私はですね。15人からですね。」

「じゃあ次は優君」

「俺は30人ですね」

「桜さんはー？」

「私は50人ぐらいから……」

「最後、普君はー？」

「僕は100人ぐらいですかね」

「は？」

「まじで？」

「すごい」

「どうやってやったの？」

「生徒から集めなくてもよくね？と僕は思いました。だから僕は地域の人に頼んで、ずーっと探していました。」

」

「その手があつたな。普すごいな」

「前回も人集め活躍してたね。」

「僕得意なのかもしれない。」

「そうですか……これで売れるものは困りませんね。」

「そうですね、」

僕ははまた活躍することができたらしい。良かった。このまま、何も問題なく終わりたいな。

どんだんだん生徒会が忙しくなってきた。

フリーマーケット絶対成功させてやる。

初めての会議

生徒会ではフリーマーケットをやることになった。そこで、僕はいろんな人から知らないものを、たくさんもらった。これでフリーマーケットで売るものに困ることはなくなった。だが…… まだまだやることがたくさんある。近いうちに北神野黒高校と会議が開かれる。そこでどうなるかだ？もしかしたら、どっちが売れるか勝負みたいな展開か、一緒にやろうっていう展開かもしれない。相手がどういう人かも想像出来ない。残念ながら学校の偏差値は北神野黒高校の方が高い。まあそれは関係ないか。向こうに知り合いがないことを望む。知り合いがいると、とにかくめんどくさい。僕は今までいじられキャラでできたから、まあいじられるでしょう。それがめんどくさい。北神野黒高校と会議をする前に、うちの高校だけで会議をするらしい。それが今日だ。何を話し合うんだろ？まあ咲さんにいい案があるんだろう。

放課後

予定通り、会議が始まった。

「まずは出席確認、優君」

「はい!!」

「桜さん」

「はい!!」

「春さん」

「はい」

「勝君」

「はい」

「普君」

「はい!!」

「はい。全員いますね。今日話し合うことは……特に決まってません。」

「え?」

「は?」

まじかよくなにか決まってると思う込んだ。よく考えたら、今までそうだったな。

「咲さんじゃあ今日は何をするんですか?」つ

「それを話し合うのです。」

「はあ……」

それ決めて今日終わっちゃうんじゃね？スムーズに決まるとは思えない。

「みんな決めて〜」

「そんなこと言われたって急だし。」

「それな」

でたーそれな神、ほんと、それな好きすぎかよ！

「急ですネ〜」

「えーなんかない？」

うーん、なんかあるかなー？こういうのって思いつかないんだよな…… 苦手かも

しれない。

「咲さんって向こうの人がどういう人か知ってるんですか？」

「知らないよ。」

「そうですか」

知らないのか。全く想像出来ないな。相手のことを全然知らないってやばいんじゃないか？うちの生徒会前までなかったし、交流してる方がおかしいか、

「まあ決めるとしたら、どういう感じに売るかだよねー」

「それもそうなんだけど、相手がどういうやつかわかんないからーその作戦会議しようか。」

そうだね。決めた方がいいな

「相手がくそだったらどうする?」

「勝負を挑もうよ。」

「それいいねー」

おつ?それなじゃなくなったぞ。珍しいぞ、勝がそれな以外を言うなんて、意味はあんまり変わんないけど。

「じゃあ相手が優しかったら?」

「一緒に頑張りましょーって言う」

「それもいいね」

そこまでいくと勝うざいぞ。

「とりあえずこんな感じでもいいよね?」

「いいんじゃないですか?」

あれ?さつき点呼とつた時全員いたよな?話し合いに参加してるやつ少なくね?春さん寝てますねー強いけど話し合いには参加しないんだな。

「じゃあそれで決まりで、あとは空気読んで、北神野黒高校との会議をしつかりやりま

しょう。」

「はーい」

「はーい」

「はーい」

「うーい」

「ZZZZZZZZ」

それが返事なのね。ぐっすりですなー顔に落書きしたいわ。バレたら殺されるだろうけど、会議は明後日らしい。体育祭とかぶってて忙しいんだよな。まあ頑張ろう。

会議上手くいくかな？

会議当日

すごい気まづい。縦長のテーブルに、向き合って座っている。向こうは4人だった。人数はこっちの方が多かった。

生徒会長がやばい。なんか見た目は神だけど、中身はくそなオーラ出してやがる。これはフリーマーケットバトルになりそうだ。

「じゃあ会議を始める！」

「……………」

ガチオーラ出すなよ〜みんな黙っちゃってるじゃん。僕もだけど、優はなんか知らないけど、喧嘩越しだし、勝は下向いちやってるし、桜さんも下向してる、咲さんはなんか話そうとしてるけど、声が出ないらしい。春さんは……なんか様子がおかしい。こんな表情の春さん初めて見た。下向いてなんかボソボソ呟いてるな。ほんとどうしたんだよ。

「春!! 上を向きなさい」

春さんがビクツとした。えっどういうこと? すでに知り合いなの? だから気まづいの? 元カレとか? 春さんは黙っている。どうしたんだよー

「春!!」

またビクつてなった。

「うるさいよ……兄さん」

「」

は? 兄さん? マジで言ってるの? 全然似てねええ。だから春さんおかしかったのか。

「えっ……春さん? お兄さんなの?」

「はいそうです。」

「そうなんです……」

気まづめつちや気まづ。

「じゃあ会議始めましょうか？」

「神野黒高校の生徒会長つてぱつとしないですよね」

おい、いきなり何言ってるんだよ！早速仕掛けてきたな。あーあ、咲さんに火ついちやった。馬鹿だわ。

「この高校つてぱつとしないですよね。綺麗じゃない……」

咲さんやばい、もう戦争だな。

優やめろつて気が早いよ

「てめえらさあ、いきなりなんなんだよ？あー舐めてんの？」

優やめて。

「思ったこと言っただけですよ、君口悪いですね。」

「あー……?？」

「やめろおおおおこの勝負はフリーマーケットでしょう」

僕は何言ってるんだか、まあおさまってくれたからいいや。

今日は解散をした。

結局フリーマーケットバトルだ。

フリーマーケットバトルの準備

フリーマーケットバトルが開催されることになった。優が喧嘩捨てしまった。それを止めるためにフリーマーケットバトルをやる。昨日の会議はやばかった。まさか向こうの生徒会長が春さんのお兄さんなんて……流石に驚いたわ。

それで緊急会議を開くことになった。早速今日の放課後 生徒会室に集合だ。空気やばそうだな。行くのがこわい。まずみんな集合するかな？ 僕行くのやめようかな？ 行かなかつたら、殺されるだろうなー。

放課後

生徒会室に行くと、生徒会室の前に桜さんが待っていた。たぶん、怖くて中には入れないだろう。うんそうだろう。

「桜さんどうしましたー？」

「中に入りづらいです」

「あー黙り込んで、やばいオーラ出してるやつですか」

「ちよつと、違いますね」

えええ。

「よし!!入りますか?」

「はい」

その笑顔最高。

あれ勝と春さんは?どこいったんだよあいつら。

「こんにちはああああああああ」

「こんにちは」

「普そのテンションきもいよ」

優、お前だけには言われたくないぞ。お前のテンションの方がやばい。

「優、それな」

勝、隅でなにしてるの?なんでお前はそこにいるんだよ。顔死んでるなー。それな神

じゃないぞ今日の勝は……………

「で…フリーマーケットに関してはなにか決まりました?」

「うん!!」

「いい感じですか?」

「うん」

「ほんとですか?」

「う……………」

「普君やめてあげて、咲さんと優君顔死んでるから。」

「あつ……さつきまでのテンションと逆になっちゃった。」

「静かになりましたね。」

「ひとつ聞きたいんですが？なんで勝も死んでるの？」

「なんか、フルコンボできなかつたみたいです。」

「だからかぁーあれ？そういえば春さんは？」

「学校自体も休んだらしいですよ。」

「大丈夫かなー？」

「あの子なら大丈夫だと思えますよ。」

「それならいいけど……」

「はい!!!なんか決めましょう。打倒北神野黒高校」

「おおおおおおおおおおお」

「おおおおおおおおおおお」

そこの2人急に出てくるなし。

「あの頭いい高校は何してくるかかわかんないですよ。」

「だよね」

なんか今日の会議桜さんと2人つて気がする。

「あの性格じゃー大変そうですね」

「うーんなんかいい案ないかな」

「まず客を呼ぶ方法を考えないとですね。」

「だね!!」

客を呼ぶ方法かーなんかあるかな？客に注目を浴びる。注目を浴びればいいのか。じゃあなんか出し物みたいなことした方がいいよなー。

「客を呼ぶために、出し物なんかどうですか？」

「良さそうだけど、今から間に合う？」

「間に合いませんね。」

確かどのくらい売れるかだっけ？売上じゃないんだよなー？じゃあ決まりだね。そうしよう。

「桜さん!!!思いつきました。」

「なにー？」

「えーつとですね。コシヨコシヨ」

「いいですね。」

ただ、人を集めて、いっぱい売ればいいだけ……売上なんてどうでもいい。うん。どうでもいいんだ。僕達は地域交流を深めようとしてるだけだ。惑わされちゃアカンな。向こうは全力で売るだけだろう。人気な方はどっちだろうね。フリーマーケットが楽しみだ。そういえば、2人はー？あつ寝てる。お疲れなんだな。おやすみ……

2人をほったからしにして今日は解散した。

桜さんは先に帰ってしまい、結局1人で家まで帰宅。
もう疲れた。

学校

「はあくよく寝たくここどこだ？えつ？えつ？えつ？えつ？なんで学校にいるの？てか今何時だ？23時じゃん学校閉まつてるよね。帰るのだから、優起きて!!!」

「なんだよーって今何時だよ？」

「23」

「馬鹿じゃん、あの二人覚えとけよ………」

「ヘックシユン!!!! ウワサされたんじゃないかね?」

こんな感じに準備は黙々と進んだ……………

フリーマーケットバトル !!!!!!

はあーよく寝た。フリーマーケットバトルいよいよ明日だなー、みんな大丈夫かよー。咲さんと優は相変わらず死んでる。あの時から会議が1回も行われてない。春さんもずーつと見てない。ちゃんと準備してるのは、桜さんと僕ぐらいだろう。たまぁに勝が参加するけど、あいつ……フルコンできた日はめっちゃ手伝ってくれるけど……できなかつたら、その場で帰るからな。困るわー

なんでそんなにフルコンにこだわるの？クリアできればいいじゃん。あとネットで見たけど。オールパーフエクトというものもあるらしい。ほんとに謎だわ。音ゲーマーはカオスだね。僕は音ゲー興味無いし。無くてよかった。

そういえば、昨日家に、「普通な人間へ」っていう本を久しぶりに読んだ。読んだ限り僕は普通ではないらしい。リア充と呼ぶらしい。いやいやありえないから、僕がリア充だったら、この世みんなリア充だよ。でもラブコメ的展開全くないぞ？これでも普通じゃないのか？イマイチ分からんな。

まあフリーマーケットバトルの準備は進んでいる。

順調とは言えないが、まあ進んでる。で、今日は前日だから、神野黒公園に行かないとならない。フリーマーケットの会場になるところだ。その下見のなものを今日僕にする。咲さんや優に勝ってほしいから、どうしても頑張るしかない。とりまがんばろー！

神野黒公園

うーん結構狭いんだな。ここでやるのかー平日なのに人多!!作戦通りに行けば、北神野黒高校なんてゴミだ。

うん。今はいくらでも言えるなー明日が楽しみだ。北神野黒高校の生徒会長の悔しがる顔が見たい。

向こうの生徒会の人ってカオスだよ。なおさら、悔しがる顔を見たい。

まあ公園はこんな感じだね。よし学校に行くか。

って思った時に前から北神野黒高校の生徒会長が歩いてきた。

「あなたは？確か、神野黒高校のしたっばだっけ？」

「はい、そうですけど…。したっばではないです。」

「そうなのか、顔から見てしたっばかと思った。すまん。」

こいつうぜえ、優と咲さんが怒る理由がわかったよ。こいつくそだ。

「あはははははは、では……」

僕はその場から立ち去ろうとした。

「あつフリーマーケットの勝負神野黒高校なんかには負けないよ?」

「チツ」

ほんとにうぜえ、絶対勝つ。

生徒会室

「下見して来ましたー」

「お疲れ様〜」

「桜さんだけですか?」

「うん…… 今日誰も来ない。」

「まじですかー前日なのに。」

「明日どうしますか?」

「うーんなんかもうちよつと考えた方がいいと思う。あの生徒会長うざいから!!絶対に勝つ。」

「生徒会長にあつたんですか」

「はい……」

「大変ですね。お疲れ様です。」

「ありがとうございます。」

桜さんは優しい。優しすぎる。

なにか決めないと、このままじゃ勝てないかも、負けたら、大変なことになりそう。とりあえず、絶対勝つ。

次の日

「みなさんおはようございます。」

「おはよう！」

「おはー」

「おはよ……」

「おはよ……」

相変わらずこの2人はだめだな。あと春さんいないし。

「荷物運びましょうか」

「はーい」

荷物を持って公園に向かった。

公園

土曜日つてこともあって、すごい人だ。子供連れや、老夫婦などたくさんいた。この中でフリーマーケットをやるのか、なんか緊張してきた。

前から北神野黒高校の人達が来た。頼むから喧嘩するなよ。

「どうも、神野黒高校の平凡人達じゃないですかー」

「あははははは、無神経な人達じゃないですかー」

生徒会長と生徒会長の間に電気が!!!

すごい戦いになりそうだな。

売るところに大きな敷物を敷いて、商品を並べ始めた。

「勝!!:そつちにも並べてー」

「はーい」

北神野黒高校の方を見たらとにかくすごかった。なんであんなに、綺麗に並んでるんだ?うるものが1つ1つ高そうだな、あれで人来るのか?なんか作戦でもあるのか?

でも絶対負けない。

フリーマーケットバトルスタート!!

よし人を集めるぞ、で、値段をややすくする。これで集まってくるだろうこれが僕達の作戦だ

「安いですよーぜひ寄ってください。」

開始すぐこちらに人が集まってきた。これは来たな。向こうの方を見たが、全く人が集まっていなかった。よしこれは勝ったな。

人が集まってるから、みんなの機嫌がいい!

「みんなー買ってけええええ」

「買ってくださーい」

「みんな頑張ってますねー!」

「良かったです。」

「私なんか飲み物買ってきますね」

「ありがとう」

上手くいってるようでよかった。このまま最後まで行け。

ん? 北神野黒高校の生徒会長がこつちを見てニヤツとした。どういうことだ?

あれ? 客がない。全部向こうに行ってしまった

なんでだ？なんで？値段が見えた。300円？嘘だろ。もっと安くしたのか、あんな高そうなもの。やばい、こっちの2人はテンションが下がってしまった。
どうしよう、どうしよう

やばい負けてしまうかもしれない。

逆転なるか？

フリーマーケットバトルは既にスタートしている。最初は、安い値段で客を引き寄せた、このまま行けば勝利というところで逆転されてしまった。相手は、高そうなものを僕達より安く売った。それは人が集まってきた当然だ。このあとどうすれば逆転できるのかな？ 咲さんと優は死んでるし、勝は音ゲー始めてしまった。こんな時に何やってるんだか、桜さんは手伝ってくれている。春さんに限っては、来てない。まあ相手にお兄ちゃんがいれば気まづいだろうしな、しょうがないな。残り時間2時間だ。まだ結構あるように見えるけど、一瞬だ。急いでなにか考えないと、とりあえず僕は大声を出すことにした。

「みなさああああああああんこっちも見てくださいく!!!」

「見て下さああああい」

「桜さんありがとう」

「うん！頑張ろう。」

桜さんも叫んでくれていた、ありがたい。嬉しい。でも……全然集まってくれない。もつと頑張らないと、

北神野黒高校の生徒会長がこちらに来た。

「あらまあ、全然売れてないですね、どうしました？」

「……………」

「せいぜい頑張ってくださいい。」

くそ…… 負けたくない、負けたくない絶対勝つ、許さない。でもいい案が思いつかない…… どうにかしないと…… はあ

「普君大丈夫？あんな言葉気にしちやダメだよ」

「うん…… ありがとう…… 桜さん……」

「普君がそんなんでどうするの？勝つんでしょ。地域交流が優先でしょ!!」

そうだ、僕の中には勝つことしか頭になかった。そうだ、これは地域の人と仲良くなる。売上なんか関係ない、地域の人が喜べばそれでいい。

「ありがとう桜さん、やる気出たよ」

「よかった。頑張ろう」

値段を下げる!!!100円全部100円だ!!!!

「みなさーーん全品100円ですよー!!チャンスですよー」

「えっ？1000円？安くはない？あっち行きましょ」

「あっちの方がいいわね」

「人柄もあっちの方がいいね」

「よしあっち行こう。」

どんどん人が集まってきた。これで逆転だ。

「普君集まってきたね、」

「桜さんのおかげだよ。」

「そんなことないって」

「これは、絶対桜さんのおかげだ。」

「あれ？お客さんが……」

「また向こうに……」

「50円だって」

「くそ、またか。もう値段を下げるとかじゃダメだ。特別なことをやらないと、なにかな
いか？」

「ごめん、何も思いつかない。」

やばい、あと1時間をきつた、このままいかれたら流石に負ける。まじでなにか考
えないと、相変わらずこのふたりは死んでるし、勝……寝やがった。

ん？横に台みたいのが置かれたんだけど……なんだ？

「桜さんあれなんだろう」

「台みたいですね」

「何かやるのかな？」

「そうかもですね。」

あれ？見覚えある人が来たぞ？可愛い衣装を着て、アイドルみたい……春さん
だ。一体なにをするつもりだ？

「あれって……」

「春さんですね」

「一体何を……」

「みんなー！ー！元気かー！ー！」

注目が春さんの方に向いた。

「あの子可愛い」「なんか始まるのかな？いってみよ」

とか、たくさんの人が春さんの前に集まって来た。春さんすごい……

「私は春と言います、今日はたくさん歌っちゃうよー」

「おおおおおおおおおおおお」

すごい盛り上がりだな。春さんすごいよ。

「じゃあ歌うよー!!」

「うえーい」

歌終了

やばい、春さん歌上手い。

「みんなありがとう」

「うえーい」

「私のお願いで聞いてください。この子達の商品を買っててください。」

「おう」「絶対買う」「全部買う。」「春さんの言うことなら」

すごいよ。春さん。今までこれの準備で生徒会に来れなかったのか。

ありがとう、春さん

僕達の商品はすぐに完売した。

「全部売れましたね。やったああああ」

「ほんとよかったです」

「春さんありがとう」

「いえいえ、大したことじゃないです」

「いやいや、ほんとにありがとう」

「じゃあどういたしまして。」

向こうから、北神野黒高校の生徒会長が歩いてきた。

「今回は僕達の負けだ。だが次は負けない。楽しかった。」

「えっ?」

「なんでもない、では、帰る」

「お疲れ様です」

今楽しかったって言ったのか? 僕も楽しかったのかもしれない。今回も最高だった。

「普一フリーマーケットどうだ〜」

「何寝ぼけてるんだよ、優!! 咲さん!! 勝!! フリーマーケットバトルは無事終了しました。」

北神野黒高校にも勝利しました。」

「えっ？勝ったの？ほんとに？」

「うん!!!」

「やつつったああああああああああ俺たちのしょうりだあああああ」

お前何もしてないのにな。

「普君にはまた助けられちゃった。ありがとう」

「はい!!」

「でも今回は春さんのおかげだよ」

「そうなの？春さん、ありがとう」

「いえいえ、喜んでもらえて良かったです。」

「これで1回休憩できるな」

「それな」

出たよー勝のそれな、それな神!!

ほんとに今日はみんなお疲れ様です。北神野黒高校にも勝てたしよかった。

これからも生徒会は頑張っていく!!!

生徒会にやってほしいBOX……

フリーマーケットバトルは結果勝利することが出来た。あれは、春さんのおかげだ。まさか歌い出すとは……すごい迫力だったし。こういうイベントが終わればまた暇な時がやってくるんですよ。でも今回はたまたま体育祭が近いから、いつもより暇ではない。

久しぶりに生徒会にやってほしいBOXやるか……ろくな奴来ないんだよねーこんなこと言っちゃダメか？

どうせ勝参加しない……どうせ……うん!!参加しないなあいつは。

というこで早速置きに行くか、生徒会にやってほしいBOX取りに来るのは明日でいいや、よし生徒会室に戻ろう。どうせみんな……あれだろ?寝てるんだよね。

生徒会室

あれー静かだな?誰もいないのかな。奥に行ってみるか……ってみんな勉強してるやん。えっ嘘だろ、テストいつだ?ちよつと待てよ

「優テストっていつから?」

「勝……」

「なに？」

「それ……勉強じゃないよね？ 攻略本の間違いだよね？」

「そんなことないよーちゃんとゲームについて勉強してるよ」

「ゲームはテスト範囲じゃないんで、手伝ってくれるよね？ ニコ」

「いやー忙しいからなー」

「くれるよね？ ニコ」

「はい、手伝います。」

よし、確保、あと勉強しないのは……アイドル春さんだ。

まあアイドルというのはな。この前のフリーマーケットバトルでアイドルをやったからなんだ!!

アイドル春さんどこにいるんだ？

「春さんって学校来てるの？」

「さつき見かけたけど……」

「こんにちはーですー!!」

「噂をすれば.....」

「なんの噂ですかー?」

「どこにいるのかなーって?」

「そんなことですか」

「春さんって勉強しないですよね?」

「しないよー」

「じゃあ手伝ってください」

「いいよー」

やっぱこの子テンションおかしい。楽しいけど。

「とりあえず、今日は特にならない。明日はもしかしたら生徒会にやってほしいBOXになにか入ってるかもしれない!!」

「了解です」

「じゃあまた明日、僕はもう帰りマース」

「お疲れ様ー」

「はーい」

お疲れ様言ってくれたのは、桜さんだけだった。悲しいなく。みんなテスト勉強好きすぎかよ。馬鹿みたい。

僕は家に帰って何をしようかな？テスト勉強は絶対しない。せつかく何も無いんだからゆつくり家で遊びたいわ。ゲームもいいなー本もいいなー何しようかな？
とにかく休もう。

次の日放課後

さあ生徒会にやってほしいBOX回収しに行くか。回収するのは1人でいいよな。
入ってるかなー？

なんだよー全然入ってないじゃん。2枚だけだった

「これだけかー」

「これだけで十分だよー3人だけだし」

よし1枚目

(今、何色のパンツ履いてるの?)

「いやいや、キモすぎるでしょ。勝?」

「いくらなんでもそんなことしないよ。」

「だよねえええええ」

「んで、普!何色?」

「White!!」

「きつも、引くわー」

「私も引いたーなんで白なの？」

「そこかよ」

「なんかもつとあるじゃん！シマシマとかピンクとか」

「春さんのそういうのってどうなってるの？」

「普通だよ」

「そうなんだ.....」

最近の女子高校生はどうなってるんだか..... よくわかんない言葉使うし、卍とか、卍で会話してるよな。ほんと卍じゃないまじ卍とか、いや何言ってるかわかんないから。

「で、2枚目は？」

「えーつと、テスト勉強やばい手伝ってください。だつて、」

「えーめんどくさいー」

「せつかくテスト勉強しなくていいと思つたのにー」

ほんとにめんどくさい。てか明日テストでしょ。無理じゃん。明日の教科は捨てて次の教科を手伝えばいいのか。それでもめんどくさいな。

「名前はー？」

「えーつと、1年C組潮海夏（しおみなつ）だつてー」

「潮海夏かあー？聞いたことないな、でも桜さんと同じクラスだね」

「じゃあ明日1日目のテスト終わったら、C組行こう」

「はーい」

「了解」

「じゃあまた明日、解散!!!」

潮海夏かあーなんかなー心当たりがあるようなー？ないようなー？うーん気のせい
か。

とりあえず明日テストかあーめんどくさーまあテスト勉強しないけど!!
帰ってゆつくり寝かせてもらいます。

僕はもう普通じゃない。

生徒会は卒業まで続く。まだまだやることが沢山ある。
体育祭や、遠足、楽しみだなー

生徒会は最高だ。

テスト勉強嫌い

1日目のテストが終わった。もうテスト死にしました。数学1に関しては、全く勉強しないで公式がわからず死亡、地理は暗記するやつだから死亡、あんなの無理だよ難しすぎる。明日はなんだっけ？国語と英表だ。終わったな。授業もまともに受けてないし……

そういえば今日あの子に会った。えーっと潮海夏だ。桜さんと同じのC組だ。とりあえずC組に行くか。えっとC組は隣だし、すぐだ。

「桜さんー!!」

「普君どうしたの？」

「潮海夏って言う子っている？」

「いるよあそこに」

「ありがとう。」

あれが……潮海夏かやっぱりどっかで見たことある気がするんだよなー？きのうせいかかな？

隅で読書って……陰キャじゃん。僕が言うのもあれだけど……陰キャどうし仲

良くなれるかも…… とりあえず、話しかけるか、女子に話しかけるの苦手なんだよなー。

「あのー潮海夏さんですか？」

「ひいーあつ…… すいません…… そうです……」

話しづらいなー。

「生徒会に手伝って欲しいって書いたのって君だよな」

「は……… はい………」

「で、どうすればいいかな？」

「勉強…… 教え…… て」

「はい。」

やっぱ話しづらい、てか僕勉強出来ない…… どうしよう？勝も春さんも当てにならないし、誰か手伝ってくれる人いないかな？あつ桜さん!!

「ちよつとまっつて」

「はい………」

「桜さん!!」

「はいー」

「頼みたいことがあるんだけど……あのーこの前の依頼で、テスト勉強手伝って欲しいって言うのがあって、手伝ってくれないかな？」

「全然いいよー教えるのも勉強になるし、」

「良かったーありがとう!!」

よし、助かった。桜さんありがとう。今日勝と春さんは呼ばなくていいや。いたって何も出来ないし、

「なんか決まったら連絡する。」

「はーい」

「夏さん!!」

「ひいー……はい……」

「桜さんも手伝ってくれるって」

「ありがとう……ごぎいます……」

「このあと図書室集合でいい？」

「はい……大丈夫です……」

「じゃあ、あとでー」

「はい……」

「桜さん！このあと図書室で!!」
「はい」

潮海夏

あの人なんか見たことある気がする……あの人すごい話してくる。変な声も出しちやったし……恥ずかしい……
あの人優しい……

図書室

「あつ、いたいた夏さーん」
「図書室では静かにしてください。」
「すいませーん」
「夏さん、桜さん連れてきたよー」

「夏さんよろしくね」

「はい…… わざわざ…… ありがとう…… ございます……」

「何がわからないのー」

「えーつとですね…… 英語です……」

「桜さん英語できる？」

「できるってほどじゃないけど…… がんばる!!」

「これは、複数だからSつけるんだよ」

「ありがとう…… ございます……」

「これはこうやるんだよ」

「ありがとう…… ございます…… これはどうやってやるんですか……」

「えーつとこれはねえこうやってこうやるんだよ」

「ありがとう…… ございます……」

「おおー仲いいなー桜さんがいてよかった。いなかったら俺教えられないから、僕も勉強しないと…… 明日の教科は…… 国語と英表だっけ？よし英表勉強するか……」

「そのあと2時間ほど勉強した。」

「今日は…… ありがとう…… ございます……」

「こちらこそありがとうございます」

「明日も…… お願いで…… いいですか？」

「はい!!喜んで!!じゃあねー」

「はい……」

今日は解散した。

明日もこの勉強会するのかーまあ頑張ろう。

次の日

国語死にました。昨日全く勉強しなかったから全くできなかつた。英表に関しては少しやったから、少しできました。

「桜さん!!テストお疲れ様くできましたー?」

「まあまあかな?」

これはできたということだな。いいなー頭いい人は……

「夏さん、できましたー?」

「ひいー…… まあまあでした。」

まじかああああえっ? できたの?

「そうなんだー」

「うん……」

図書室

「今日も…… お願いします……」

「うん!!」

「今日は…… 数学お願いします……」

「はーい」

僕は昨日と一緒見てるだけだ……

あの二人いつの間にかすごい仲良くなってるじゃん!羨ましいーそんなこと思ってる場合じゃない。勉強しないと…… 明日3教科もあるじゃん。無理だし、1教科が限界だよ。明日の教科は…… コ英、古典、数学Aかどれもできないなー、じゃあ数学Aやろう。

1 問目

はい…… わかんない…… もうやーめた。じゃあ古典やるか。

1 問目

こいつら何言ってるの? 日本語話せよ…… 最後コ英

1 問目

何語だ？いや英語だよ！自分で突っ込んだじゃった。恥ずかしい……とりあえず、僕はどの教科もできないんだなーもういいやー

「桜さん……ここどうやって……」

「ここはこうやってやるんだよー」

「ありがとう……」

結局僕は勉強しなかった。

テスト終了・・・次は体育祭

テストも終わった。結果はくそだと思うけど。終わっただけで嬉しい。次の大きなイベントといえ、体育祭がある。とてつもなくめんどくさい。司会とか、色々なことをやらないとならない。体育祭の準備の中心的存在になつてしまふ。僕が中心になつていいのだろうか？生徒会っぽい人は、桜さんぐらいだろう。そういえば、生徒会に潮海夏さんが入ることになった。夏さんは、相変わらず、あんな感じだ。桜さんと話してる時は普通だった気がする。普通といえ、僕のことだね。僕は今も普通なのかな？とりあえず体育祭頑張ろう……

「こんにちはー」

いつも通りの放課後、僕は生徒会室に来た。

「こんにちはー」

いたのは咲さんだけだった。

「咲さんだけですか？」

「そうだよ」

「珍しいですね」

「それね」

ほんとに珍しい、普段は僕が1番最後に来るのに。まあ待てば来るだろう

「こんにちはー」

「こんにちは.....」

「どうもー」

桜さんと夏さんが来た。

「あれ普君早いね」

「いつも通りな気がするけどなー.....」

夏さんはいいつも通り静かだ。用がある時しか話しかけてくれない。話しかけてくれるだけですごくいいことなのか？でも桜さんとはいつも話してるしなー

「夏さんわかんないことあったら、なんでも言っつて」

「はい.....」

ガチャ

「普きもー」

「うるさいぞ勝」

勝も来た。来た途端に携帯を出し、イヤホンをして、音ゲーを始めた、一体何しに来

てんだよーそんなに音ゲーやりたいならゲーセンいけよー

「こんちわっす」

「こんにちわー…… 優君……」

優が来た。いつも通りだなんて…… 夏さんが一番最初に挨拶してらうううううう、どういうことだ？一緒にいた時間は俺の方が長かったぞ。

まさか…… 夏さん…… 優のこと…… ないないない

と思いたいわ。

まあ正直どうでもいいんだけど…… なんか刺さるんだよなー、やっぱ知ってるのかな？いや気のせいだろうな

「じゃあみんな揃った？」

ガチャン!!!

「まだ私がいるうううううううう」

あつ忘れてたは、春さんいたわ

「これで全員揃ったね」

「はい!!」

「今日はー体育祭について決めようかと思つてます。まず生徒会は何をするのか？話します。まず、司会です。司会は体育祭の時やるやつです。あとは準備係と音声係大きい

のはこのぐらいかな?細かいのだとクラスをまとめたりなど色々あるよ」

「そんな感じなんですね、結構忙しいんですね。」

「zzzzzzzzzz」

「ん?春さん?」

「寝るの早いな」

「もう春さんは司会で、強制ね」

「やだあああああつzzzzzzzzzz」

「また寝るのかよ」

「..いつ寝すぎだよ、いつも何時に寝てるんだ?」

「ということ、司会は決まった。司会あともう1人欲しいな。」

「じゃあ、勝君も司会ね?ね?」

「いやー僕は.....」

「えっなんだってー?(威圧)」

「いや、なんでもないです。司会やります。」

「よろしい!!」

「じゃあ、優君と夏さんは... 音声係で」

「はーい、頑張ろうね」

「はっ、はい……」

夏、心の中

やった、優君と一緒にだ。もう頑張れる。
仲良くならないと……

「じゃあ、桜さんと、普君は準備係ね」

「はーい」

「了解です。」

「明日会議やるから忘れずに」

「春さんー!!起きてー」

「Zzzzzzzzz」

「ダメだこりや、じゃあお疲れ様ー」

体育祭の役割分担は決まった。

体育祭に向けてとにかく頑張らないと。

次の日の放課後

今日は会議が行われる。みんな生徒会に集まった。今日は僕が1番最後だった。

まあいつも通りだな。

「みんな揃ったね！じゃあ会議始めるよー!!」

「はーい!!!」

「今日は各係のことをせつめいするよー」

「春さん寝るなよー」

「寝ないいよおく寝ないつて…… z z z z z」

「おい」

「えーつとまず司会係、司会係はそのまま、体育祭の司会で、細かくは後日せつめいする！で、音声係は、体育祭の間に流す曲の選曲とかマイクいじくったりとか、まあ大まかに言うところな感じかな？最後は準備係だけど、準備係は前日にテント貼ったり、壁にプログラム貼ったり、全体の準備の時のリーダーとかかな？準備係は少し大変だけど、頑張ってください。」

「いつから、係活動が始まるんですか？」

「来週ぐらいからはスタートだよ」

「了解です。」

「音声係の細かなとこつていつ教えてくれますか？」

「お二人が空いてるならいつでもー!!」

「わかりました。」

「司会係は勝君と春さんだけど、私も司会だから。」

「心強いです。」

「生徒会はあるまり競技に出れないと思つた方がいいよ。」

「体育祭進行中、生徒会はなにかするんですか？」

「色々やることがあると思う。決まったらまた連絡する。」

「はい。」

今日は珍しく真面目だなみんな、春さんは寝てるけど、体育祭は少しは楽かなあつて思つたけど、それでもなさそうだな。暇じゃないだけマシか、

音声係のあの二人が気になるんだよなーあの二人どうなるんだろう？なんで僕はこんなに夏さんのことが気になってるんだろう？やっぱり何かあつたのかな？

とりあえず今は体育祭のことだ。桜さんに迷惑かけられないし……

体育祭めっちゃ頑張る。

体育祭忙しい……

体育祭の分担は決まった。僕は、準備係だ。桜さんと一緒になることが出来た。迷惑をかけないように頑張らないと……

体育祭の日がどんどん近づいてきている。それにつれてどんどん忙しくなっている。帰るのは最終下校の時間を少しすぎたあたりだ。今までより過酷かもしれない。

夏さん……は優と一緒にだ。うん……

よし今日も準備がある。生徒会には顔を出さずに、準備係の集場所に集まった。そこには先生もいて、まとめてくれていた。先生は自分の担任の先生で話しやすかった。そういうめんたいしては楽だ。担任の先生の名前は、仏桑花（ぶつそうげ）先生だ。変わった名前だ。仏桑花はハイビスカスらしい、この前先生が自分で言っていた。ハイビスカスかあなんかかつこいいなー僕なんて…… やめとこ

「はーい、皆さん聞いてください、今日はですね、プログラム作成をしたいと思います。」
プログラム作成か。壁に貼る用か、えーめんどうかいなー、こういうのは絵が上手い人が、適当にちゃつちやとやるんだよー

「あっそうだ、準備係の代表者は、野丸普君でーす」

「えっ?」

静かになっちゃったじゃないかーめっちゃ恥ずかしいんだけど、もうしんどい。

「普君前出てきて〜」

僕はしぶしぶ前に行く

「どうも生徒会の野丸普です。よろしくお願いします。」

「みんな拍手!!!」

パチパチパチパチパチパチ

あーよかった。これで静かだったら確実に死んでたわ。

「じゃあ普君あとは任せたわ……」

「ちよつと、ちよ……」

嘘だろー、先生どっか言っちゃうのかよくここからどうしろって言うんだよくそうだ
桜さんはどこだ?

あれーいないない?まさか…… 休み?まじかー誰か助けておくれー

「えーつとですね、競技の順番は決まってると思うんで、その文字の周りになにか書きた
いとかあるなら、みんな考えて書いてください。」

ふう〜もう無理。

まあとりあえずはしのいだ！てかなんで僕がリーダーなんだよーどう見たって違うだろー決まった瞬間みんな引いてたぞ。

今日やることは終わって、今日の係活動は終了。こんな感じのが何回もあるのか、嫌だなー。

早く体育祭終わらないかな？

桜さん休みだったのかな？どうしたんだらう

次の日

今日も昨日と同様、係活動が行われた。昨日の続きだったので、とても楽しかった。

少し時間が余ったんで生徒会に行くことにした。

「こんにちはー」

「こんにちはーzzzzzzzz」

「あれ？春さんしかいないの？」

「うーんzzzzzzzz」

てか寝ちゃったか。みんな忙しいのかな？司会係はすることないのか？まあいいや。

いないから、今日は帰るか。

「春さんお疲れ様」

「はーzzzzzzzz」

最近みんなに会ってないんだよなー特に桜さん

桜さん学校にも来てないらしい。何があつたんだろう、家隣だし、聞くか。

ピンポーン

「はーい」

「あつ一緒に生徒会をやつてる野丸普です」

「あーどうもー桜の母です。ご要件は？」

「えーつとですね、最近桜さん学校来てないから、どうしたのかなーって思つて……」

「あー実はね、この前学校から帰つてくる途中に、自転車とぶつちやつて、何本か骨を折つちやつて、今入院中なの」

初耳なんですけど…… 桜さん大丈夫なのかな？明日放課後お見舞いにも行くか。

「そうなんですか…… それは…… 無事でよかったです。明日お見舞いに行きたいので、病院教えてください。」

「ありがとうー、えーつとね、すごその神野黒病院だよ」

「あつ、ありがとうございます。では失礼します」

「はーい」

桜さん怪我したのか……可哀想だな。明日なんか買つていこう。何がいいかなー？
駅前の商店街の美味しいシュークリームでも買つていこうかな？

次の日

あああああー係終わったー。よし、桜さんのいる病院に行こう。学校から帰り道通るから行きやすい。あつでも商店街行かないと、シュークリームく喜ぶかな？

僕は商店街に行つて、シュークリームを買つて病院へ向かった。

病院の中久しぶりに来た。最近怪我とかないからな。いいことだ。

コンコン

「はーいどうぞで」

「どうもー」

「普君、どうしたのー？あれ怪我の事言つたっけ？」

「お見舞いに来た、お母さんに教えて貰つた。てか怪我大丈夫？」

「うん!!大丈夫だよ、ありがとう。」

「あっそうだ、駅前でシュークリーム買ってきたよー」

「えっほんとに?ありがとう」

「いえいえー」

二元氣そうでよかった。

「いつぐらいに、退院できるのー?」

「1ヶ月ぐらいかかっちゃやうらしいの」

「あー結構長いね」

「体育祭出れなくなっちゃった。ごめんね」

「あとは僕がやっとかから!!」

「ありがとう。」

「じゃあ僕はこの辺で、」

「今日はありがとう」

「また来ます。」

よし桜さんの分も頑張らないと。桜さん早く退院できるように頑張れ!!!

桜さんに僕は………

体育祭

桜さんが入院してしまった。桜さんの分も頑張らないといけない。

体育祭の準備は忙しかった。桜さんとやるはずだったものを、僕が全部一人でやった、準備は学校だけではなく、家に持って帰っても、やっていた。やるのが特にかく多い、しんどいけど頑張らないと、

なんとか準備を終えることが出来た。

体育祭当日

今日はとうとう体育祭当日だ、準備は大変だったけど、この日を迎えられてよかった。朝はいつも通り登校して、学校でズボンと体育着で、上はクラスで作った、Tシャツを着る。Tシャツのことは何も関わらなかった、クラスTシャツって感じは出てるな、そういえば、全然生徒会のメンバーに会ってないな。まあ今日会うだろう。

生徒のみんなは、校庭に集まらされて、準備体操から、体育祭がスタートした。
さあ楽しむぞー！！

「みなさんこんにちは、司会を担当させて頂く

勝、です。」

「おつ、おつ n な j じくしつかい…… をつと、めさああせてもらおう…… 春です
。」

春さんがタガタじゃないですか。寝てばつかいるからだよー

とりあえず僕は暇だな。えーつと僕が出る最初の競技は

全員リレーか、てかすぐやん、次の次だ、走る順番とか全然わかんないんだけど……
誰かに聞くかー

全員リレー

勝は同じクラスでリレーに出るので、司会は春さんだ！

大丈夫かな？

「次は……！！！！1年生の全員リレーだあああああ！！！！」

えっ？もう解消したのかよ。早すぎる。流石だわ。春さんそのまま頑張れ！

次の競技はどうぶんないので、ゆっくり出来る。

「次はあああああああ3年生のリレーーでーレーーす。」

ほんと騒がしいなく勝はどこいったんだ？まあ、もうずーつと春さんでいいよ

リレーやっただけでへとへとだよ暑いし、なんで、体育祭の時って暑いのか？そういう決まりでもあるの？

「こーでーレーー午前中はしゅうりよおおおおおおううお昼やすみだあああああああああ」

やっのご飯長く長かったな。午後はなにか、あったつけ？

特になかったような？きがするけどなー、午前中だけで僕の体育祭は終わっちゃったな。

「普ー!!」

「はーいーい」

優だった。

「一緒に着はん食おうぜ」

「おっけー」

優に僕はついていった。

おおおーいい場所だなーいい感じの日陰だー
あれ？みんないるじゃん

「普ー!!」

「こんにちは」

「じゃあ食べようか」

「いただきます!!!」

桜さんはいないけど…… 楽しい体育祭だ。

「ごちそうさまでしたー!!!」

「春さん、勝司会がんばって」

「おう」

「うん!!!」

午後の競技も終わり、体育祭は幕を閉じた。

すごい、長かったー!!!

「また生徒会にやってほしいBOXでも、やりますか?」

「それいいね」

「じゃあ明日から始めましょうか。あつそうだ、来週には桜さん戻ってくるから、お祝いしないよね!」

おー桜さん来週には戻ってくるのか、よかった。

桜さんに早く会いたい。

体育祭は終わった。

次に待っているのは、遠足だああああああああ、これはめっちゃ楽しみだ。確か行く場所は、横浜だっけ?横浜って何かあるのかな?行く前に調べとくか。横浜って、ここから結構遠いな、たぶんバスで行くんだろう。バスだったら楽だなく、班決めとかもあるんだろうなく仲いい人となれればいいな。

遠足3ヶ月後だけど、楽しみだ。

コンコン

「桜さんー!!」

「普君、来てくれたの？」

「うん!!」

「体育祭どうだったー？」

「楽しかったよー」

「いいなー行きたかったよー、あのー色々準備押し付けてごめんね」

「全然大丈夫だよ、遠足は一緒に楽しもう!!!」

「えっ？」

「あっえーつと、体育祭出れなかったから、」

「うん!! 楽しみにしてる」

「うん!!!」

ますます遠足が楽しみだ。

てか、俺何言ってるんだか？ 恥ずかしい。危なかった。

やっぱ僕って、桜さんのことが好きなのかな？

生徒会にやってほしいBOXその2

体育祭も終わって、また暇な日続いている。桜さんはもう退院して、生徒会に参加している。無事に戻ってきてよかった。暇すぎてやることがないので、生徒会にやってほしいBOXを復活させることになった。それを今から置きに行くところだ。置く場所は前、職員室前だ。あそこは人が集まるから、結構依頼がくる。しょうもないのもたくさんあるけど。

体育祭が終わってなんか学校が騒がしい。みんなテンション高いんだよね

「今日はカラオケ行かない？」

「りようかい」

何言ってるんだか、そういえば前に卍について調べた気がする。なんだっけ？まあどうでもいいか、卍って何に使ってもいいのかな？今度使ってみよ

生徒会にやってほしいBOXを職員室前に置き生徒会に戻ろうとした。

「野丸君じゃないか」

「仏桑花先生」

「何してるんだ？」

「生徒会にやってほしいBOX設置しに來ただけです」

「おーっご苦労さん」

「はい、では……」

仏桑花先生は、面白い先生し優しいけど…… 体育祭の時みたいに、人任せのところあるからな。名前はめっちゃかっこいいのに、仏桑花ってハイビスカスだっけな？ やっぱ、かっこいいわ

よし生徒会室に戻るか

生徒会室

なんか騒がしいな。

ガチャ

「ウノオオオオオオオオオ」

なんでUNOやってるんだよ。おい楽しそうだな。俺も混ぜろーーー!!

「普君お疲れ様。ウノオオオオオ」

「はい……」

夏さんも参加してるやん、もう夏さん馴染んでるな。優となんかいい感じだな。で、

「えええええ……」

「2枚引いて」

「はい……」

なんで僕はこんなところで、出がでてしまったんだ？

なんでだろうなんでだろう♪

結局僕はU N O……… ビリだった。

そんなことどうでもいいわ。

次の日

はあく授業終わった。あつそうだ、生徒会にやってほしいBOX回収しに行かないと、職員室にGO

昨日と同じ場所に置いてあった。

まあ当たり前だな。あれを持ち出すやつなんて流石にいないだろ。

「野丸じゃん」

「仏桑花先生」

「今日は何してるんだ？」

「生徒会にやってほしいBOX回収しに来ました。」

「そうか。ご苦労様。」

「はい」

「そういえば、私は生徒会の顧問的存在になったんだった。」

「えっ？ 仏桑花先生が？」

「そうだ、よろしくな」

「は、はい」

「後日生徒会室に行くよ」

「了解です。」

仏桑花先生が、顧問かあく生徒会真面目になりそう

そうだ、回収回収!!

カタカタカタ

これ入っても一枚だな。一日じゃ来ないか。

生徒会室

よし、開けてみるか。

「一枚しか入ってねえええ」

「残念だね」

「普!!内容はー?」

「えーつとね、優君のことが好きです。どうか、1回デートしてください。」

「は?どういうことだ?」

優の頭にはたくさんの?が見えないけど……

「優君どうする?」

「まあ1回だけなら」

「じゃあよろしくお願いします。」

「はい」

あれ?夏さんがそわそわしてる。あーもうわかつちやた。夏さんは優のことが好きなんだな。絶対そうだろう。

「誰からだったんですか?」

「たぶんB組の子」

「そうか。頑張ってみるわ」

夏さんなんか可哀想だな。夏さんがんばれ!!!!

「普!!今日一緒に帰ろう」

珍しい優が誘ってくるなんて。

「おっけー」

今日は解散した。

「普、俺さぁ好きな人出来たんだ。」

えっ、優からこんな言葉を聞いたのは初めてかも、優はモテてたけど。自分から好きになることは無かった。だから優がこんなこと言うのは、珍しい。優何があっただよ
!!!

「えっ……」

「あの一あれだ！」

優の口が開いた。誰って言うんだ？誰なんだ？

「夏さんだ!!!」

「えっ……」

まじかよ。ってことわ、両思いなのか？これは応援しないと

「なんか好きになっちゃった、だからなんか今度のデートなんかしんどい」

「そうだよねーしんどすぎるな」

両思いつて言うのは黙つてよう。

「まあ依頼だから、しょうがないよな」

「てか、やってほしいBOXこういうのもありだったのか……」

「そうだな……」

「僕は応援してるから、頑張れ」

「おう、ありがとな」

まさか2人が両思いなんて思いもしなかった、僕は2人をくつつけたい!!! 優頑張れ。
そのあと優とわかれて帰宅した。

優は青春してるんだな。

僕も青春したいよ

まあ僕には無理だね。

優のデートまであと2日

優の初デート

優のデート前日

明日が優がデートに行く日だ。僕はデートについて行くことになっている。ほかの場所からこっそり除く係だ、生徒会みんなはみんな行く！こっそりじゃなくなりそうだけどね。

優は今までモテていたが、今回が初デートらしい、あの優もとても緊張している。でも優には好きな人がいる。この前生徒会に入った、夏さんだ。実は夏さんも、たぶん優のことが好きだ。つまり2人は両思いだ、青春してるなくいいな。

実はデートする相手は誰も知らない、紙に集合時間、待ち合わせ場所が書いていた、だけだ。桜さんが言うにはB組の子らしい、さあどんな相手になるのかな？楽しみだ。

明日も早いし、もう寝よう。

……
寝れない

僕のデートじゃないのになんでこんなにワクワクしてるんだ？謎だな。

デート当日

朝は早かった、僕は朝5時に起きて準備をして、5時半には家を出た。確か僕達が住んでるのは埼玉の端っこだ。今日行くのは、東京池袋というところらしい。何かあるかは、全然わかんない、でもテレビで見かけた気がする……すごい都会だった気がする。

行くつて言っても僕は後ろから、見てるだけなんだけどね。

よしそろそろ家出るか。優は僕が行くことを知っている。てか頼まれている。だから行きは一緒に行く、池袋現地集合だから、池袋の駅までは一緒に行く、そこからは後ろからついて行く！相手はどんな子なんだろう？気になるな

「優おはよ〜」

「おはよ〜今日ありがとな。」

「全然、気にしないで〜」

その頃……

「夏おはよお」

「桜さん…… おはよ……」

「今日は頑張って!!!応援してるから」

「うん…… ありがとう……」

「池袋ってどう行くのー?」

「わかんない……」

「えー今から調べるね」

「ありがとう……」

優君とデート楽しみな。向こうには私だってこと内緒だけど。

「優〜池袋ってどう行くの？」

「しらね」

「ええーじゃあ調べるわ。」

「よろしく」

うわー結構行くのめんどくさいなー高いし。まあ優のためだし!!頑張ります。

だいたい、1時間半ぐらいだ。

結構時間かかるね。池袋かあく行ったことないなくパリピしかいなそうだわ。うん

絶対パリピだよ

池袋駅着

「じゃあ頑張って優」

「お、おう」

まあ優には好きな人いるし、今日の相手と、どうなるとかはないだろう。

「池袋ついたね……」

「じゃあ頑張って!!」

「はい……」

よし優のあとをついて行くか。優を見失ったら最悪だな。てかここ駅広すぎる。も

う迷った。優も迷ったかな？つてどこいったんだ？あれ？やっちゃまった。見失ったよ。まじかよどこいったんだよ。おーいー助けてー。

優とはぐれてしまった。なんでこんないっぱい改札あるんだよ。わかんないよ。東口、西口、北口、南口いやいやありすぎだろ。出口まで向かうのがしんどい。

あー優どこいったんだか……

河合桜

よし、夏さんについて行こう、人多すぎだよ。夏さんを見失わないようにしない

と……あれ？いない。あー見失っちゃったよ。どうしよう。夏さん一人も危ないな、探さないと、って無理だねー、こんないっぱい人いたら探せないよ。

野丸普

とりあえず、こっちに行こうかな。西口でいいよね？うん、行ってみよう。

なんだこれはああああああああああああ

人多、ビル多、ビル高、お店いっぱい、ああああ死んじゃう、都会ってこんな感じか。

「晴人く!!次どこいく?」

「どこでもいいぞ」

「じゃあカラオケ〜!!!」

「おっけーあこ!!!」

ん？なんか見たことある2人組だな、あの二人は確か……文化祭の時ぶつかった人だ。

あの二人つてやつぱ……そういう関係なんだな。いいなー

あつ行つちやった。

これからどうしようかな

優くどこいったんだ

「あれ？普君？」

聞いたことある声だな。人が多くて幻聴が聞こえてるのかもしれない。こういう時は静かに……

「普君!!!」

やつぱり聞き覚えあるな……

「普君つてばー」

痛っ

「えっ？桜さん？」

「やっと気づいたよ〜」

「桜さんなんでここに？」

「夏さんを応援するため」

「夏さん？」

「あっ……」

何を隠してるんだ？

「えー何を隠してるんですか？」

「もう、しょうがない〜言おう!! えーつとね、生徒会にやってほしいBOXに書いたの実は桜さんのの」

「えええええええええー衝撃」

「黙っててごめんね」

「大丈夫だよ」

「ありがとう。」

「私、今迷ってるんだよね〜」

「奇遇ですね〜僕もなんですよ〜」

「あー仲間がいた〜」

「はい」

なんだこれ？てか優どこいったかな〜夏さんと一緒なんだ。頑張れ優!!!

「桜さん、優と夏さん両思いなんですね」

「えっそうなの？」

「はい。昨日優に相談されたんですよ。」

「あの二人うまく行きそうですね」

「ですね」

本当にあの二人にはいい感じになってほしいよ。

てかこれからどうしよう？

「あの〜普君、私達も遊びませんか？池袋で……」

めっちゃ嬉しい。こんなこと言ってくれるなんて。もう最高。

「僕なんかでいいんですか？」

「はい、もちろんです!!!」

僕は桜さんと池袋を回ることにになった。これはデートなのか？デートなのかな？
デートがいいな。

とりあえず、もう優はいいや、よし楽しむぞーーーーー！！！！

「次どこいくー？」

「どこでもいいよー」

これだけの会話で僕は幸せだ。

池袋デート！！！！

めつちやいい感じじゃない？

「えっ？夏さん？」

「どういふことだか……全然わからん。なんで夏さんなんだ？もしかして、生徒会にやってほしいBOXに入れたのって夏さんなのか？夏さんとデートか……頑張ろ

「はい……黙ってて……すいません……」

「気にしないでください。」

「ありがとうございます……」

「じゃあ行こっか!!」

「はい!!」

夏さんどこ行きたいんだろう。なんか緊張するな。

野丸普

僕は優の後ろについて行くこうと思ってたけど……優とはぐれてしまった。池袋をさまよってたら、桜さんであった。桜さんは、夏さんを応援するために来たらしい、で

もはぐれちゃったらしい。

今日、優とデートしてるのは夏さんだ。両思い頑張れ!!
それで、僕は桜さんとデートすることになった。

「桜さん、どこ行きます?」

「うーんどこでもいいよ!!」

「こういうところ来たことないからわからないんですよね。」

「私も初めてだよ。」

「どういうところまわったらいいでしょ?」

よし!!こういう時にGoogle先生に頼まないと、えーつと(池袋でまわるところ)検索ボタンを押す!えーつとムーンシャインとかラウンドツーとかその他たくさんある

どこ回ればいいかわからねえええええ

「ムーンシャインでも行ってみます?」

「それってどういうお店なんですか?」

「ちよつと待てね」

えーつとあーこういうことね

「簡単に言うと、シヨピングモール的なものですね。」

「いいですねー!! 行きましょ!!」

「はーい」

「桜さんってなんか欲しいにあるんですか？」

「服とかかな？」

「ムーンシャイン見ましょ!!」

「はい!!」

「完全に忘れてたんですけど……」

「うん!!」

「僕達迷ってるんだよね」

「あっ……」

「……」

今カフェに来ている、なんとか、会話も続いている。俺が初めて池袋に来たつてことを隠したいな。恥ずかしいし。それにしてもなんだこの街は、服おしゃれで、卍しかないな、卍つて…… 普じゃん

「このコーヒー美味しいですね!!」

「美味しいです……」

「池袋つて凄いですよね」

「人多いですね……」

「はい」

気まづい、なんか気まづい、あれ話し終わっちゃった。

なんかネタないかな?

「次どこ行きます?」

「どこでも……」

「なんか欲しいのありますか?」

「服欲しいです……」

「じゃあムーンシャインでも行きますか?」

「はい……」

事前に調べといてよかった。行き方は調べないとわからないな、普くどこいったん

だよ

野丸普

あれから2時間たった。やっとムーンシャインについた。ムーンシャイン通り人多すぎてしんどいんだけど、「やつと着きましたね」

「やつとですね」

「じゃあまわりましようか？」

「うん！」

「欲しいの服だよね？」

「そうだよ」

「じゃあ最初ここ行こっか」

「うん!!!」

こういう時つて、男がなんか買つてあげるのがいいのかな？でも桜さん何好きかわからないしな

「おー可愛いのいっぱいある」

「だね！」

「普君どう?」

「めっちゃ似合ってるよ!!」

「えっ… ありがとう!!」

やべやべ、なんかノリで言っちゃった。まあホントのことだしいいか… 桜さんどの服きても可愛いだろうな。

桜さんがひとつの服を手を持っている。欲しいのかな? あー値段あれか… よし任せろ

「えっ… 普君?」

「いいよ買ってくる」

「えー悪いって。」

「いいって普段のお礼」

「私だってお世話になってるし。」

「気にしない気にしない」

「じゃあ今度私からもなんかお礼させて、お見舞いに来てくれたとか、お世話になってるから。」

「じゃあお言葉に甘えます。」

「うん!!」

よしレジに服を持って、会計してもらおう
ピッ

「お会計が一万五千円になります。」

ええええええええええー…………… ええええええええええまあいよいよ

「はーい」

かつこよくお金を出し、桜さんに服の入った袋を渡した

「普君ほんとにありがとう、もう大切にする！」

「うん!!」

あー財布の中身が…………… 黙つとこ……………

「普君欲しいのがある？」

「欲しいと言えば、財布かな〜」

「じゃあ財布のお店行こうよ」

「ほんとに？ありがとう」

神島優

「夏さんここがいい？」

「はい……」

「いっぱい服あるね」

「はい…… おおーこの服…… 可愛い……」

「夏さんその服気に入ったの？」

「似合うかな……？」

「絶対似合うと思うよ！」

「えっ…… ありがとう……」

可愛い

「買うのー？」

「ちよちよ高いから…… どうかかな……」

「せつかくだから買った方がいいよ、貸して!!」

「えっ! 優君……？」

「普段のお礼!!」

「お礼されるような…… こと…… してないよ……」

「いいのいいの」

「今度私も…… 買う……」

「楽しみにしてるよ！」

えーつと値段は……

「お会計一万五千円になります。」

あああああたけえええ。かっこつけただけど……

まあしょうがない!!!買う!!!

「優君……ありがとう……」

「全然!!」

「次どこ行こつか?」

「優君……欲しいのある……?」

「欲しいって行ったら、財布かな?」

「じゃあ行こう……」

「いいの?」

「うん……」

野丸普

僕達は財布屋に向かった。

神島優

俺たちは、財布屋に向かった。

ダブルデート

「えっ？優？」

「あれ普じやんあれ？桜さん？」

「あれ夏さん？」

「桜さんー…!!」

「あれ？普？デート中？」

「どうだろうな〜」

せつかく会えたのはいいが、こういう形だと勘違いされるんだよな〜僕は別にいいけど…：…桜さんが可哀想だな。てか優しい感じだね!!邪魔しちや悪いし、もう行くか。

「じゃあ優ここぞ〜」

「どこいく？」

「邪魔しちや悪いかなと、」

「大丈夫気にするな。」

「えー……」

優があるものを提案した。

「ダブルデートしようよ!!!」

「えええええええつつつつつつつつ」

みんな驚いている。けどダブルデートする気満々な顔をしている。

「するか」

「やったー」

「やったー……」

女子二人は喜んでる。

「優どうするの？コソツ」

「どうしようかコソツ」

「決まってるの？コソツ」

「2人ともなにしてるの？」

ギクツ

「どこいくのー？」

「どうしようかなー?なんかあるか普?」

くそー僕に振り上がったな。

「えーつととりあえずお昼食へに行きませんか?」

「そうしよう!!ね夏さん!」

「うん……」

なに食べるかなー?せっかく池袋だしいところ行きたいな

「何食べたーい?」

「なんでもいいよ」

「はい……なんでも……」

「なんでもいいよー!」

その答えが1番辛いんだよな

あつあそこにちよつとおしゃれなお店があるな。あそこに行くか。

「あそこのお店にしません?」

「いいね!!」

「おしゃれだね」

おしゃれだなく外装は海外のどつかのあれを取り上げてるんだろうな。フランスとか、その辺?とにかくおしゃれな感じ、店内も綺麗だ。家具は全部おしゃれだ。さぞか

しお高いのでしよう

「おーおしやれ〜」

「おしやれ……」

「夏さんもおしやれだね……」

「えっ……」

夏さんが顔を赤く染めている。優なんでお前は、そういうことが出来るの？ねえーな
んでー？

桜さんがこつちを見てる。なんでだろう？

あーそういうことか、僕にも言えと、そんなの無理だつて……

「桜さん、今日も綺麗だねー」

「えっ……」

あああああああああああああああやちまつたー……！！！！

すいませんすいませんすいませんすいません

「あ、ありがとう……」

「ごめんなさい……急に」

「大丈夫……」

あーあ気まづくなつちやつたよ、僕の口からあんな言葉が出てくるとは、思わなかつ

たよ。

「普ー！お前そんなこと言うやつだっけ？」

「前までは絶対に言わなかったともう」

「だよな」

「なにか頼もう!!」

「そうだね……」

メニューを広げた

ゲッ

ケイゼリアのミラノ風グラタンの5倍ぐらいあるやん、まあ僕が決めたからしようがないよな

じゃあ僕は海鮮風味チーズグラタンだ!!1500円だけどしようがない
「すいませーん注文お願いします」

「ただいまー!!」

店員さんの元気な声が聞こえた。

店員さんがこちらにやってきた。

「ゲッ」

ん？・店員さん？

「あれー？・仏桑花先生？」

「誰でしょうかーそんな方知りませ〜ん」

「めっちゃぶりっ子になってる」

「うるさーい！！」

「ごめんなさい、仏桑花先生！」

「誰なんですか？・それはー？」

「誤魔化さないで……」

先生の目が怖い怖い怖い怖い怖いって

「こんなときで何してるんですか？」

「1日だけが手伝ってる！お前らこそ何してる？あーデートかー」

「……」

「えっ凶星？凶星なのか？まさか教え子に先越されるとは」

「えっ……」

「はあ〜」

「……」

「そうなんですな……」

言葉が出なかった。なんか可哀想、先生美人で可愛いのになんでだろう？あれか性格か、ちよつと気強いし

「先生注文お願いします。」

「先生い言うな〜」

「はい以上でよろしい？」

「はい」

「まさか先生が働いてるとはな。」

「そうだね……びっくり……」

「普あれ見てみるコソツ」

「窓側の席の？コソツ」

「そう……」

んんんんん？

???

「まさか、あいつがここまで来るとは、なにー!!包囲されてるぞ。どうするか。俺の必

やったことはないから、全然わかんない。ただこれだけは言える！

うまい！！！！！！

そういえば、あの痛いやつどこいった？あれー？もういないなくまあいいか

「普！これ食った後どこいく？」

「どうしようか〜」

「普君財布欲しいって言ってたじゃん」

「そうだ……優君も……」

「だから！財布買いに行こう!!」

「そうしようよ……」

「いいの？」

「もちろん」

「ありがとう。」

次は財布を買いに行くことになった。

デートはまだまだ続く!!!

デートも終わりを迎える

僕は今池袋でダブルデートをしている。さつきまでおしやれなお店でご飯を食べて、次向かう場所は財布屋だ。桜さんと夏さんが企画してくれた。財布屋ってどこにあるのかなー？初めて池袋に来たから、全然わからん。優も同じだろうなくあいつ初めてって言ってたし、どうしようかな〜？

「優、財布屋ってどこにあるのかなコソツ」

「俺もしらんコソツ」

「2人とも何してるの〜行こうよ〜」

「はーい……」

やばいわかんない。どっかないかな？PERKO（ペルコ）って言うお店行きに見た気がするけど、そこに財布屋あるかなー？

「確か駅前にPERUKOがあったと思う。そこ行ってみない？」

「普君さすがー!!」

行きに迷ってよかったかも、行き迷ったおかげで桜さんにも会えだし、神様ありがとう!!

「じゃあPERUKO行くか」

「おう!!」

「はい……」

PERUKOまでは近かった。さっきいた場所から真つ直ぐに進み、横断歩道を1つ渡れば到着だ。近くてよかつた〜迷うのはもうコリゴリだよ。

これがPERUKOか……デカすぎる。池袋にはなんでこんなにいっぱい大きいスーパーがあるんだ？さすが東京金持ってる〜!!埼玉にもこんなのがあればいいのに、あつても、小さいスーパー、八百屋そんなもんだ。ゲーセンは隣の街に行かなければならない。東京神かよ

「おつきいね」

「んね……」

「うわーでけえええ」

みんなびつくりしてるやん。

「じゃあ中入ってみようか!」

僕が先頭に行く、まあ道わかんないんだけど、財布屋どこにあるんだよ〜?

あの地図に乗ってるかも、えーつと財布売り場財布売り場………あつた、5階だ。

よしエレベーター使おう。

「みんなー財布屋5階だから、エレベーター使お

う!!」

「はい……」

「了解です」

エレベーターに乗り込んだ!!!

5階になります!

「おおー財布専門店や」

「すごいね、普君」

「うん……」

褒められるとヤバイは、桜さんまじで可愛すぎる。

そんなことより財布探さないとな

「じゃあちよつと探してくる。」

「いつてらっしやい」

さあどういふうに見ようかな? じゃあ端から順に見ていこう!

えーつとこの辺は?

ピンク、赤、白ピンク、ってレディースじゃないかよ!!

僕が探するのは男物だ。男物はどこにあるのかな?

「すみません。男物ってどこにありますか?」

「あそこにあるよ!」

「ありがとうございます!」

そつちかよし見に行くか! うーん、いいのないかなー?

ヒヨウ柄はちよつと…… 却下

やっぱサンプルにこんな感じだよな、サンプルの黒って感じだ。お値段は? 5千円かあなかなかだなあ〜今日は諦めようかな?

「普君!! その財布貸して〜」

「おぉー?」

桜さんは僕の手から財布を奪っていった

「桜さん?」

「ちよつとまってる〜」

どうしたんだよ〜急に、大丈夫かなー? まあ大丈夫だよな

数分後

「普君はーい！」

「ええ？」

「さっきのお礼！ありがとうね」

「えっ？いいの？」

「うん！！」

「ありがとう、桜さんほんとにありがとう！大切にするよ」

「うん!!!」

やった、桜さんに買ってもらったぞ。こんな嬉しいことはそうそうないぞ、やった
ああああああああ

「おっ？普も買ってもらったの？」

「うん！」

「俺もなんだよ、悪いって思うけど、めちやくちや嬉しいよな！」

「だよね。」

財布選びは終了。

「あーもう結構いい時間だな。」

「普君何時？」

「17時」

「たしかに〜」

「どうする……？」

「どうしよつか」

「まあみんな道一緒だし、みんなで一緒に帰ろうよ！」

「それいいな」

「いいね」

「うん……！！」

みんな喜んでくれたみたいでよかった。

「よし池袋の駅に向かうか」

「どうやって行くの？」

「ん？」

「どうやって行くの？」

「ん？」

「どうやって行くんだよ〜」

「優が知ってるのかと……」

「知らないけど……」

「えっ！」

「よしGoogle先生に頼むか」

「つて……目の前じゃん。」

「そうなのかよ」

「全然気づかなかった。」

「んね……」

「じゃあ帰ろっか!」

「そうだね」

こうして、僕達の池袋デートは幕を閉じた。

今日はとても楽しかった。桜さんに財布買ってもらったし、あとはおしゃれなお店に仏桑花先生がいたし……

最初は迷子になってどうなるのか心配だったけど、最終的に優に会えたり、今日は本当に最高だった。

またデートしたいな……

一方その頃……

一方その頃……

「今日も暇だ〜!!それな〜」

自問自答恥ずかし、俺は何故か知らんけど、周りから、それな神って呼ばれている。なんでだろう？

じゃあ今日はゲーセンでも行くか。さあどこのゲーセンにしようかな？たまには、ちよつと遠いけど、池袋のゲーセンでも行くか、都会だから、機会たくさん揃ってるし、なんかあそこだとやりがいがある気がする。ゲーセンだけじゃなく、animate だってあるし、いくらでも時間潰せるし、よし決まり、池袋にしよう。片道1時間半ぐらいだろ。じゃあ電車の中で俺は音ゲーやってるわ。

今日で池袋行くの丁度30回ぐらいかな？最初は池袋の駅で迷って、2時間ぐらい無駄にしたわ。今はもう道覚えたし、迷うことはないな。

俺は、ドアが締まりそうな電車に駆け込んだ。

「ふう間に合った。」

あととは音ゲーして時間潰すだけだ。よしやりますか……

1時間半後

「まもなく池袋に到着致します。お出口は右側です」

はあくよく寝た。あれ俺いつの間にか寝てるし、てか次

池袋か、寝ると時間経つって本当に早いな。ありがたいわ。

よし到着!!

えーつと俺が行くゲーセンは東口のムーンシャイン通りにある、休みの人は人が多すぎて、萎えるわ。まあ何回も来てるから迷わず行けるわ、これをこっち行つてあれをあつちだな。うん！やつば覚えてるわ。

道は覚えてるからいいけど、めんどくさいのはこの人の数だ、人が多すぎてうまく進めない。こういうのは都会の嫌なところだ。

今はだいたい13時だ、お昼は家で食べてきたから問題ないな。よし、行くか。とりあえずこの人の量をどうにかしろ。

ムーンシャイン通りを歩いていると、なんか聞き覚えの

声だな？まあ気のせいかな？

あれ？普じやねく？気のせいかな？あれ横にいるのって桜さんまさかそんなことがあるはずない、

あれ？どこいったんだ？見失っちゃったよ！さっきの2人は普君と桜さんなのかなー？気になるけど、めんどくさいしいいや！

はやくゲーセンいつて音ゲーやりてええ普がいたつていなくたってどっちでもいいよ。

ゲーセン着

やっぱ日曜だし、そこそこ人いるなく音ゲーも結構待つてる人いるし、まあ並ぶしかないか……

「またせたな……」

「うん？誰だお前？」

「おい!!誘ってきたのはお前の方だろ」

「すまん」

こいつは、山井だ。同じ高校のやつだ、とにかくこいつは中二病だ。いつも横で必殺技を唱えている。怖いやつだ。

「さあ音ゲーを始めようじゃないか、お、俺の手が……うずくう!!」

「はあ...」

やっぱこいつやばいやつだ。一緒にいるだけで恥ずかしい、周りの目が怖い。

「お、俺の右手には... 竜がいるんだ... この力を抑えるだけでも難しいんだ...」

「はあ、それどつかのアニメのパクリだよな？」

「まさか、そんなことあるわけじゃないか。はっはっはっ」

「はあ...」

「こいつ扱うのはめんどくさい

「じゃあやろうぜ」

「おう！」

「ああああああああミスったく!!!」

横でうるさいなこいつは、

「あああああああまたやっちゃった」

「おりやあああああああああ」

「あーミスった」

だからお前うるさいって周りの目見てみるや、お前のこと死ねって言ってるぞ。気を
つけろよ。

ふう〜フルコンできた〜疲れた〜今日は満足だ。

「勝……俺はダメみたいだ…… バタン」

「早く立てよ〜もう帰るぞ〜」

「えつつつつつ」

「もう結構ここにいるぞ?」

「ですよね〜…… そうだな! 右手が暴走する前に帰らないと、大変なことになってしまふもんな」

「そうだな〜」

「そういえば、さつき高校で見たことあるやついたぞ。俺のことひどい目で見てたぞ……」

「まあそうだろうなお前だし」

「ええ……」

まあこいつはこんな感じだけど、なんだかんだ言っただけで楽しいな。音ゲー友達できてよかったわ。最近生徒会なくて暇だし、たまにはこういうのもありだな。気晴らしつてやつか

「よし帰るぞ」

「はーい」

「次はいつにするか？」

「いつでもいいぞ！」

「そうか、じゃあ適当に誘うわ」

「了解した」

「おう」

山井は結構遠くから学校に通っている、だから池袋から乗る電車が違う。

「じゃあ俺はこの電車だから！」

「じゃあな勝……」

「おう！」

これで山井と解散した。久しぶりに音ゲーできたしよかった。

池袋着いた時見たふたりって、結局誰だったんだ？まあいつか……

そのまま帰りの電車に乗って音ゲーしながら帰宅した。

また学校かあくめんどくさいな

生徒会のみんなは休日どうやって過ごしてるのかな？ 咲さんとか何してるのか気になるなあ。普は家でゴロゴロしてるだけだろどうせ。

俺も普通だったら家でないんだけどね、今日はたまたま、池袋に行きたかっただけだ。でも当分は池袋行かなくていいや、人が多すぎておかしくなりそうだな。1ヶ月ぐらいは行かないっていうことですか、山井には悪いけど……

とりあえず今日は楽しかった。

一方その頃2

休日ってやることないよね〜とかくやることがないな〜友達もいないし〜普君誘うのはなんか気が引けるし〜よし！服欲しいし、気晴らしに池袋で買い物でもしようかな〜池袋は色々なもの揃ってるし、今更ぼっちなんて気にしないよ！

池袋までどのぐらいかかるんだっけ？確か〜1時間半だね。まあそのぐらいなら全然だね。今はえーっと7時だからまあ9時までにはつくね！よし池袋にレッツゴー！！

出発

よし出発しよう！私は特におしゃれには、興味無いし化粧とかもしないし、すぐに家を出れるんだよね。まあそれを少し変えておしゃれに興味を持つようにするために池袋に行って服買うんだけどね。

池袋着

電車の中であることがなかったので、寝ていた。結構ぐっすり寝ていたらしい。

何回か池袋に来ているので、この駅の広さはなれてる。服屋があるのは東口！

「あれ？生徒会長？」

「あつ仏桑花先生！」

「こんなところで何してるんだ？」

「先生こそ、」

「私はあれだ、仕事だ！」

「私は服買いに来ました!!」

「おう、そうか気をつけて行けよ。都会は物騒だから！」

「はい！」

「じゃあな!!」

！
仏桑花先生は行ってしまった。たしかに今の世の中は物騒だよね〜気をつけないと

えーつと服屋はあっちだっけ？あっちだよね。よし行こう!!

「あれ？咲さん？」

ん？なんか聞いたことある〜だれだー？

「おー春さん！どうしたの？」

「こちらのセリフですよ〜」

「私は服買いに来たよ」

「私もなんですよ!!」

春さん服買いに来たんだ。

「どこの服屋行くの？」

「決まってるんです!あのー咲さん一緒に行きませんか？」

「私でいいの？」

「もちろんです」

「ありがとうございます」

「今日は咲さんとデートだ!」

「そうだね」

今日は春さんとデートか、どこの服屋に行こうかな

「春さん!服屋ってどこがいいのー?」

「そうですねームーンシャインとかいいですかね?」

「じゃあそこ行こうよー!」

「はい!!わかりました!」

私たちは、ムーンシャイン、に行くことになった。ムーンシャイン聞いたことはあるけど……行ったことはないんだよね。

「咲さんってどんな服が欲しいんですかー?」

「特に決まってるないんだけど、遠足に来ていくやつが欲しいな」

遠足は一二年生混合で行くことになっている。遠足まであと少しだから今日はその時来ていく、服を買う。普通の人みたいにごだわりがないから、なんでもいいからさつて買っちゃう! 春さんはなんかごだわりそうだな

「私も遠足の時来ていく服が欲しいんですよ。遠足が秋の終わりぐらいだから上に羽織るものも買わないとって思ってます」

「確かにそうだね。」

たしかに少し寒いかも、横浜に行くから、海もあるしこの辺とは違う寒さだろうな

「あつムーンシャインここです!!」

「大きいね」

「大きいんですよ」

「えーつと…… あのお店です。」

「あそこね!」

「はい!!」

「このお店すごい! 服たくさんある〜どこから見てもいいんだろう

「春さんすごいね」

「ですよね!!」

「私適当に見てくるね」

「はい!!」

さあどうやってまわろうかな?このワンピースいいな、でも季節的に、良くないね、

ん?なんか聞いたことある声がある……

誰だ?普君?まさか~!

「おー可愛いのいっぱいある~」

「だね!」

「普君どう?」

「めっちゃ似合ってるよ!!」

「えっ…… ありがとう!!!」

えっ…… 普君と桜さん?嘘でしょこのふたりって…… まさか…… そんなわ

け……

あれ？いなくなった。えーあの二人だったのかな？

「咲さんいいのありました？なんかありました？」

「あつなんでもないよ、大丈夫だから」

「良かったです。」

はあもしあの二人が付き合ってたら………

考えただけでも泣きそうになる。

とりあえず、適当に服を買った。

「咲さん次どこ行きます？」

「どこでもいいよ」

「じゃあカフェ行きましょうよ」

「おっけ!!」

カフェから全然行ってないなく結構楽しみ!!

「ここです!!」

すごい、めっちゃおしゃれだ。

「おしゃれだ!!」

中を覗いて見た。とりあえずめっちゃおしゃれだった。あれ？なんか見覚えある人

が、

「咲さんあれって？普君、優君、夏さん、桜さんじゃないですか？」

「だよね」

「なんであのメンバーなんだ？私呼ばれてない……」

「私も……」

「そういえば優君に生徒会にやってほしいBOXにデートの誘いありましたよね？あれと関係あるんですかね？」

「どうなんだろうね。とりあえずほかのお店行こうか」

「ですね、あの中に入るのは気が引けますし！」

「じゃあ行きますか!!」

「はい!!」

カランコロン

まさか？バレた？

「ん？」

「はっはっはっはっはっはっ、俺の右手が!!右手が——!!竜が出てくる。俺の竜が時

遠足の準備が始まる.....

昨日はダブルデートをしていた。楽しかったし、桜さんに近づくこともできた。優と夏さんはいい感じだ。そのうち付き合うんじゃないかと思ってる。頑張れ優!!!

遠足が来月にせなあってきている！横浜に行くことになっている。遠足は1年生、2年生合同だ!! 1日班行動だ。班のメンバーは自由でクラスをまたいだり学年をまたいだりしてもいい! ということで決まった班が.....

咲さん、春さん、夏さん、勝、優、僕だ! と最初は思っていたが、勝が1人友達を連れてくるらしい。どんなやつなんだろう?

遠足前だから、ホームルームの時間が増えた。その時間で行く場所や、どうまわるのか? を決める。僕達の班は学年をまたいだるため、みんなが集合場所を決めて、集まらないとならない。それで集まる場所は、生徒会室だ。

それで今から、生徒会室に集まることになっている。

「こんにちはー!!!」

「普遅いぞー」

やっぱ僕が一番最後なんだね

「あっ普ー!!こいつが俺の友達の山井だ!!」

「俺の名は山井だ!よろしく頼み申す!」

「あれ?あのおしやれのお店にいた中二病じゃん　ね!優」

「そうなんだよ　あの中二病なんだよ」

「うわー」

「うわーとは何だ?俺は中二病では無いガチモンだぞ!俺の右手には竜がいるんだぞ
!」

「こいつやばいな。ヤバすぎる。頭おかしいぞ

「そうですか……」

「普、あいつやばいなコソツ」

「それねコソツ」

「そういえば、普君?」

「どうしたんですか?咲さん」

「この前……」

「はい」

「やっぱなんでもない!」

「えっ?なんかあったっけ?

「了解です」

何が言いたかったんだろう

「遠足のことなんですけど、どうします？」

「赤レンガ…… 倉庫…… 行きたい……」

「いいねそれ!!」

おー優と夏さんは気が合うね

「桜さんはどこか行きたいところある？」

「中華街は行ってみたいなく」

「いいね!」

僕も優のまねー

「う、うん」

どうしたの咲さん?なんか怖いよ!

「ほかはどこ行こつかー?」

「俺は、神社に行つて神の力を手に入れたい」

「却下」

「すいません」

この中二病咲さんには弱いんだ。

「私はマリントワー行きたい！」

咲さんがちゃんと saying してくれて安心した。

「じゃあ行く場所はそんな感じでいいね」

「順番はどうします？」

僕がそう言うのと、咲さんが行く順番を説明してくれた。

「じゃあ行く順番は、赤レンガ倉庫行ってそのあとマリントワー行ってそのあと中華街行ってあとは適当に時間潰すでいい？」

「了解です！」

「中華街行ってたくさん食べ放題屋あるよね？」

「あるね、押しがすごい」

「つい入っちゃうんだよね」

「それな」

でたー！ー！ー！それな神、勝の能力だ。

「中華街といえば……門に竜の紋章があつた気がする。あそこで俺の力が……封印されてしまうかもしれない。だから却下」

「お前、人が多いところ嫌いなだけだろ」

「何を言ってるんだ。そんなことは無い。」

「嘘つけよ」

「嘘じゃないもん」

勝と山井つて仲良いんだな。楽しそう

「遠足の準備しろつて言うけど……あと1ヶ月もあるんだよね」

「それな」

「長いよね」

「横浜つてここからどのぐらいかかるんだつけ？」

「たしかく2時間く3時間ぐらい？」

「結構かかるなく普一緒に行こうぜ」

「おう」

よし一緒に行く人ができれば勝ちだ、もし迷つてもなんか気が楽、一人で迷うと、もう混乱して何も出来なくなる。それはやだからな

「じゃあ今日は解散にしよつかー」

「そうですね」

「じゃあ解散!!」

咲さんの掛け声でみんな部屋を出て行った、

「普！帰ろうぜ！」

「おう」

帰りは優と帰ることになった。優と帰るのは気が楽だ！

結構長い付き合いだし、でも優がこうやって一緒に帰ろうって誘ってくるのはなんか相談してることが多い。もしかしたら相談があるかもしれない。

「なあ普通〜」

「どうしたの？」

「俺が夏さんに告つたらどうなるかな？」

「OKされるんじゃない？」

「そういうことじゃなくて、まわりの関係、なんか仮に俺が夏さんと付き合ったとしたら、俺は夏さんと遊びに行ったりするだろ」

「うん」

「そうすると・・・ だんだん生徒会から離れていく気がするんだ。」

優のその気持ちわかる。自分だけ良いことあつていいのかな？とか、みんなの前ではいちやつかない。とかお互いに気を使うだろう。そういうふうに考えるとしんどいよね。

「たしかにそれ一理あるね」

「でしょ、でも俺は夏さんのこと好きだし、どうしよう!!!」

どうすればいいなんて…… 僕にわかるわけないよ。

「優の好きにすればいいんじゃない？」

「こんなことしか言えなかった。」

「だよな。よし俺決めた！遠足の告るわ」

「おおー頑張れ優!! 応援してるぞ！」

「ありがとう。つてところで普は？」

「えっ？」

「えっ? じゃなくて桜さんとどうなんだよー？」

「なんでもないよ！」

「でも好きなんだろう？」

「それは、好きだけど僕には告る勇気なんてないよ」

「普! 俺は応援してるからな。じゃあな」

「おう」

応援してくれてるのか…… やっぱ告る勇気なんてないよ。僕には無理だ。

告るのは僕にとってハードルが高い

遠足の前に……？

遠足の準備が、少しずつ進んでいる。昨日生徒会室で話し合った結果、行く場所は決まった。どうやって進むかも決まった。僕達の班はやることなくなっている。遠足までまだまだだ、残ってる時間何に使えばいいんだか……。そういえば昨日、優が夏さんに遠足の時告ると言っていた。優なら大丈夫だと思う。両想いだし、優ならやってくことが出来ると思う。でも僕は……。多分無理だ。僕は、桜さんのことが好きだ。でも優みたいに告る勇氣はない。でも付き合いたっていう気持ちはある。でも向こうが僕のことどう思ってるのかわからないし、まわりとの関係が壊れるのもやだ。どうすればいいんだか……。もう少し考えてみよう。

遠足を楽しみにしているのはいいけど……。遠足の前に期末考査がある。遠足だけを楽しみにすることは出来ない、みんなー勉強頑張つて!!僕はめんどくさいからやらない。期末考査は遠足の一週間前に行われる、とにかくめんどくさい。今日は暇なので、生徒会室に行こうかなと思う。勉強教えてもらおう

放課後

普 「こんにちは」

咲 「あれ？普君？どうしたの？」

普 「暇だったんで顔を出そうかと...ほかの人は来

てないんですか？」

咲 「来てないね」

普 「そうですか...咲さんって勉強できますか？」

咲 「全然だよ」

普 「学年順位どのぐらいですか？」

咲 「えーつと一応1位」

えーめっちゃ頭いいやん、なんでそんなにできるの？僕に勉強教えてほしいよー

普 「めっちゃ高いじゃないですか！」

咲 「いやいや順位だけだよ！テスト終わったらすぐ

忘れちゃうもん」

普 「それでも、すごいですよ」

咲 「そうかな...？褒められると...照れちゃう

「よ

可愛い、照れてるところが可愛すぎる。

ガチャ

ドアが開く音がした。

優 「こんにちは〜！」

普 「おー優！」

咲 「優君こんにちは〜優君も暇だから？」

優 「まあそうですね……」

普 「優ってテスト勉強してる？」

優 「一応ね」

みんな、なんで勉強してるの？めんどくさくないの？

普 「優〜僕に勉強を教えてください〜」

優 「別にいいけど。」

普 「ありがとう!!」

優 「じゃあ明日から勉強会でもしようか!!」

普 「賛成!!」

咲 「私も参加していい？」

普 「もちろんです!!」

優 「もちろんです!!」

普 「時間とかどうする？」

優 「じゃあ、学校が終わったら、すぐにここ集

合でいい？」

普 「おっけー!!」

咲 「了解!!」

ガチャ

また誰か来たのかな？

夏 「こんにちは……」

優 「こんにちは!!」

さすが優、夏さんが来たからテンション上がってるのか？

桜 「こんにちは!!」

普 「こんにちは！」

僕も反応しちゃった。さすが桜さんパワー

優 「桜さん！夏さん！」

夏 「はい……」

桜 「なんででしょう？」

優 「明日から、勉強会やるけどくる？」

桜 「行つていいんですか？」

優 「もちろん!!夏さんは？」

夏 「行く……」

桜 「じゃあ放課後ここ集合で！」

夏 「了解!!」

普 「わかりました……」

咲 「みんな何の教科できないの？」

普 「数学!!」

夏 「英語」

桜 「理科系」

優 「みんなバラバラだね」

咲 「1からやった方がいいね」

たしかに1からやった方がいいと思う。新しいことだけわかってても理解できてない

とかに繋がる、それは勉強していると一言もない。暗記しているだ。理解をすることが出来れば、自然に頭に入ると思う。ってことで明日、色んなこと教えてもらおうかなって思ってる

よし明日から勉強会の始まりだー!!

これで点数上がるかな？上がればいいなく上がるように俺も努力しないと、

普 「じゃあ僕はこれで失礼します！」

咲 「お疲れ様！」

優 「じゃあな普！」

普 「おう、桜さんもじゃあね！」

桜 「うん!!!」

僕は生徒会室を出て、帰宅した。

初めて勉強が楽しみだなーって思ってる。だって桜さんに教えて貰えるとか、神でしょ！最高すぎるよ。高い点数とつちやうからね〜

今の僕、なかなかきもいな。

テストの準備も進んでいる。

勉強会でも勉強はめんどくさい

遠足前に期末テストを、控えている。とにかく、めんどくさい、うざい、きもい、きもいは違うか……。でも、桜さん、夏さん、優、咲さんと放課後勉強会やるから少し気が楽だ、せっかくだから今回頑張ってみようかなって思ってる。早速今日の放課後から、勉強会がある、集合場所は生徒会室だ。結構楽しみな。

放課後

普

「こんにちはは〜」

優

「遅いぞー」

咲

「こんにちはは!!」

夏

「こんにちは……」

桜

「普君! こんにちは!」

やっぱ僕が1番最後か。

咲

「じゃあ始めようか!」

普

「はーい」

咲

「普君って数学がわからないんだっけ?」

普 「はい、そうです。」

咲 「じゃあ数学からやろうか」

普 「ありがとうございます」

数学がまじでできないんだよなー、公式？なにそれ美味しいの？状態なんだけど、あんなの頭に入らないよ、XとかYとかAとかBとかなんだよそれ、なんで英語で表すの？なんでわざわざ難しくするんだよー

咲 「普君何がわからないの？」

普 「全部です。」

咲 「テスト範囲最初っからやろうか」

普 「はい!!!」

咲 「じゃあまずこれから $x+2x$ を計算しなさい

いってやつ」

えっ？最初から謎なんだけど……

普 「何語ですか？」

咲 「日本語です」

普 「すいません」

優 「お前そこからかよ」

咲

「これの答えは、 $3x$ だね」

普

「なんでそうなるんですか？」

咲

「文字の前に数字あるでしょ、それをたす

の！同じ文字同士じゃないとたせないか

らー！」

普

「だいたいわかった、気がします。 $x+2y$ は $2xy$ ですよね？」

優

「こいつ重症だ」

咲

「だね」

えー間違ってた？ちゃんと足したよ？

咲

「同じ文字同士は足せるけど、同じ文字じゃ

なかつたら、足せないよ」

普

「あーなんとかわかりました。」

そのあと、ずっと教えてもらって、なんとかわかった。みんな教え方上手すぎかよ、もつと頑張つて迷惑かけないようにしないと、明日からもお願いしよ！

咲

「今日数学しかできなかつたね」

桜

「まあしょうがないね」

咲 桜 咲

「急なんだけど、普君のこと好きなの？」

「どうなんでしょう？」

「そうなんだ……」

よし、帰宅するか。俺は今何も聞いていない。聞いてない。聞いてない……

次の日

今日も勉強会が行われる。昨日は僕だけで時間を使ってしまった。今日はそんなことないようにしないと……今日はほかの人の苦手な教科やつてもらおう！

普

「こんにちほ〜」

咲

「こんにちほ〜！」

優

「なんでいつもお前が一番最後なんだ？」

勝

「ほんとそれな」

普

「あれ？お前いるのかよ」

勝

「いちやダメかよ」

秋

「俺もいるぞ」

秋 普

「中二病じゃん」

「俺は中二病じゃない、ほんとに右手に竜が

いるんだ」

ダメだこいつ、中二病の極みだな。

秋

「普、俺の竜が見たいか？」

普

「出せるもんなら出してしろ」

秋

「しようがないな。あつでも、能力がすごす

ぎて、みんな危ないからやめとくわ」

普

「できないんだろー？」

秋

「できるし」

桜

「二人ともやめなさい」

普

「はい!!! すいませんでした」

秋

「すまぬ」

咲

「じゃあ勉強会やりましょ！」

普

「はい」

咲

「今日は英語やりましょ」

夏

「ありがとうございます……」

普 「僕も全然できません。」

咲 「夏さんはどこがわかんないの？」

夏 「ここです!!」

僕は全部わかんないんだけどね。てか日本人なのに、なんで英語やんないといけないの？ 頭おかしいでしょー俺将来、英語使う予定ないぞ。

咲 「ここは、こうやってこうなるんだよ」

夏 「ありがとうございます……… わかりました……」

この二人が何話しているのか僕にはさっぱりわかんない。中学校1年生で習うような単語なら頭入ってきたぞ。

秋 「俺全然わからん、右手の竜がシャーペンを

持つのをふさいでやがる。くそー!!」

「中二病静かに」

「だから、俺は本物だぞ。」

「ハイハイ言ってる」

「どうせお前あれだろ、心の中でラブコメ的

展開ないかな〜とか思ってるんでしょ」

普

「ギク」

秋

「凶星かよ」

くそー上手いとこついてきやがった。うぜえええとりあえずここは誤魔化そう

普

「えっ？今なんか言った？全然聞こえなかつ

たー」

秋

「だから心でラブコメ的展開ないかなー？と

思ってるんだろー」

普

「何言ってるの？そんなこと思ったことない

よ」

桜

「二人ともうるさいよ！」

普

「ごめんなさい」

咲

「二人とも一週間出入り禁止！いやテスト終

わるまで禁止」

普

「えっ……」

咲

「みんなの顔みてみなよ、迷惑かけてるじゃ

ん」

普

「わかりましたよ、さようなら」

秋 「俺も帰る」

僕は生徒会室を出た。

咲 「あんなこと言いたくなかったのに」

桜 「しようがないですよ」

咲 「はあ……」

普 「なんなんだよ！もういいや生徒会やめよう

かな」

秋 「そうした方がいいんじゃない？」

普 「お前いたのか。」

秋 「うん。めんどくさくなつたね。」

普 「まあ当分は生徒会行かないよ」

秋 「そうだね」

こいつ、普通の時はめっちゃいいやつなんだ。僕はこれから、どうすればいいんだ？居場所なくなっちゃった。僕はまたぼつちにさかのぼりか。はあ……桜さんだけでもないから仲良くなりたくないな。まじでこれからどうしよう、まず勉強はしない。遠足もどうなっちゃうんだろう？

僕はやらかした。

ぼっちの休日……

僕はぼっちになった。生徒会室に来るなど言われてしまった。もちろん勉強なんてしない。ぼっちなりに何をしようかな？考え中だ。何故か知らないけど、自然的に外に出ている。僕が休日に外に出るのはすごいことだ。僕はいつも、家で、本読んだりテレビ見たりして家でゴロゴロしている。そんな僕が今日外に出ている。こんな珍しいことではないだろう！外に出たとしてもやることがないんだよね。一人カラオケでも行こうかな？商店街に、カラオケ屋がある。そこに行こうかな？でも僕歌えないんだよね。カラオケは却下だな。とりあえず本屋行くか。

本屋

久しぶりだな本屋来るの、なんかいい本ないかな？つてあの本あれやん（普通の人間へ）この本まだあるのかよ、つて30万部つて結構売れてるんだな、横の文庫本と同じぐらいやん。なんでこれそんなに人気なの？そんない本だっけ？

（あなたはどう頑張つても普通なんです。問題はその普通をいかにどう生きるかです。その答えを見つけてるのはあなた自身です。今あなたには？が浮かんでいるでしょうこ

の時点で普通です。)

やっぱこの本ムカつく。でもこの本に出会ってから、僕は色々な人に出会って、生徒会にも入れたし、恋もしたし、全部自分自身で選んだ道だ。この本はそういうこと言ってるのかな？だからこれは売れるのか。ちよつと気分が楽になった気がする。

本屋で本を買った。次どこ行こうかな？ひますすぎる。これで生徒会メンバーだったら、みんなで遊びに行くとかできたんだけどなくぼつちは悲しいよ。

歩いていたら、公園についていた。あー懐かしいよ、ここはフリーマーケットバトルをしたところじゃん。あの時は北神野黒高校に勝ててよかったな。たしか春さんがラブしてくれたから勝てたんだったよな。あの時はすごかったよ、春さんが歌い始めてから、人がたくさん集まってきて、あつという間に全部売れちゃったし、そういうえば最近春さん見てないな？勉強会にも来てないし、どうしちやっただ？春さんは校長先生がお父さんなんだっけ？なんかあったのか？テストの点数悪かったから、生徒会に行くな!!みたいに怒られてるんじゃないかね？

それにしても暇だな

秋 「よう普！ぼつち？」

あーなんかきたー

普 「よう秋！ぼっち？」

秋 「俺はぼっちじゃないぞ、右手に竜がいる
って言ってるだと」

普 「はいはい」

秋 「これからひま？」

普 「まあぼっちだし、暇だよ」

秋 「どっかいこう！」

普 「いいよー!!」

秋 「駅前に新しくドーナツ屋できたんだけど
行かない？」

普 「いいよー！」

こいつ珍しく普通だな。

秋 「さあ我が神殿に行くぞ」

普 「いつも通りだったー!!」

秋 「何の話だ？俺の竜がああああああああ

あああああああああ

普 「めんどくせ」

僕は商店街のドーナツ屋に向かった。決して神殿など行く訳では無い。ただのドーナツ屋だ。ドーナツかあ久しぶりだなあ、小さい時よくお母さんが買って来てくれたな、懐かしい。僕何が好きだったんだけな？

ドーナツ屋

おっここがドーナツ屋か綺麗だな。流石新しいお店だ。

秋 「普ここだよー」

普 「綺麗だね」

秋 「それは新しいからね！」

普 「じゃあ入ろっか」

店員A 「いらつしやいませ」

店員B 「いらつしやいませ」

店員C 「いらつしやいませ」

店員D 「いらつしやいませ」

店員E 「いらつしやいませ」

店員F 「いらつしやいませ」

普 「めっちゃ店員いるやん」

秋 「それな」

普 「何食べる？」

秋 「俺はこれかな？」

普 「僕はこれにしよう」

店員F 「お会計が330円になります！」

普 「はーい」

店員D 「お会計が440円になります。」

秋 「はーい」

うまそう!! 食べるぞー!!!

優 「あれ？普？」

はあまじか、こんな美味しそうな目の前で、もう最悪。テイクアウトして帰ろう。

普 「秋、ごめん帰るわ」

秋 「えっ？ドーナツは？」

普 「あげるよ、じゃあね」

僕は店を出て走った。

優 「普………」

咲 「優君どうしたの？」

優 「普がいたんだけど……帰っちゃった。」

桜 「普君……」

はあ僕は何をしてるんだか……逃げ出しちゃったよ。もうやだ。なんかもつと生徒会に戻りずらくなっちゃった。正直に謝れまいいのかな？ いやー無理だな。僕にそんなこと出来るはずないよ。はあ僕はどうすればいいんだか……

秋 「あードーナツ美味しい」

優 「普となんか話した？」

秋 「特に何も」

優 「そうか……どうすればいいんだ？」

咲 「あの様子じゃ生徒会に戻ってこなそう……」

桜 「戻ってくる!!!絶対戻ってくる」

咲 「桜さん……そうだね！みんなで待とう！」

優 「それがいいな」

秋 「あー美味しい、俺の竜も喜んでる」

優 「お前なんか大人しいな！」

秋 「いつも通りだよ！」

優 「生徒会入る？」

秋 「俺でいいのか？」

優 「もちろん」

秋 「よろしくお願いします！」

僕の居場所は完全になくなってしまった。居場所を取り戻すためには、自分自身でなんとかしないとイケないのかな？あの本のとおりにした方がいいのかな？あの本のとおりじゃ自分自身とは言えないな。僕が生徒会に戻るのはまだまだ先かも、まだ戻るかかっていうのも決まってるけど。

僕はぼっちの世界をまわり続ける。

ぼっちのままテストを迎える。

僕は優を見た瞬間に逃げ出してしまった。僕はぼっちの道に進んでしまった。僕は生徒会に戻るのがどんどん嫌になっていく。戻ったって、なんで戻ってきたの？ って言われるだけだ。もう辛い。遠足どうしようかな？ 行くにやめようかな？ そんなことを考えてる間にテストは明日に迫っている。正直学校に行きたくない。こんなこと今までなかったから、どうすればいいかわかんない。

教室

テストがあとすこしで始まる。教室にとりあえず居ずらい。教室には優と勝がいる。目も合わせたくない。

優 「普、戻ってこいよ？」

普 「……………」

今更なんだよ。出て行って言ったのお前達だろ。

優 「はあ……………」

勝 「ダメだね」

優 「んな」

テストを受け終わって、机で寝ていいた。

優 「普、生徒会行こう」

普 「行かない……」

優 「なんで？」

普 「行きたくないから」

優 「そうか……みんなお前が戻ってくるの待ってるよ、桜さん悲しんでるよ」

普 「……………」

僕は何も言えなかった。桜さんは傷つけたくなかった。あんないい人どこ探してもいないよ。あー僕はどうすればいいんだよ。

優 「まあ無理しなくていいよ、ゆっくり考えてからでも」

普 「うん」

優 「じゃあな」

秋 「お前まだそんな感じなのかよ。」

普 「まあね」

秋 「俺は生徒会に入ったぞ」

普 「えっ? まじ?」

秋 「まじだよ」

普 「よかつたね」

秋 「別によくはねえよ、みんなお前のこと待ってる

のはほんとだぞ」

普 「そうなんだ……」

秋 「そうだ」

流石、秋

中二病だけど、いいやつだもんな。羨ましいよ

生徒会室

咲 「優君!! どうだった?」

優 「ダメです」

咲 「はあ……私があんなこと言ったからこんなこと

になったんだ。私は最低だ。」

優 「そんなことないですよ」

優 桜

「普君戻ってこないのか……早く戻ってきてよ」

「だよな、このままだと絶対戻ってこない

よ……何か考えないと。」

「やっぱ僕は戻る気ないよ」

「なんで？」

「一回壊れたものは直らないじゃん」

「まあそうだけど……それでも、直そうとすれ

ば、低い確率でも直るんじゃないかな？おっ今

俺いいこと言ってたわ。神様僕に力を……」

「中二病じゃなかったらいいこと言ってたの

に……」

「だから俺は……」

「はいはい、じゃあ僕はこの辺で帰るね」

「さらばだ、天空でまた会おう！」

「よかろう！」

普 秋 普 秋

秋 普 秋 普

秋 「きも」

普 「のってあげたのにそれはないだろ。」

秋 「ごめんごめん、じゃあな」

普 「おう」

やっぱあいついいやつだな。中二病の時はウザイ時あるけど。そこがなくなれば、めっちゃいい子。生徒会の方どうしようかな？なんか今はどうでもいい気持ちだ、戻っても戻らなくても、もういい。

テスト終了

はあくく!!!テスト終わった。出来はくそだったけど。終わったっていう、あれはすごい。開放された感が半端ない。リア充はどうせ、あれだろ、テスト終わったし、どっか遊びに行こうとかでしょ。最近はあるもあるな、今日疲れたから遊びに行こうとか、疲れてるなら、家でゆっくり寝ろって思う。そのうち、月曜日終わったから遊びに行こうぜ！火曜日終わったから遊びに行こうぜ！とかなるんだろ。さすがリア充だわ。僕も一度でいいから、そういう感じに遊びに行きたいよ……誰か俺のこと誘ってください。

桜 「普君！」

ん？天使の囁きか？僕死んだの？

桜 「普君！！！」

普 「はい！！！」

桜 「やつと気づいた。」

普 「どうしたんですか？」

桜 「あのくテスト終わったし…… 2人でどこか行

かない？明日休みだし」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおお

久しぶりのラブコメ的展開だああああああ。神様ありがとうございます。

普 「僕でいいの？」

桜 「もちろん！！」

普 「ありがとう。」

桜 「ありがとうは私が言うセリフだよ！」

普 「すいません、でどこに行くんですか？」

桜 「どこがいい？」

普 「僕はどこでも……」

桜 「じゃあ明日までに行先決めておくね！じゃあ

私生徒会あるから！」

普 「わかった。」

桜さんと2人で出かけられるのか、最高すぎるでしょ。やっぱり桜さんは超いい人だ。やっぱり僕好きだ。桜さんのこと、告白したいとは、ずっと思っている。でもまわりの関係などを気にしたり、そもそも僕には勇気がない。告白したくても告白できないのだ。気持ちを伝えとくだけでも違うのかな？まあそういうのは後日考えよう。それがいい。とりあえず明日のお出かけが楽しみすぎる。明日は最高な一日だな。

僕に希望の光が見えてきた。

桜さんとデート

今日は桜さんとデートだ。急すぎて自分でも驚いている。昨日急に言われた。どこいくか全く決まってる。どこ行くんだらう？桜さんに任せてるから、とりあえず、待ち合わせは、駅らしい、駅に7時だ、んで今は、5時だ。楽しみすぎて、早く起きてしまった。ここから駅まで、15分ぐらいだから、6時45分出れば間に合うけど・・・10分前行動を心がけてる。だから、まあ6時30分には出ようかなと思ってる。今回は桜さんと二人つきりだ。楽しみなんだけど、この前生徒会のこともあったから、なんか気まづい。桜さんとは普通に話せるように戻りたい。生徒会に戻るかどうかは、考え中だ。戻ったところでどうなるかだ。とりあえず、今日は頑張ろう!!

駅

結局待ち合わせ30分前に来てしまった。まあまだいいよな。スマートフォンでもしじつくて、暇潰そうかな？

桜

「普君!!!」

ドキッ

えっ？桜さん？めっっちゃかわいい

普 「可愛い……………」

桜 「えっ？」

普 「いや、なんでもないよ！」

桜 「そっか！」

普 「その服って……………」

桜 「そうだよ！！買ってもらったやつ、どうか

な？」

普 「めっちゃ似合ってるよ。見とれちゃう。」

桜 「えっ？、ありがとう……………」

普 「急にすいません」

桜 「全然、」

あー僕何言ってるんだか……心にしまつとかないといけないものを、口に出しちゃった。恥ずかしい。

普 「今日はどこに行くんですか？」

桜 「今はないしょ！」

普 「えーわかりました。」

桜 「じゃあ行こっか。」

普 「はい!!」

僕達は電車に乗った。電車の中で何話せばいいんだろう。こういう時って楽しい話題出さないとなくあと変な質問しないようにしないと!

普 「どこ行くのかヒントください!」

桜 「んーヒントかぁー埼玉県内じゃないよ? 都で

も道でもないよ!」

えっ? どこ? 結構遠い場所だね。うーん、千葉とか、神奈川かな?

普 「神奈川とか?」

桜 「残念!! 違うよ」

普 「えー難しい」

桜 「あつー一回ここで降りるよ!」

普 「了解です。」

ほんとにどこに行くんだろう。結構遠い予感がする。

普 「えっ? 新幹線?」

桜 「そうだよ」

普 「どのぐらいの遠いところ行くの?」

桜 「結構遠いところ」

普 「日帰りで戻ってこれるかな？」

桜 「泊まりだよ？予約とったし」

普 「えっ……」

ちよつと待つてくれ、女の子と一緒に泊まりデートって普通にやばくない？やばいよね？あかんって。てか僕何も持つてきてないよ？大丈夫なのか？

桜 「安心して、部屋は2部屋とったから、あと必要

なもの、向こうに揃ってるし！安心だ

よ？」

普 「それは安心だねーってならないよ！親にはい

言ったの？」

桜 「一応、友達の家泊まりに行くとは言った」

普 「そうなんだ。」

ほんとに大丈夫なの？怒られるのはやだよ？あと変な噂流れるのも勘弁してください。あんな可愛い子と一緒に泊まりデートなんて……

桜 「大丈夫だから心配しないで」

普 「わかった！楽しもう！」

桜 「そうだけど……」

待てよ、まさか2泊3日？それはやばいって、うんやばいよ、月曜日学校あるけどどうするの？

普 「月曜日って学校ですよね？」

桜 「そうだよ」

普 「学校どうするんですか？」

桜 「サボる予定!!」

普 「そのこと親の方は大丈夫なんですか？」

桜 「どうにかなるよ！そんなことより早くまわろ

うよ

普 「はい！」

学校サボるのか、親になんて言おう。怒られるかな？まあいいや、怒られても気にしない、もう全力で楽しむ!!

普 「最初どこ行きます？」

桜 「ねえ見て!!グリコ」

聞いてないな

普 「写真撮ります？」

桜 「お願いします」

普 「カメラ貸してー」

桜 「2人で撮ろうよ」

普 「いいの？」

桜 「もちろん」

まじか、2人で写真とるの？やばい、女子と2人で写真撮るの初めてだ。

桜 「はい、こっち見て!!はいッチーズ!!」

普 「ニコッ」

桜 「ありがとう!」

普 「こちらこそ」

ふう〜緊張した。写真撮るのってこんなに緊張するんだね。あーマジで楽しいよ、桜さん企画してくれて本当にありがとう、桜さんともっと仲良くなりたいたいよ!このデートで告白したいな。でもやっぱり勇気ないし、周りの関係が怖いよ。

デートを全力で楽しむ

デート in 大阪

僕は今大阪に来ている。なんでここにいるのかと言うと、元々桜さんとはデートする予定だった。でも場所は教えてくれなかった。それで着いたところが大阪だった。大阪は生まれて初めてだ。早速グリコの前で写真を撮った。女子と2人で写真を撮るのも初めてだ。初めてのことが多い。まあ今までぼっちだったことが多いし、女子と2人で出かけるなんて昔の僕だったら夢の夢の夢ぐらいだ。僕はそのぐらい、女子と関わりがなかった。前回池袋デートは優がいたから、なんとか上手くやる事が出来たと思う。今回は僕一人だから、とても心配だ。楽しませてあげられればいいけどな。

in 通天閣

大阪といえば！通天閣である。通天閣って名前は知っているけど、詳しくはわからな
い。ネットで調べたら、高さが108メートルってことがわかった。それ以外はあまり
載ってなかった。

普 「桜さん！通天閣中入りますか？」

桜 「中には入ろう！登らなくてはいいいけど。」

普 「ですよね！僕もそう思いました。」

桜 「めんどくさいもんね」

普 「通天閣の高さって108メートルらしいです

よー」

桜 「普君物知りだね。」

普 「それほどでも……」

桜 「普君と来れてよかった！めっちゃ楽しいよ」

普 「こちらこそ!!」

桜 「中入ったあとどうする？」

普 「やっぱ大阪と言ったら、たこ焼き!!」

桜 「だよね!!たこ焼き食べたーい」

普 「入ったあと行きましようか!!」

桜 「うん!!」

通天閣の中に入り、適当にまわった。写真もたくさん撮った。流石、通天閣人が多いよ、外国人客が特に多いかな？最近外国人客増えてるよなく何かあるのかな？

!!! 最高すぎるでしょ。本物って普通のと何が違うんだろう。それにしてもお店が多い

な。どこのお店入ればいいか分からないよ。

普 「お店多いですね！」

桜 「どこのお店入ればいいか迷うね！」

普 「ですね！どこも美味しそう」

桜 「それね」

普 「このお店なんてどうですか？」

桜 「いいよ！」

そのお店は、年が入っているお店だった、こういうお店は昔から、伝統の味があったりして期待出来る。楽しみだな。

普 「こんにちは！」

店員さん 「いらつしやいませー！！」

結構人がいっぱいだと思つたけど、全然いないな、みんな新しいお店に行つちやうのかな？このお店を営んでいるのは、おばあちゃんとおじいちゃんとの2人で営んでいるらしい、美味しいたこ焼きが期待出来るぞ！

普 「桜さん！何食べます？」

桜 「私は…… シンプル!!! のがいい!!」

普 「僕も同じです!」

桜 「じゃあ頼むね!」

普 「はい!」

桜 「すいませーん! たこ焼き2つください!」

店員さん 「かしこまりました!!!」

あー早く食べたい。待ち遠しいよ

普 「やっぱ大阪凄いですね」

桜 「んね!」

普 「今回はシンプルのにしましたけど、色々な種

類ありますね! 全部食べてみたいですよ!」

桜 「美味しそうなたこさんあるよね!」

普 「はい!!」

店員さん 「お待ちどうさま、たこ焼き2つね」

普 「ありがとうございます」

桜 「ありがとうございます」

おー美味しそう、やばいよだれが……

普 「いただきまーす!!!」

桜 「いただきまーす!!!」

あー————マジでうまい、流石本場のたこ焼き!いくらでも食べれる。

桜 「美味しい!!!」

普 「うまい!!!」

桜 「来てよかったね。」

普 「うん!!!」

あー楽しい、今日楽しいって思ったの何回目だ?そのぐらい今日は楽しい、自分の好きな子と大阪デートなんて……しかもお泊まり!神様ありがとうございます。

今のつて中二病になるのかな?まあどうでもいいや!

桜 「次何食べる?」

普 「食べるのは決定なんだ」

桜 「もちろん」

普 「お好み焼き?」

桜 「食べたい!!!」

普 「じゃあお好み焼き食べに行こうか」

桜 「行きましよう!!!」

よし次はお好み焼き食べに行くぞおおお!!

店員さん「ここにもお好み焼き置いてありますよ?」

普「じゃあここで食べる?」

桜「うん!!」

普「じゃあお願いします!!作ってもらえます

か?」

店員さん「大丈夫だよ!」

普「お願いします!」

お好み焼きー!!楽しみだなく、お好み焼き最後に食べたのいつだろう?1年前ぐらいかな?まあ地元にお好み焼き専門店なんてないし。。。大阪はすごいな。

店員さん「お待たせしました!!」

普「ありがとうございます!」

桜「ありがとうございます!」

普「いただきます!!」

桜「いただきます!!」

普「美味しいです!!」

店員さん「ありがとう」

普 「何年経営してるんですか？」

店員さん 「40年ぐらいかな？」

普 「おー長いですね!!」

店員さん 「でも来年には閉店しようと思ってるんだ。」

普 「なんでですか？」

店員さん 「もう年だから限界なんです」

普 「今までお疲れ様です!!!!」

店員さん 「ありがとう」

このお店すごい、40年夫婦で経営してたなんて、たこ焼きお好み焼きも美味しすぎるよ。あと1年頑張ってください!

普 「ごちそうさまでした!」

桜 「ごちそうさまでした!」

普 「美味しかったね」

桜 「それね」

普 「店員さんごちそうさまです!」

店員さん 「ありがとう。また来てね」

普 「ここに来る機会があれば寄らせていただきます

す」

店員さん 「待ってるよ！」

普 「はい！」

桜 「じゃあ行こうか！」

普 「うん!!」

あーほんとに美味しかった。まだまだ楽しむぞ!!

デート in 大阪その2

今僕は大阪に来ている。桜さんとデートに来ている。急に大阪と言われて、びっくりしたけど…… たこ焼きやお好み焼きも食べたし、めっちゃ楽しい！だから来てよかったと思っている、桜さんも楽しんでるから、よかった。変な空気になつたらやだなって思ってたけれどそんなこと無かつたからよかった。次はどこに行くんだろう。大阪って言ったら、何だろう？泊まる場所に行くのは、まだ早いもんな。暇潰せるところ、いくらでもあるから、大丈夫だな。あとは変な空気にさせないようにしないとね！楽しまないと……

普 「あーお好み焼き美味しかったね」

桜 「美味しかったね！」

普 「次どこ行くー？」

桜 「どうしようかな？今日は大阪だから……」

なんかあるかな?」

普 「今日は?」

今日は?なんで今日は何だ?

桜 「あれ?言ってなかったっけ?明日は京都だよ?で三日目は奈良だよ?」

普 「初耳なんですけどー……」

桜 「じゃあ今言った」

普 「そうだね」

桜 「新幹線も予約とったよ!」

普 「えっ?」

桜 「準備バッチリです」

普 「すごい……」

桜さん準備本当にすごいな、新幹線予約って……さらにホテルの予約も取ってるし、お金持ちなのか?てか待って僕の財布の中は……5000円絶対足りないやん。

桜 「お金なら心配しないで！」

普 「心配するよ」

桜 「大丈夫！」

普 「は、はい」

なるべくなら、桜さんにお金出させたくないから、あまり余計なものにお金使わないようにしないと、食べ物を抑えめにしよう！

普 「今日はこれからどうするの？」

桜 「あっちにあった商店街でも行かない？たく

さんお店あったよ！」

普 「いいよ!!」

桜 「じゃあ行こう!!」

僕達は商店街に向かった。流石大阪!!人多いし、値段も安い、いろんなものが売っている。美味しそうなものもたくさんある。でもお金使いすぎるとやばいから、食べるのは

我慢した。あー我慢は良くない、あれも、それも、これも食べたい。桜さんがなにか美味しそうな食べてる、いいなー

桜 「食べる？」

普 「大丈夫だよ」

桜 「気にしなくてもいいよ」

普 「ほんとに大丈夫です」

桜 「そう？」

普 「はい」

気にするでしょ、気にしないわけないよ、女子の食べかけを貰うなんて、想像しただけでもやばいって、こんなラブコメ的展開あるのかよ。ちよつと驚いたわ。ラブコメ的展開来て欲しいとは思うけど、ほんとにきたらなんか照れる。

商店街を出て、今日泊まる場所に向かった。なんかドキドキする、いくら部屋別だからって、なんかやばいよ。

桜 「普君ここだよ！」

普 「えっ？」

何だこの高層ホテルは、デカすぎるし、綺麗すぎる、こんなところ一生来れないって、来れた僕は幸運だ、とにかくやばい、金持ちじゃないよ、えーみんなドレス来てるやん。こんなところに、こんなぼっちが行くの？桜さんはお似合いだけど……僕は……

桜 「普君行こうよ」

普 「ゴクリ、は、はい」

桜 「普君緊張しすぎ大丈夫だよ？」

普 「は、はい」

桜 「チェックインしてくるね」

普 「お願いします。」

あーマジですごい。作りがもうその辺のものとは比べ物にならないよ。何から何までやばい。僕死んだのかな？天国だ〜

桜 「おーい普君？」

普 「はっ！天国ついたか？」

桜 「大丈夫？チエツクインしたよ！えーつと45階だったかな？」

普 「高いな、すごいな。桜さん！ほんとにすごい」

桜 「そんなことないよ」

そんなことあるよー！ホテルの予約とか、電車もそうだし、今回のデートは桜さんに助けられてばっかだ。とりあえず桜さんにお礼を言わないと行けないね、こんないいデートをきかくしれたし、ありがとうございます！

桜 「部屋ここだよ！」

普 「ありがとうございます！」

桜 「今日は本当にありがとうございます！楽しかったです。」

桜 「こちらこそ、ありがとうございます！」

普 「じゃあまた明日！」

桜 「了解です！お疲れ〜」

おおおおおおおおおなんだこの部屋は、広いし、綺麗すぎる。夜景が最高かよ
なんか明日も楽しめそう！

デート in 大阪その3

僕は今大阪に来ている。今日はデート2日目だ、昨日の夜は楽しかったよ。変な事じゃないよ？一緒にご飯食べて、一緒にUNOとかトランプとかゲームしたり、怪談話したり、めっちゃ楽しかった。一緒に寝てはないよ？流石にそれはしないよ。僕にそんなこと出来ないし、ただのぼっち陰キャだし、逆にそんなことできたら、もう僕じゃないよ。ホテルの料理はすごかった。バイキング形式を選んだんだけど、バイキングとは思えないようなものが置いてあったよ、高級寿司、高級のお肉、色々なものがあつたよ！とにかくめっちゃ美味かった。

今日は京都に行くらしい。最初は驚いたけど、今はワクワクしてる！京都って色々なものあるよなー。マジで楽しみなんだけど!!

桜 「普君おはよう！」

普 「おはよう!!」

着物姿の桜さん可愛い。ここのホテルは、ドレスなども借りれるが、桜さんは着物を選んでいた。うん！着物最高！もうずっと着物姿でいいよ。やばい今の僕だいぶきもい。心の声もれてないよな？たまあにあるから怖いんだよ。

桜 「今日9時30分には新幹線乗りたかな？」

普 「了解です。」

今は7時半だな、駅までがだいたい30分ぐらいだから、ここを9時前に出れば間に合うな。怖いからもうちよつと早めに出るかもだけど、これから1時間は朝食!!朝食もバイキングにした!どんなのがあるんだろう?楽しみだな。

桜 「朝食食べに行こっか」

普 「行こう!!」

桜 「楽しみだね」

普 「だね」

こんなくだらない会話でも楽しい、幸せ、今の状態なら生徒会に戻ってもいいって思う。まあデートが終わったあとはわかんないけどね。

今思ったんだけど、どうでもいいことなんだけど、桜さんと僕って家隣だよな?なのに今まで、一緒に学校行くこともないし、デート行く時わざわざ、駅で待ち合わせしたし、なんかよくわかんないな。そんなこと今はどうでもいいか!

桜 「あーーーーー美味しそう!!!」

普 「うまそう!!!」

桜 「たくさん食べるー!!!」

桜さん取りに行くの早、そんなに焦つてもなくならないよつて言つても僕も早く取りたー！ー！ー！い!! すごいええ朝食とは思えない、料理が並んでる、朝でも寿司とかあるのかよ。麺系もある、あの味噌汁絶対うまいやつ、中にカニ入つてるもん、いい出汁が出てるやつだああ! こんないっぱい食べきれないよー、デザートも豊富やん、なんだから果物は? ドラゴンフルーツ? そんなのもあるのか! 僕ドラゴンフルーツ食べたことない! ドラゴンフルーツの中つて白の実にゴマみたいのがついてるんだな、これつて美味しいのかな? まあ食べ放題だし! たくさんとっちゃおー!! この料理は高級品ばかり! 種類も豊富、このホテルは神だよ!

席に戻ると……桜さんのトレイにのつてた食べ物の量がすごかった。桜さんつて結構食べるんだな……これ以上はやめとこう。とりあえず……

普 「いただきまー！ー！ー！ー！ー！す!!」

桜 「いただあきいまあーす、ゲホゲホ」

普 「桜さんたべすぎだよ!」

桜 「美味しいもん!」

普 「確かにうまい」

桜 「取ってきマース」

えつ？今いただきますすしたばっかだよね？あの量をすぐ食べるとは、よく食べるなーそれも含めて可愛い。やばいやつば僕きもいわ。本当に桜さんと来れてよかった。帰ったら友達に自慢してやろうかな？あつ…僕友達いないわ。自虐ネタ悲しい…：…：よし！！僕も取りに行こう！さあ何取ろうかな？これも美味しそう！あれも美味しそう、これもいいね、あれも絶対うまい。もうどれ食べていいかわかんないよ。とりあえず全部詰め込めええええええええええ！！トレイの上が山盛りになっちゃった。まあいい全部食べてやる！！

普 「取りすぎた〜」

桜 「取りすぎだよー！！」

普 「桜さんあなた僕の…： 2倍ぐらいあります

よー」

桜 「いや、そんなことないよ！あれ美味しそ

う！！取ってこよ」

普 「まだ食べるのかよ流石…：…」

こ、これが…：…：ドラゴンフルーツ…：…：かあ…：…：初ドラゴンフルーツ…：…：いただきます…：…：

パクリ

うーん、別にそこまで美味しくなかった。不味くもないけど、美味しくもないてきなやつだな。もういらぬ。珍しければ美味しいってわけじゃないんだね！

桜

「もうおなかいっぱい！」

普

「そんだけ食べたなら、そうなりますよ、僕も

おなかいっぱいです」

桜

「出発まで時間あるから部屋で休もうか！」

普

「そうですね、じゃあまた後で……」

桜

「はーい」

あーお腹が痛い。トイレトイレトイレトイレトイレはどこだー！！マジでどこだつて？漏れちやう。あつたー！！間に合った。

ふうスッキリ、トイレなかったら死んでたな。うん！確信！部屋戻ってくつろごう。

やっぱ部屋はいいなー！！落ち着く。あーもうここから動きたくないよ！やばい

寝ちやう……………

Z Z Z Z Z Z Z

桜

「普君？普君？普君！！！！」

普

「はっ……………！！」

桜

「やっと起きたね」

普

「ごめんなさい、今何時？」

桜

「9時5分」

普

「まだ間に合う！！」

桜

「いや無理しなくてもいいよ！」

普

「行ける！！」

桜

「じゃあ急ごつか！！」

普

「急げえええええええ」

僕達は駅まで走った。新幹線出発してしまうのは、9時半だ！行ける！！

なんとか新幹線に間に合った。間に合ってなかったらどうなってたか……………桜さんに迷惑かけすぎだよなー。

普

「桜さん！！ごめんなさい！！」

桜 「間に合ったし！結果オーライ！」

普 「ありがとうございます！」

桜 「気にしないで！楽しもうよ！」

普 「はい！！！」

桜さん優しすぎるよ。僕は何回桜さんに惚れてるのか、うじうじしたってしようがないよな!!! 楽しもう!! この恩はデートが終わったら返そう!!

普 「京都つくまでUNOやりませんか？」

桜 「やろやろ!!」

2人UNOだけど…すぐ楽しい。あつという間に京都についた!! 時間で表したら結構たつてる。楽しいと時間って一瞬ですぎていくんだな!!

桜 「着いたー!!」

普 「京都ー!!!」

京都のやっぱすごいな、人が多いし賑わってる。流石歴史の多い場所だな。京都は色々なものがあるもんない、まわりたいたいとたくさんあるんだよね、どうまわろうかな? 金閣寺、銀閣寺は絶対に行きたい!! 清水寺も行ってみたい! 抹茶スイーツ食べたい!! もう楽しみすぎる。京都来て大正解だわ、もう満足! 桜さんと来てるので、さらに満足これからいろいろなとこまわるから、スーパー満足!! 桜さんに告るなら今日かな? で

もまだ明日あるし、もし今日振られたら、明日気まづくなるだけだし、やっぱ言うなら明日かな？奈良ってそういうスポットあったっけ？なるべくならロマンチックに言いたい。とりあえず!!頑張ります!

デート in 京都

僕は今京都に来ている!!!桜さんと一緒に来ている!!2日目は京都だ!!京都は見に行きたいところがたくさんある。スイーツもたくさんあるし、寺とか見るところもたくさんある。有名なお寺がたくさんある。京都に来て失敗するってことはないだろうな。京都は昔の街並みである、雰囲気がとてもいい、ベンチで座ってるだけでも満足な気がする。風邪も気持ちいい、匂いも最高、京都に僕はこう名前をつける!神!!!こんなこと言うかどうかの中二病と一緒になっちゃうから、言うのやめよう。あの中二病連れて来たら喜ぶだろうな、京都は中二病が喜ぶ街でもあるのかもしれない!そんなことはどうでもいいや!早くまわろう!!!

普 「最初どこいきますか?」

桜 「うーん?金閣寺行く?」

普 「いいですね!!!そのあと銀閣寺行きまし

よう!!!」

桜 「それいいね!普君なんか大阪の時と違って

楽しんでるね!!」

普

「大阪も楽しかったよ！でも京都はめっちゃ

楽しみ!!ずっと来てみたいなって思っ

た。」

桜

「それはよかった！京都来てつまらないって

思われるのはやだもん」

普

「桜さんと来てるだけで楽しいよ」

桜

「えっ……ありがとう」

普

「急にすみません」

桜

「謝ることじゃないよ！」

あー僕何言ってるんだか、恥ずかしいよ。僕たまあにこういうこと言っちゃうんだよ
なく気をつけないと！

桜

「じゃあ金閣寺行きましょ!!」

普

「うん!!」

ふうよかった。助かったよ、こういう空気にしないように気をつけないと！

桜

「レッツゴー!!」

普

「おー!!」

流石に歩いて行動するのは大変なので、1日乗車券を買って、1日バスで行動するこ

とにした。京都は広いから、一日でまわるのは困難だから、行くところを絞らないとな、明日は奈良行くんだし！桜さんと相談していきたいとこ決めよう!!

金閣寺

普 「ゴールデンテンポー」

桜 「ゴールデン!!!」

普 「やばいめっちゃ輝いてる」

桜 「ほんとに金色なんだね」

普 「それね」

輝け！俺の家!!!!!! やばい、恥ずかしい、今のつて中二病？やばいな僕、秋化してるかも!しれない。まあ心の中だから大丈夫!!

桜 「ゴールデンホームがなんだってー?」

普 「えっ?」

やばいやばいやばいやばい完全に心の声漏れてた、めっちゃひかれたよな

桜 「普君って面白いね」

普 「そんなことないよ!」

よかつたあああああひかれてなかった。危ない、心の声でも変なこと言わないよ

よ? 食べたい!!」

普 「美味しそう。」

金箔って食べれるの? 食べたたら金運でも上がるのかな? 美味しいのかな? ちよつと気になるな。食べよう!!

普 「すみません! 金箔ソフト2つください!」

店員 「毎度あり!!! 金箔クラッシャー——」

「!!!!!!」

普 「えっ?!」

僕もやった方がいいのかな?

普 「金箔クラッシャー——!!!!!!」

店員 「お客様どうなされました。」

普 「は?」

店員 「はい! 金箔ソフトです!」

普 「ありがとうございます……:……:」

ちよつと待つてなんでこんなにしらけるの? 僕めっちゃ恥ずかしいやん。桜さんには聞こえてないよな!

桜 「普君ありがとう!」

普 「どういたしまして」

よかつた聞こえてないみたいだ、助かつた。

桜 「金箔クラッシャー……！！！！」
「……」

何？」

普 「げっ……」

桜 「やっぱ普君って面白いね」

普 「どうもです!!」

桜 「溶ける前に食べちゃおうか！」

普 「いただきます!!!」

桜 「いただきます!!!」

あーうまい！金箔がしみる。なんてことは無い、口の中で一瞬で金箔が消えた。金箔今食べた？って感じ味もしないし、なら普通のソフトクリームでよかつた気がする。

桜 「美味しいね」

普 「美味しいね」

桜 「ごちそうさま！」

普 「はや！僕まだ半分も言っていないよ？」

桜 「普君が遅いんだよ!!」

普 「そうかな？」

桜 「そうだよ！」

僕ってそんなに食べるの遅いのかな？遅いって初めて言われた気がする。まあいいや食べちやおう!!!

普 「ごちそうさま!!」

桜 「よし!!!銀閣寺行こう!!」

普 「行こう!!」

銀閣寺もバスで行くことにした、そんなに遠くはなかった気がする、銀閣寺は金閣寺と違って、日本らしさを感じられるんじゃないかな？銀閣寺って名前だけど、銀色じゃないし、銀閣寺は子供が行っても面白くないとは聞いたことある、子供は楽しいの求めるから、銀閣寺は静かだから好まないんだろうな。銀閣寺って誰が作ったんだ？

普 「銀閣寺って誰が作ったんだっけ？」

桜 「確か……足利義政だよ!!銀閣寺って銀箔貼

る前に死んじゃったらしいほんとかどうかわ

からないけど!!」

普 「桜さん詳しいね！」

桜 「そんなことないよ、ただ歴史が好きなんだ

け！」

普 「そうなんだ！」

桜 「銀閣寺ついたよ!!!」

普 「おおお！」

桜 「早く見に行こう!!」

普 「うん!!!」

桜 すごい人だ、金閣寺も人すごかったけど、銀閣寺もなかなかだね！早くみたいよ!!

普 「普君あれじゃない？」

桜 「あれかー!!」

普 「いいね」

桜 「いいね」

普 ここめつちや落ち着くよ、金閣寺と全然違う、この建物の色まわりの風景が最高！すごい渋いけどそれがまたいい、ここめつちや落ち着く。銀閣寺見ると、ぼーっとする。

桜 「普君、金閣寺でやったみたいになんか必殺技

ないの？」

普 「ここでやるのは恥ずかしいよ……シルバー

—————!!ホ—————ム」

「……………」

桜 「桜さん酷くない？」

普 「大丈夫!!面白かったよ!わぎと笑わなかつ

ただけだから」

普 「ならよかった……」

言うてこんな静かな場所で恥ずかしかったんですけどね、秋はいつもこんな感じに
言ってるんだよな、あいつ流石だわ桜さんと来れてホントに良かった!!まだまだいろん
などこ見に行きたいな!

桜 「いいね!」

普 「いいね!落ち着く」

桜 「次どこ行こうか?」

普 「どうしましょうか?」

桜 「清水寺は最後にとっておきたいかな?」

普 「僕もそう思った!!!」

桜 「じゃあどこいこうかな?」

普 「うーん」

桜 「稲荷神社なんてどう?」

普 「いいね!!あの鳥居がいっぱいあるところで

しょ!!」

桜 「じゃあ行こっか!必殺技期待してるよ!」

普 「期待しなくていいよ」

桜 「はーい!」

必殺技また考えないと行けないの?恥ずかしすぎるって……

稲荷神社までもバスで行く!伏見稲荷つて千本鳥居がやっぱ有名だよね、あんなに
いっぱいどうやって作ったんだ?昔の人ってほんとにすごいよな。早く見てみたい!

桜 「普君!!!ついたよ?」

普 「あれ?僕寝てた?」

桜 「ぐっすりだったよ、写真撮らせていただきま

した」

普 「恥ずかしいよ」

桜 「可愛かったよ」

普 「いやいや、よし行こう!!!」

桜 「はーい」

伏見稲荷大社

普 「結構山奥にあるんだね」

桜 「そうだね!!」

普 「歩くの疲れてきたよ！」

桜 「それね」

普 「おおおおおおお!!!」

桜 「おおおいおおお!!!」

普 「これが千本鳥居か」

桜 「すごいね！ここパワースポットらしいよ」

普 「そうなんだ。すごい見とれる」

桜 「それね」

マジですごい、この鳥居の数すごい、この周辺が真っ赤に見える、なんか吸い込まれちゃうような感じがする。綺麗だし、一個一個の鳥居に名前が書いてあるんだね、誰なんだろう？伏見稲荷大社に関係あった人なのかな？

やっぱ京都はすごいよ!!

普 「綺麗すぎる」

桜 「よし写真とろう!!はいっチーズ!!どうも

です!!」

普 「どうしましたまして!」

桜 「ほんと京都ってすごいよね」

普 「ほんとにきてよかったよ」

桜 「そうだね!!」

本当に来てよかった、色々な勉強にもなるし、こないいい物見れるなんて最高だし、桜さんと来れてるっただけで幸せだよな!まだまだ京都でみたいところたくさんあるよ!!あと行くのは、嵐山と清水寺かな?2日目も残りわずか!!!とことん楽しむぞ!!!

デート in 京都その2

僕は今京都に来ているさつきまで、伏見稲荷大社に行つて千本鳥居を見てきた。んで今向かつてる場所は、嵐山だ、綺麗な場所だと聞いているからとても楽しみ、夜行くのもいいって聞いたけど、夜は来てる時間ないので、昼間行くことになった。嵐山とかいろんなアニメで出てた気がするよ、まあ有名な場所だもんな、出て当然か、嵐山には竹林があるって聞いたけど、ほか何かあるのかな？観光してる人が集まるつてことは他にもいろいろあるよね、早くつかないかな？桜さんは横でぐっすり寝てるし、そうだ!!写真撮つちやおうかな？撮られたし、でも男がそんなことやったら、さすがにやばい気がするからやめとくわ。変態になつちやうよ、中二病の変態つて相当やばいよね？そう思われないうちにしないと……

あつ！なんか嵐山つて感じがしてきた、そろそろ着くのかな？とりあえず桜さん起こそう

普

「桜さんー!!」

桜

「zzzzzzzzzz」

普

「桜さんー!」

桜 「zzzzzzzzzz」

普 「桜さんーーーーー!!!」

桜 「はい!!!」

普 「やつと起きた!もう着くよ!」

桜 「早いね」

普 「寝てたからそう感じるだけだよ」

桜 「私寝てたの?」

普 「普通に寝てました!」

桜 「恥ずかしい」

普 「写真撮らせていただきました」

桜 「嘘っ!」

普 「嘘です」

桜 「よかった!」

桜 ほんとに撮らなくてよかった、撮ってたら多分引かれてたし、好感度めっちゃダウンしてたと思う。ふうよかった。というこゝで嵐山につきましたああああ!!

普 「嵐山ーーーーー!!!」

桜 「空気がいいね」

桜 「この空気最高だよ」

普 「それね」

桜 「さあ行くぞー!!!」

普 「橋だ!!!」

桜 「あれは、渡月橋だね」

普 「すげえー」

綺麗な川に橋がかかっている！すごい綺麗あれが渡月橋って言うのか、なんか別次元に
来た感じ、まわりの竹林も最高だよ、昼間でもめっちゃロマンチックじゃん、今日来た
中で僕の一歩のお気に入りかもしれない。ほんとにすごい、僕が今ここでしたいこと
は、この緑の大自然の中で寝たい。ここで寝たら絶対気持ちいい。三日間は寝れるね。
歩ってるだけでも寝れそうだよ、ここほんとにすごいわ。

普 「すごい綺麗」

桜 「それね、ぼーっとしちゃう、そういえば、

伏見稲荷で何も必殺技やってくれなかった

ね？」

普 「なんで今思い出すの？」

桜 「しょうがない！思い出しちゃったんだもん

桜 「やばいやばいやばいめっちゃ面白いよ、や

つば普君面白い子だね」

普 「わざとらしいけど……ありがとうございま

す！」

桜 「じゃあ行こう！」

普 「もう終わっちゃったのね、恥ずかし

い………」

桜 「嵐山って何があるの？」

普 「僕もわからないです」

桜 「とりあえず歩こうか！」

普 「そうだね」

少し季節が遅かったのかな？もう少し早く来てれば、満開の紅葉だったんだろうな、見てみたいな。次来る時は紅葉見に来よー人で……… あーこういう自虐ネタは良くないよなー！実際ネタじゃないほんとだ、なんか悲しい……… 京都に来て悲しいこと思うの

普 は良くない、決めたんだ!!全力で楽しむ!!

普 「やっぱ竹林いいね」

桜 「夜になったらライトがついて、もちよ綺麗に

なるんでしょ」

普 「そうなんだ！見てみたいな」

桜 「次来る時は見ようね」

普 「うん！」

次来る時？次あるの？次また来てもいいの？ほんと、桜さんって嬉しい事言ってくれるよね？優しすぎるよ

桜さんとはこれからも一緒にいたいよ……

桜 「普君見て!!!抹茶飲めるよ！」

普 「ほんとに？」

桜 「うん!!配ってるよ、すいません!!2つく

ださい！」

店員さん「はいどうぞ」

普 「ありがとうございます」

桜 「ありがとうございます」

普 「飲もう!!」

桜 「うん!!」

竹林という場所で、きれいな空気をすいながら、抹茶を飲む！あー最高だよ！てか抹茶美味すぎ、家を買って帰ろうかな？京都の抹茶は初めてだ！こんなに美味しいんだね！これから、京都の抹茶飲むようにしようかな？嵐山さいこおおおおおおおお！！！！

桜 「次行く場所って清水寺だよね？」

普 「うん！！」

桜 「そこでスイーツ食べたい」

普 「いいね！！」

桜 「じゃあそれで決まりね！！」

普 「うん！！！！」

嵐山を満喫したら、清水寺でスイーツを食べることになった、清水寺のスイーツかあ食べたいなーそういえば、八つ橋食べてないじゃん。よし絶対食べよう！まだまだ満喫するぞおおお！！！！

デート in 京都その3

僕は今京都に来ている。さつきまで嵐山で、橋を渡つて、竹林を通りその中で、抹茶を飲んだ、あんなに景色がいいところで抹茶飲めたのは、最高だ、さらに桜さんと一緒に来ているということで、さらに最高だよ!!次僕達が向かうのはあの有名な清水寺だ!清水寺は色々なものに出ていた気がする。つて言うぐらい清水寺は有名だ、清水寺行くの楽しみ!!なんか清水の舞台から飛び降りる見たいなことわざなかつたっけ?ことわざになるつてすごいよね、相当だよ。その清水寺をこれから行くのかーなんか緊張してきたかも、京都つて色々な場所があるんだよなー一日じやまわりきれなほどある、次来る時は、京都だけで3日ぐらいあつてもいいかも、1人で…… まあそんな自虐ネタは置いてこう!

普

「清水寺つてどんなスイーツあるのかな?」

桜

「うーん行つてみないとわかんないかな?」

普

「じゃあ僕が調べとくよ」

桜

「お願いします!」

よし、さっそくグーグル先生に聞こー!清水寺のスイーツ!おっ!いっぱいありすぎだ

ろ、和菓子、抹茶ソフトクリーム、八つ橋、団子、カフェ、ファストフードもある、清水寺なんでもあるやん。えっ?ここシヨツピングモールかなんか?こんなにあつたら迷うわ。まず八つ橋は絶対に食べる!!!生のやつ、ソフトクリームは食べたから団子とかも食べたいな、あとお土産買うなら、ここだな。あー買うもんがいっぱいあるーけどお金が…… 拝観料は申し訳ないが、桜さんに出してもらった。デートが終わったらちゃんと返す!!返さなかつたら人としてやばいよね。ぼっちがさらにぼっちになっちゃう、ぼっちは何倍してもぼっちか…… 悲しい……

普

「桜さん!清水寺スイーツたくさんありますよ」

何食べたらいいかわかんないです」

桜

「じゃあ全部食べよっか」

普

「まじですか……」

桜

「大丈夫!!お金は任せて」

普

「本当に申し訳ないです必ず返します」

桜

「悪いのは私だし、気にしないで」

普

「気にしちゃうんですよ」

桜

「大丈夫大丈夫!!」

普

「ありがとうございます。」

あー優しいよーこんな僕でも一緒にいてくれる時点で優しい。僕なんかただのぼっちだ、最近ぼっちって思うの多くなつたな、まあホントのことだしって今そんなことどうでもいいわ!!

桜 「もうちよつとでつくよー!楽しみだなー」

普 「楽しみ!!!お腹すいたよ」

桜 「そうだよね、何も食べてないもんね」

普 「確かにそうだね」

桜 「京都にいるだけで満腹なのかな?」

普 「空気が美味しい!!」

桜 「んね」

あーやつと清水寺に着くぞおおおお、長かつたよおおお、スイーツーー!!!
あーお腹すぎすて僕頭おかしくなつちやつたみたい、てか人多くない?今日一番に多い
気がする!流石有名場所は違うね、

桜 「食べる前におみくじ引こうよ」

普 「そうだね、食べるのは最後の楽しみにしよう

か

桜 「うん!!さあおみくじ引くぞおおおこれにし

ようと!!52番だ、すいません!!52番ください」

普 「僕は25番ください」

桜 「おおおおー!!大吉だ!!やった!!」

普 「僕は中吉だ!!なんか普通だ」

桜 「恋愛既になっているだって、誰だろう!!」

普 「恋愛叶わないだって……」

桜 「大丈夫!!気にしない気にしない」

普 「そうだね」

普 あーめっちゃシヨック、僕の好きな人は桜さんなのに、それが叶わないのか、がっかりだ、顔には出ないようにしよ!

普 「やっぱ清水寺はすごいね、これが舞台なのか

な?結構高い、あとなんか水を飲めばなんか

るやつなかったっけ?」

桜 「あつた気がするよ!あつ!あれじゃない?」

普 「せつかくだから飲むぞ!!」

桜 「私も飲むー!」

せめてこの水を飲んで、幸運を手に入れるぞ！

普 「美味しい！」

桜 「だね」

普 「よし!!!スイーツ食べよう」

桜 「行こう行こう」

さああとは食べるだけだあああああ、じゃあまず八つ橋!!!食べよう

普 「桜さん八つ橋!!」

桜 「美味しそう、いただきます!!!うま

い!!!」

あーうまい、八つ橋って色んな味があるのか、いちご、チョコ、オレンジ、たくさんありすぎてどれを食べたいのかわかんない。全部美味しそう

桜 「普君!!和菓子！」

普 「おー!いただきます!!!最高です。次

だんご!!!」

桜 「美味しいよ!!!清水寺さいこおお」

この後もたくさん清水寺のスイーツを食べた、もう食べすぎておなかいっぱいだよ!!
う食べれないよ!!

食べたあとはホテルに行き!!そこでゆっくり休んで!次の日に奈良に行った。奈良公園で鹿と戯れたり、鹿せんべいなどあげたりして、僕と桜さんのデートは幕を閉じた!

桜さんと出かけることが出来てほんによかったと思う。僕はまだ悩んでいる。生徒会に戻るか?戻らないか?今すぐ答えを出そうとは思わない、これから決めていこうと思う!!

デートは終わって、次に遠足が訪れる。

デートは終わってしまった……学校……

結局僕は告白することはできなかった。僕にそんなことやれつて無理でしょ。

僕と桜さんは昨日まで一緒に、遠出のデートをしていた、昨日は月曜日なのに、デートしていた、学校なのにデートしていた。普通に考えて……やばい……でも僕みたいなぼつちが1日いなくなつて変わらないう。そうだろう。だから以外に楽に学校に行けるかもしれない、生徒会に行く訳でもないし、ただ学校行つて授業受けて帰ってくるだけ、ただそれだけだ。僕はぼつち以外なんの取り柄のないやつだ。今日学校行つたつて、あれ昨日いなかったの？とかあついたんだとかだから、安心すぎるはずだよはずだつてはず……

なんじゃこりやああああああああああああああああ

えっ？何この黒板に貼つてあるやつ？はっ？大きくスキヤンダルつて……いやおかしいだろ。普が学校美少女と……何書いてんだボケええええええはあ僕の情緒不安定です。あはははもう学校いれないよ、授業すら受けられないつて、なんかまわりが騒がしいな

勝 「普がきたぞおおお!!」

普 「つて…… お前か……か……か……か……!!!」

勝 「いたあああああ」

あつなんか気分で殴っちゃったな。ははははざまあ見ろー!このやろ。こんなんじや
すまないけどな。ほんとだったら、もつとひどいことしてやったぞ、殴っただけなんて
感謝しろ!!

普 「やられて当然だろ」

勝 「強いって」

普 「僕の心の方が痛い」

勝 「半分ふざけてやりました」

普 「つてことは半分ガチなんだ」

勝 「うん」

普 「うん、じゃねええええ、おらああ」

勝 「だから痛いって」

普 「お前がいけない」

勝 「ごめんって」

「当分許さん」

勝 普 「普変わったな、デートしてよかったね。それ
でこそ普」

「えっ？」

勝 普 「ココ最近、お前元気なかつたじゃん。」

「まあ確かに……」

勝 普 「やっぱ生徒会戻って来いよ」

「考えさせて……」

勝 普 「いくらでも待ってやるよ、1年いや10年いや

100年いや1000年」

普 「死んでるじゃん」

勝 「ナイスツツコミ」

うわーめんどくさ！生徒会かあまだわかんないよ、僕は戻りたいのかな？戻りたいのかもしれないけど、戻る勇気がないのかもしれない。生徒会に戻らなければ、この先ずっとぼっち、戻れば遠足をみんなで楽しむことが出来る。もうちよい考えてみようかな？やっぱ僕は昔と違って変わったのかもしれない。僕の昔はひどかつたのかもしれない。でもその中で僕のことを幼稚園の時は咲さんが僕のこと助けてくれた、一緒に遊

んでくれた。咲さんがいなかったら確実にぼっちだっただろうな。小学校の時は小学校の時は優が仲良くしてくれた、小学校の時の思い出が懐かしいよ。今思い出した！夏さんって小学1年生の時の……隣だった子だった気がする!!!なんで今思い出したんだ？中学も優が仲良くしてくれた、優はみんなから人気だったから、僕と遊ぶ時間は、どんどん減っていった。生徒会のメンバーに今までお世話になってたんだ。この恩を仇で返すのは良くない！やっぱ僕は戻るべきなのかもしれない。

優 「待ってるぞ」

普 「え……」

優 はそれだけ言っただけか行つた。ほんとに待っていてくれるのかな？

秋 「普!!」

普 「秋!どうした?」

秋 「みんなが待ってるのはほんとだぞ、俺も待つ

てるよ、お前とはよく口論になるけどさあ楽

しいよ」

普 「みんな、待っていてくれるのか…… わかつ

た!!!僕戻るよ!うん!戻る!」

秋 「ほんとか?」

普 「うん!!!」

そこまで言われたら戻るしかないよ!!!でもみんなに謝る勇気がない………でも謝らないと!

秋 「やった!よし普!!今日も早速生徒会あるか

ら行こうよ!!今日謝った方がスッキリする

と思うよ」

普 「頑張る」

僕は生徒会に戻ることになった。

普通ですがなんですか?最後の遠足!!!

僕は結局、生徒会に戻ったみんなにあんな顔されたら、戻るしかないよ。僕が悪いのに、僕を待つてくれる人がいるなんて………こんなに嬉しいことないよ、申し訳ないっていう気持ちもあるけど、これから仲良くできるかどうかはわからない、一応前まではうまくやってたからできなくないとは思うけど………生徒会に戻ってこれたよ! みんなでまた遊びに行きたいな、てか明日行くのか、明日は、とうとう遠足!! やつとそこの日がやってきたよ、一時はどうなるかと思っただけど、みんなで行くことが出来て、めっちゃ嬉しい。明日は楽しむぞおおおおお!!

次の日遠足当日

はあー寝みい、横浜結構遠いから、早く起きないと行けないんだよな。集合場所は横浜現地だ。だけど僕はみんなで一緒に行くけどね。それがいいよ、一人で行ったら迷う確率高いし、人数が多くて迷った方が気が楽なところもあるし、横浜行ったことないんだよねー横浜より遠い場所ならこの前行ったけど………あー楽しかったな。また行きたいよ。行く機会ないかな? せっかくならみんなで行きたいよ! それだったら絶対楽

しい。って言うことを考えているうちに待ち合わせについたな、今日は僕が一番最初に来たんだ、珍しい、

いつもだったら、普おせえよーとか言われるのに、今日は僕が言える立場だ。

優 「普ー!!!こっちだぞー!!!」

普 「えっ」

なに!なんだよ結局俺が一番最後だったのね、なんか損した。

普 「みんなおはよう」

優 「おはよう!」

夏 「おはよう……」

春 「おはー!」

咲 「おはよう!!」

桜 「おはようー!」

勝 「おはよう!!」

秋 「おはようっす、今日は俺の神殿に案内しよ

うー!」

普 「相変わらずだな」

秋 「その通り!!俺は……」

普 「はいはい! 終わり!!」

優 「もうケンカとかやめろよ?」

普 「はーい」

秋 「はーい」

もうケンカはこりこりだよ、秋との喧嘩のせいで、僕は生徒会をやめようとしてたんだから、今思えばくだらないよな、なんか恥ずかしいよ。

優 「じゃあ電車乗るぞー!」

普 「うい!」

この人数で行動って結構迷惑だな、気をつけないと、問題事には巻き込まれたくないし、まあおそらく座れないだろう。朝だから、通勤ラッシュだね、死ぬ覚悟で乗らないと!!

優 「よしみんな急げー乗るぞー!! 普はゆっ

くりでいいぞーいなくてもいいし」

普 「ちよつと待て、ひどいこと言うな」

咲 「ほんと仲いいよね!」

優 「そんなことないっすよ」

こいつ照れてやがるぞ!! 優も随分変わったな。

春 「急げえええええ」

優 「急げー！ー！！」

普 「ふうなんとか間に合ったね。」

優 「よきよき」

普 「桜さん大丈夫？」

桜 「大丈夫！！ありがとう！」

勝 「いいねー」

桜、普 「だまれー！！」

勝 「すいまへーん」

桜さんと僕はこの前までお泊まりデートをしていた、それがばれてしまつて変な噂が流れてしまつている。まあ気にしないけど、でも桜さんに失礼だよな。次言つたやついたら、桜さんに謝つてもらおう！

優 「電車まだまだ長いし！しりとりしよー！」

普 「いいね！！」

勝 「じゃあやるか！！」

優 「順番はー、俺、普、勝、桜さん、咲さん、

夏さん、春さん、秋の順番で！！」

普 「わかった!!」

しりとりかあ懐かしいな、最後にやったのいつだろう、小学生の時ぐらいかな?確かそのぐらい!

優 「じゃあ行くよ!りんご」

普 「ゴリラ」

勝 「ラツパ」

桜 「パイナツプル」

咲 「ルーマニア」

夏 「アラブ首長国連邦」

春 「海」

秋 「みんなよく聞け俺の名は、神だ!!」

こいつそうやってくるのかよめんどくさ

優 「団子」

普 「胡麻」

勝 「マツチ」

桜 「血」

咲 「地理」

夏 「リンク」

春 「国」

秋 「人間よ！俺の言うことを聞くがよい」

よくそういう言葉出てくるよな、流石だよ

優 「いか」

普 「亀」

勝 「メダカ」

桜 「貝」

咲 「石」

夏 「しか」

春 「かに」

秋 「人間」

優 「あれ？負けちゃった？」

秋 「そんなことはないはず、」

普 「終了!!!」

優 「あーあ終わっちゃったよ」

秋 「すいません」

しりとり終わるのはや、まだ3週目ぐらいじゃなかったっけ?いつもみたいに中二病発言すればよかったのに、それだったらまだ続いてたかもね。てかたまあにやるしりとりって楽しいね。

普 「次はなににする?」

優 「なんでもいいぞ」

勝 「秋なんか話して!」

秋 「俺に任せなさい」

優 「任せた」

秋 「ある日俺が、公園に行ったんだよ、そうしたら、ブランコが揺れてた、人いないのにどうしてかな?と思ったら………ただ風が吹いてただけだった」

普 「なんだよその話し、もっとなんかないの?」

秋 「ない!!!」

普 「そうか」

こんな感じで、僕達の遠足が始まっていくのであった。

夏 桜

「じゃあ、青レンガ倉庫は行きたいよね」

「行ってみたい…… あそこ行ったら…… 涼しくな

りそう……」

「そうだよね」

「夏さん!写真撮りませんか?」

「夏さん!フアイト!」

「ええ…… はい…… 頑張ります……」

「ありがとうございます!はいっチーズ!!」

「どういたしまして……」

「普君私と写真撮ろうよー」

「ぼ、ぼく?」

「そうだよー」

「はい!」

「はいっチーズ!」

「ありがとうございます!!」

「いえいえ」

「ちっ……」

春 「咲さんどうかしました？」
 咲 「なんでもないよ」

あーみんな楽しそうだなーみんな横浜来たぐらいで大げさだよー海だあああああ
 あああああああ、僕がー番楽しそうかもー横浜かあー行きたいところいっぱいあるよ
 ー一日じゃ足りない、何日もほしいー長い間みんなと過ごせたらいいのに……

優 「海綺麗だな」

普 「それな」

優 「お前が戻ってきてくれて、ほんとに嬉しいよ、

お前とは小さい頃から仲良かったし、もう戻つてこなかったらどうしようかと思つたわ」

優はそんなこと思つてくれたんだ……嬉しいよ

普 「ありがとう」

優 「これからもよろしくな」

普 「うん!!」

咲 「優君!!普君!!行こー」

優 「今行く!!いこー!普!」

普 「うん!!」
僕は幸せものなんだな。

優 「みんなどこ行きたい?」
春 「まず!青レンガ倉庫行かない?暑いから、涼し

くなりそう!」

優 「ここからそう遠くないし、行こつか」

普 「賛成!」

秋 「我が神殿に向かう時が来たな……」

普 「お前何個神殿あるんだよ」

秋 「えーつと……数え切れないほどだ!」

普 「何個?」

秋 「いっぱいだ」

普 「わかんないんだ」

秋 「おぬし幼稚だな」

普 「オマエモナ」

優 「ギロリ」

普 「……………」

秋 「……………」

優 「ニコ」

なんだこれは、よしもう黙つところ。もう僕は生徒会やめないぞ

秋 「よしやめとこ、どっかの誰かさんみたいに、生

徒会やめたくないし！」

普 「ぶつ殺すぞおおおおおおおおお」

桜 「早く行こ！」

普 「はい！」

僕としたことが、変なことを口にしてしまった。いけないいけない。

青レンガ倉庫

優 「おおおおおおおおお」

普 「おおおおおおおおお」

勝 「おおおおおおおおお」

秋 「さあ我が神殿に」

普 「そこは合わせろよ！」

咲 「それな」

春 「それな」

桜 「それな」

夏 「それな」

優 「何だこの宗教団体みたいなのは」

普 「確かに、てかすごい青いね」

優 「まあ青レンガ倉庫って名前ついてるからなく青

レンガ倉庫って言ってる赤だったらおかしいだ

ろ?」

普 「それはわかっていますよ」

勝 「涼しい」

青レンガ倉庫はすごく青色で、見てるだけで涼しくなる。今日は暑いから丁度いい、さらにここは海沿いだからさらに涼しい、夏だったら最高の場所だ、これが冬だったら最悪だけどな、青レンガ倉庫初めて見たよ、てか青レンガ倉庫の中に入って入れるんだね。なかに、色々なお店が入ってるらしい……ってグーグル先生が言った。グーグル先生は頼もしいよ、うんうん!賢い、僕の数十倍はあるだろうな。てか人多くない?京都と同じぐらい人いるんだけど?絶対誰か迷子になるよね……

周りに誰もいないもどうしてかな？あーれーまさか僕迷子かな？頼むからやめてくれよ！LINEで呼ぶことも出来ないんだから、一回僕が生徒会をやめた時に全員消してしまつていたからだ…… あつ、桜さんなら持つてるかも？電話かけてみよ

「ただいま電話に出ることができません。」

どうしてだよおおおおおおおおお、せつかくみんなと集まったのに！結局ぼっちになつちやうの？迷子つてどこの小学生だよ、つて僕か？んなことやつてる場合じゃな——い、ここは中二病ごっこでもして気を紛らわせるか、

「みんななぜ我から離れるのだ？我に近づくのはまだ早いってわかつてるのか、えらいな、我の城に呼んでやろう。」

優 「お前何してるの？」

普 「えっ」

優 「何してるんだーニコ」

普 「なにもしてないでござんすよ」

優 「ござんす？」

普 「いや、それはー……………」

優 「まあいい、行くぞ！」

普 「はい」

やばい、完全に見られたよね?見られたよね?優スルーしてくれてありがとうございます
ます。あと迷子にならなくてよかったです。これからまだまだ楽しむぞおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおほおほ

普通ですがなんですか？最後の遠足!!! その3

僕は今、横浜に来てるうううううううううううううううううう!!! で今から、中華街にいくんだああああああああああああああああああああ、やばい僕テンションおかしい。僕はさっきまで、迷子になってんだ、変なセリフ言ってる時に、優に見つかって、なんとか誤魔化した、誤魔化したのか？すごい恥ずかしかったよ、僕なんて言っただっけ？ 思い出すのやめとこ、こういうのが黒歴史になっていくのかもしれないな、よし脳から消えろおおおお、よし消えたかな……………？

普

「ちゆうかがー!!!」

優

「盛り上がりすぎだろおおおおおお」

勝

「それなあああああああああああ」

春

「みんなうるさいよおおおお」

夏

「いえ……………い」

普

「無理に声出さなくていいよ!」

夏 「ごめんなさい……」

中華街は横浜遠足で…… 1 番期待してた場所なんだ、よくてればびでみるんだよ…… 肉まん食べてたり小籠包食べてたり、ごま団子食べてたり、超食べてみたいっでずっと思ってた! 卍 とりあえず僕が一番楽しみにしていた場所である……

桜 「肉まん食べたいな」

咲 「それね」

桜 「あちこちからいい匂いが……」

咲 「よだれたれそうだよ?」

桜 「すいません、でも美味しそおおお」

桜さん可愛いー!!

普 「早速食べに行くぞおおおおお」

優 「おおおおおおお!!!」

勝 「みんなテンション高いなあああああ」

春 「お前もだよおお」

勝 「お前もじゃん」

優 「小籠包のお店めっちゃ並んどるやん、じゃ

あ俺と普で、小籠包並んどくから、ほかの

もの買ってきてくれない？」

普 「ちよま……」

まあいいや、それで全部食べれるし、たまにはこういうのもありかな？

咲 「おっけー頼みます！」

優 「ういー」

優と小籠包を待つことになった…… 流石中華街だよ、すごい並んでる。どのぐら
いかかるんだ？

店員 「最後尾のお客様ただいま1時間待ちとなっております

おります」

普 「結構長いね」

優 「しようがないな、ほかもそのぐらいかかる

だろう。ここにきて食べないのももったい

ないし、並ぼ！」

普 「だな！」

秋 「俺もいるぞ、いつまでむしる？」

普 「あついたんだ……」

秋 「わかってたくせに」

普 「そんなことないよ……」

ここで待たないのはもったいないな、あーいい匂い早く食べたいよ、あの熱々でもちもちの食べ物をお口の中に入れてみたい。まだかな?まだかな?秋はとりま無視しとこ

優 「お前落ち着きないな……」

普 「それほどでも!」

優 「褒めてない」

春 「どこも混んでますね——!」

夏 「ですね」

勝 「なんで俺一人男?」

咲 「知らないよ、じゃあ勝一人でごま団子お願いします」

勝 「えええええええええつ、はい行つてきま

す!

咲 「よろしい……!!!」

春 「私たちはどうする?」

咲 「肉まんに並ぼう」

春 「おー」

桜 「おー」

夏 「おー……………」

咲 「レッツゴー!!!」

優 「やつと次だな、はあ長かったよ」

普 「やつとだね……嬉しくて泣いちゃうよ」

秋 「それは大げさだろ、まあ俺の力があれば、

並ばなくて済んだのにな」

優 「それ先言えし」

普 「てかお前にそんな力ないだろ」

秋 「それはどうかな？」

普 「はいはい……………」

店員 「いらつしやいませ！」

優 「普通の小籠包 8 人前ください」

店員 「かしこまりました！お会計、5 万円になります。

す。」

優 「えっ?」

店員 「冗談です。お会計4000円頂戴致します」

優 「あーびっくりした……了解です。」

最近の店員って冗談を言うようになったのか、科学も進歩したな……… って科学関係ないわーい!うわ、自分でボケて自分で突っ込むの恥ずかしい、もう二度とやりたくないよ、わんちゃんの中二病より、恥ずいかもしれない、横に中二病発言ずっとしてるやついるけどな………

秋 「なんだ? 我の眼帯は金色だああああ」

飽きないのかな? 僕だったら絶対無理、金色って……… どんなんだよ、どっからどう見てもお前黒じゃん。これだから中二病は………

—————

優 「みんな買えたか?」

咲 「買えたよ」

勝 「買えたー!」

優 「よしみんなで食べるぞおおおお」

秋 「うまそう、俺のお腹が疼く………」

普 「中二病ぽく言ってるだけだな」

秋 「そこら辺にいっぱいあるじゃん」

秋 「海の事言ってるの？」

秋 「そうとも言う」

優 「とりあえずみんなで海行くか！」

普 「だね」

勝 「そうだな」

春 「海だああああ」

桜 「海♪」

咲 「行きましょ！」

夏 「やった……………」

秋 「結局我が庭に来るのか……………」

普 「みんなで遊ぶぞおおおおお!!!」

こうして僕達は海に向かった。

海に向かつてる最中僕は優と話した、

普 「告白するの？」

優 「したい!!!でも…………… やっぱり今の関

係が崩れるのは嫌なんだ……このまま仲
良くみんなまでやっていきたい!もちろん気
持ちも伝えたい、それは後で伝える。とり
あえず今は楽しみたいな!

普 「僕もそう思うよ……」

優は優しいやつだな、優、僕はいつでも応援してるからね!!!

海 「海についたぞおおおおお!」

普 「綺麗だな」

咲 「だね!」

桜 「きれい……」

日 日が沈んで行ってるから、余計に綺麗、この景色は最高です。

優 「みんなで写真撮ろう!!!」

夏 「とろう……」

秋 「俺の素顔を見せる時が来たようだな、」

優 「はい、撮るよお!!!並んで、はいっちー」

——ず!!!!
みんないいのとれたよ
「おおお!!!」

———
遠足メチャ楽しい、なんと次回で普通ですがなんですか？最後になってしまおうそうです!!最後なんですが……… また続編を考えようかと思っっています!!!!
!!!いつになるかわからないそうです!!これからも僕、野丸普をよろしくね
!!!!!!

普通ですがなんですか?最終回

普 優 咲

「今回が最終回なってしまいました……」
「残念ですね……」

「色々ありましたね、普君が……生徒会
を……」

「何の話かなー?」

「呼んだ?」

「呼んでねええよ、中二病」

「だから、俺は中二病では無い……本物

だ!!!」

「はいはい……」

「俺は最強だぞ!だって神が俺に力をくれた

んだ!!!俺は選ばれし者だああああああ

ああああああああ

「黙りなさい!!」

咲

秋 普

秋 普 秋 普

秋 「すみません……………」

春 「はいはい!! 最終回始めますよ!!」

勝 「ちよちよ待てええええええええええ俺の出番

は?」

桜 「ない!」

勝 「ええええええ」

夏 「では、スター……ト!!!」

勝 「スター……」

横浜遠足も終わって、いつもの生活に戻った! 放課後になれば、自然と生徒会室に足を運ぶ、今も生徒会室に向かっていて、最中だ、もう自然に進んじやうんだよな、まあこの道、生徒会室にいくときぐらいしか通らないし、外は雪が降っている、もう雪が降る季節になったのか…… 白い雪がとても綺麗…… 白い白しろおおい!! 恥ずかしい…… 雪このまま降ったら、積もるだろうな、正直積もらないでほしい、靴が濡れるし、寒いし、雪は観察するだけで十分だな、それだけで和む、ありの……!! ままに……!! さらけ出すの……!! こんな映画なかったっけ? 気のせいか…… あ……寒い…… 早く生徒会室行……

普

「良くない！てかみんなありがとう

う!!!
う!!!

今日は僕の誕生日だったらしい、自分でも忘れていた、正直自分の誕生日なんて全く興味が無い、今まで家以外でお祝いされたことないし、親からならおめでと言われるけど……こんな盛大に祝われたのは初めてかもしれない。すごい嬉しい、みんなありがとう！

普

「みんな嬉しいな……ほんとにありがとう

うー!

優

「いいってことよ！さあ座って!!!お誕生

日席へどうぞ?」

普

「いいよー普通の席で!」

優

「ダメダメ!!しっかりお祝いされなさ

い!」

お母さんみたいだな、てか料理がすごい!!ケーキもあるし、お菓子もあるやん、いくらかかったんだろう?そういうことはあまり聞かない方がいいのかな?

秋

「さあ受け取るがよい!神に頼んで持つてきて

もらったものだ!!すごいいいものだぞ?」

普 「ありがとなー！」

秋 「開けてみ!!」

普 「おう……………これはなんだ?えーつとあれ

かゝあれだよなゝあれしかないよな」

秋 「俺の手作り、ソード!!!」

普 「あー剣なのね」

いや剣には見えねえええええ、まじで悩んだは、何かわからないのは失礼だし、なんとかがまかせてよかった!

優 「俺は!このパーティーを企画させてもらいま

したー！」

普 「ありがとう!!!」

咲 「私は!これ!!Tシャツ!!!」

普 「おおおおいしいですね!ありがとうございま

す!」

桜 「私は………… お揃いのキーホルダーを…………」

普 「いいの?」

桜 「うん…………」

「ありがとう!!早速つけるね!」

「うん!!」

「ヒューヒュー」

「うるせえ」

「これが俺からの誕生日プレゼントだ!」

「そうなの?ありがとうな!」

「えーつとですね……私です……な

んどですね……すいません!!忘れ

てました!」

「大丈夫!!!気にしないで!」

「私はこれ……ハンカチ……」

「おおお!ありがとうです!!!みんなほんと

にありがとね!!!こんな盛大にありがと

う!語彙力ないけど!!まじでありがとうご

ざいます!!!これからもよろしく願いま

ます!!!」

「さあ食べるぞおお!!!」

普 勝 普 勝 桜 普

普 夏 普

優

全員 「おおおおおおおおお!!!」

あー最高だよ、みんなありがとうね!みんなに誕生日の時に盛大に祝わないと!!あー
美味しい……!

10年後

僕は野丸普!!26歳です!!高校は普通に卒業して!大学に行き……今は、小説家です!!!大学生の時に書いた本が売れて……有名になりました!!!大学生で書いた本が、100万部を超えて!小説家になっちゃいました!詳しいこと言うと長くなっちゃうので、今は省略します!サイン会などもあり、普通に有名です!もう普通じゃないです!完璧な人生を送ってますね、高校生の時の生徒会の人達には、6年あってないです!最後に会ったのは成人式!みんな大人っぽくなってました!優は一流企業に入って、勝はゲームクリエイターになり、秋は?よくわからないです!咲さんと桜さんはフアツシヨンデザイナーになり、夏さんは幼稚園の先生!春さんは、有名アイドルになっていた、たまあにテレビで見かけます!みんなそれぞれの道を進んで行ってる!!高校生の時に想像してない、職業についてた人がほとんどでしょう!何はあるかわからないのが人生ですね!僕もこの先何があるかわからないです!気を引き締めて、小説家として活動し

ていこうと思つてます！

そうだ、今僕が向かつてるのは！東京都の池袋で行われる、僕のサイン会です！ちよつと恥ずかしい、池袋に行ったのつて確か高校一年生の時に桜さんと行った気がするな…… 久しぶりだから昔のことを思い出しながら！サイン会に望みます!!

サイン会

あーここは!!!ムーンシャインじゃないか！懐かしいなあ…… ここに来たな、なんか服とか買った気がする？ 優も夏さんと一緒にいて、確かどつかのお店に先生モイた気がする!! あー色々思い出すな、あつサイン会始まる!!

普

「よろしくお願ひします!!!」

おおー！人多いな！流石！東京は違うな！めっちゃ並んどるやん！僕つてそんなに、有名なの？なんかモチベーション上がるな！

ファン

「先生の作品大好きです!!」

普

「ありがとう！これからもよろしくね！」

ファン

「はいい!!! ありがとうごさいます

た!!!」

ファン2

「先生いつも読んでます!!」

普 「ありがとうございます!これからお願いします!」

ファン2 「はい!!!」

みんな嬉しいな!ファンがいるなんて!!最高かよ!

ファン3 「お願いします!」

普 「はーい…… えっ?」

ファン3 「お久しぶりだね!この場所懐かしいね!」

普 「えっ……」